
沙耶の唄
SAYANOUTA
大槻涼樹・虚淵玄
(Nitroplus)
原作脚本／虚淵玄(Nitroplus)
原作／Nitroplus
Illustration／中央東口
e-FICTIONS
SEIKAISHA


沙耶の唄
SAYANOUTA
大槻涼樹•虚淵玄
(Nitroplus)
原作脚本／虚淵玄 (Nitroplus)
原作／Nitroplus
Illustration／中央東口
e-FICTIONS
SEIKAISHA

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。
ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

星海社
FICTIONS

沙耶の唄

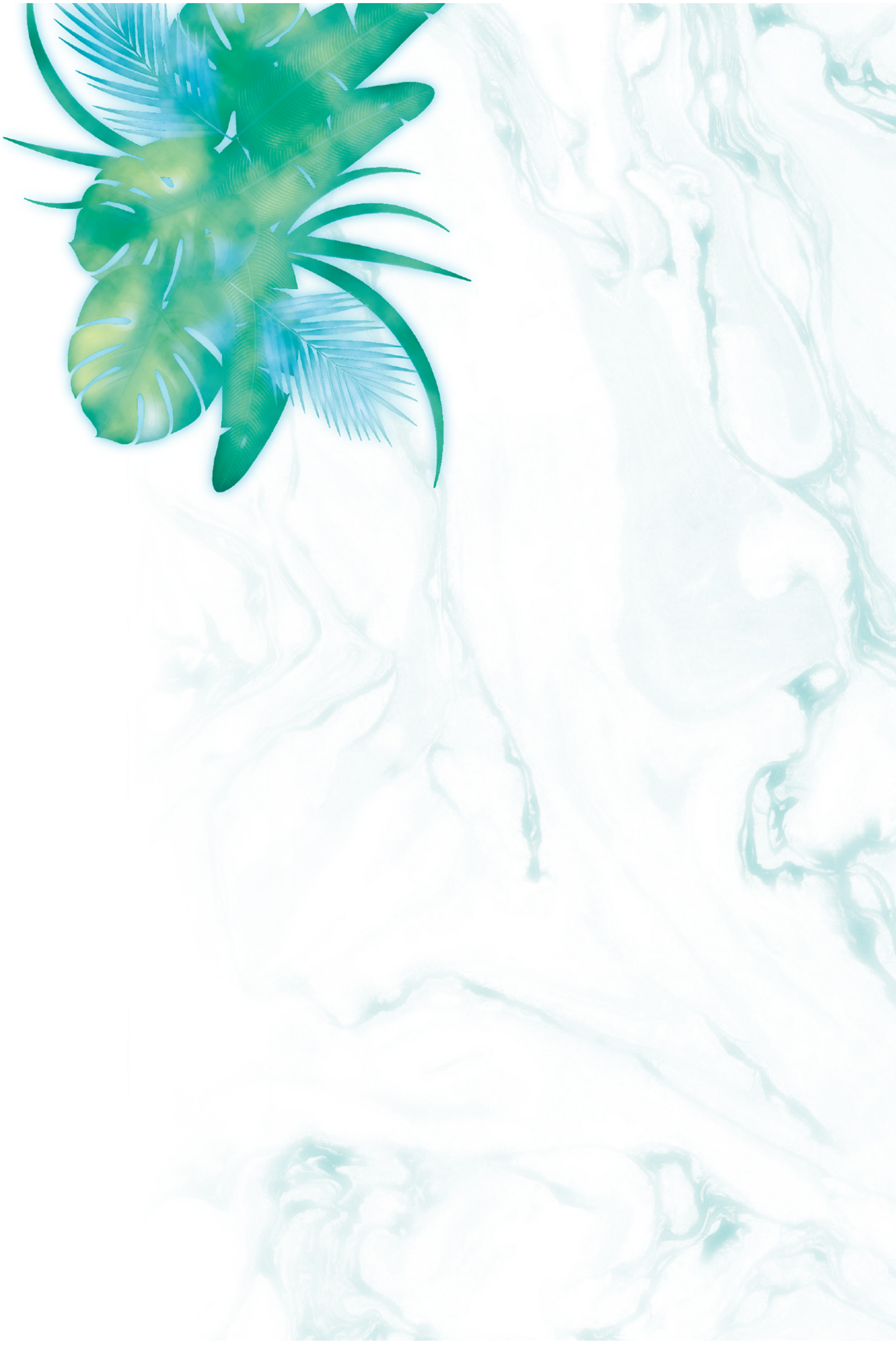
大槻涼樹・虚淵玄（Nitroplus）

原作脚本／虚淵玄（Nitroplus）
原作／Nitroplus
Illustration／中央東口

星海社

沙耶の唄

SAYANOUTA



第一章
第二章
第三章
第四章
エピローグ





第一章

カフェテリア　郁紀

『ネェネェ、今度ノすﾀfｻf劔。ｳI撥D錐年ハ、ドッカ涣ｨtーとモ遊べﾋ坦ｼ牴xLナイ？』
ぶよぶよと蠢(うごめ)く肉塊が、暗く粘ついた声でそう言った。
『すﾎｻyﾈ祭ォ？　ワザワｴｬWCQｴﾋ]?ｱ角マデ行ッ閂ｧ:泚麸と？』
『ハハ、勘(熙ｾ&ヤッテクレヨ津久葉。コイツ今WCQｴﾋ]?ｱ角咨まッテンダ。ナンｶｵf&ノ前、コ6GBbｭlナッテ始メテすけーﾑVﾜｭｱ性ﾀ縷ンダカラサ』
似たような肉塊があと三つ、目の前に並んでいる。テーブルを囲み、カップに注がれた汚水をさも美味(うま)そうに啜(すす)り上げながら、金切り声と呻(うな)り声とそれ以外の奇声を交(か)わしあっている。
『ナニｮｸC。凪5ｭーとシタコトナﾁw蚪/1ノガソンwPﾑ麓ﾅ(思議？』

『二十Aｨ像ナッテ初y(VQ)ヴッテノハ、今日日ソウソウイ梗WfA繙ャナイカナ？』
『子供A丿嫡ハ何トナク怖さ1駐タノヨ。アP㎏麓、ナン￠c舐物ミタイデサ』
注意すれば、こいつらの立てる『音』の言わんとするところは酌（く）み取れなくもない。おかげで僕は、辛うじてこいつらへの不信感を誤魔化せるギリギリに留まっていられた。
ただ、勝手に『会話』しているうちは放っておけばいいが、こちらに話しかけてきたときまで無視するわけにもいかない。そこが面倒なところだ。姿形はどうあれ、こいつらは僕の『友人』ということになっている。もちろん否定したいのは山々だが――ここに至るまでの三ヶ月を経て、僕はもう、とうに抵抗を諦めていた。
これが悪夢であってくれればと、どれほど願ったことだろう。だが何度眠れぬ夜を越えても、何度虚（うつ）ろな朝を迎えても、世界は変わらず醜（みにく）く歪んだ姿のままだった。
よって、僕はこれからもこいつらの中に交じり、こいつらの一員であるふりをして、そうして暮らしていかなければならない。これから続く一生涯のあいだ独り、ずっと。
『デモ、イキナ9悋ｻッテ滑レ啅昃？　青海$ｰャン、悧㉜Dナイ？』
『要領ハす羃ｴｯｮ促ソウ変ワルモ晴ジャナイ丿Lｵ4ナ。重心ヲ羃ｴｯｮ促シテ、靴ノ羚2ョ縁デこん？
cPPーるスル感覚トカ』
口調から察するにこいつは『耕司（こうじ）』だ。その隣でキィキィといちばん盛んに啼（な）いているのが『青海（おうみ）』だろう。

となれば、僕の隣にいる『これ』は『瑶（よう）』だ。かつては清楚な花を思わせた端整な容貌も、今は見る影もない。すぐ傍でぷるぷるぷると身を震わせながら、そいつが放つ吐瀉物（としゃぶつ）のような饐（す）えた臭いを、僕はつとめて意識しないようにしていた。



『耕司ニソウ翼罘u」帀モンダカラサ、騙サレタト鵬!XEjヤッテミタわe#nh。ソシタ[3緻ウ楽シクッテ』

『フゥン……ワタシモ見テミ:h希ナ。青海チャン抝隘けーとヤルトコロ』

『ダカラサ、ネ？　今度ノすき滑策行。ツイデZ塾ｨけーと旅行ニシチャエバ濕ｷオイシク鬆ム3イッテわけヨ』

そう、何もかもが変わり果ててしまった。

目に映る物すべてが姿を変え、なのに関係性だけはそのまま残った。僕はこいつらと同じ大学に通うサークル仲間で、かつてはかなり親しい付き合いがあった。冬休みには毎年連れだってスキー旅行に行ったりもした。

今となっては懐かしい、もう決して戻らない日々の思い出。

いっそこいつらも含めて、誰も彼もが僕のことを覚えていなければ、どれだけ幸せだった事だろう。宇宙人か何かに攫(さら)われて、一人見知らぬ惑星にでもふり落とされたのだと思えば、その方がまだ慰(なぐさ)めがあった。

だが、ここは間違いなく地球で、日本で。僕が産まれ育ち、二十年間慣れ親しんだ街だった。

そして関係性が――僕が、これまで疑問の欠片(かけら)すら抱くことなく所属してきた社会があり、それらは今も厳然(げんぜん)とあり続けている。

ただ、僕一人にだけそう見えなくなってしまった――それだけのことだ。

世界はもう、僕の知る姿をしていない。僕には帰る場所がない。

『デ翫R9ァ……すけーとハす烏鶫ｲBV%んくニ行ケバデ肱ルジャナイ。ワザワザすｷG－場ニ行ッテマデ、ヤル？』

『ダカラ、屋内ジャ愧Tテサ、屋苞ｧ＋けーと。凍ッタ塘1Dpデ滑レルトコロ』

『ソンナ都合ノイ冕トコ、アルカナァ……何ダカスッゴク霞⁄デソウ』

ともかく、今のこいつらの話題が何であれ、益体（やくたい）もない内容なのは察しがつく。聞いているふりだけして黙っていればいい。

そう思った矢先――

『ナァ郁紀（フミノリ）、オ前ハドウ思ウ？』

肉塊のひとつが、ぎょろり、と血走った目玉を裏返してこっちを凝視してきた。僕に話しかけているのだ。

「どう……って？」

溢（あふ）れそうになる嫌悪感を必死に押し隠しながら、つとめて何気ない返答を試みる。だが声が掠（かす）れ、思うようにはうまくいかない。

三体の化け物が僕を見る。

『イヤ、ダカラサ。今年ノ冬ノすｱ9)ｽ=ダヨ。オ前モ――行クヨナ？』

語りかけてくる肉塊の、頭頂部にある孔(あな)がグチャグチャと蠢き、吐き気を催すような臭気と言葉めいた異音を同時に吐き出す。あれがつまり耕司の頭で、顔で、口なわけだ。少なくとも、三ヶ月前の僕にはそう見えていたであろう部位。

「わからない」

直視はできなかった。さりげなく目を逸(そ)らして、僕は当たり障りのない返事をした。

『何カ、他ノ予定デモアルノカ？』

「いや、別に」

耕司——親友だった。この場にいる皆がそうだ。かけがえのない人たちばかりだった。なかには、それ以上の関係になってくれようとした人さえいたのだ。だが目の前の彼らには、もうその頃の面影(おもかげ)すらない。その寂しさに、悲しみに泣いた夜は数知れない。

そうやって三ヶ月。泣いて、泣きはらして、喪失感の果てにはただ嫌悪だけが残った。耕司らしき肉塊と青海らしき肉塊と揺らしき肉塊に囲まれて、僕は以前と何一つ変わらない生活を装う茶番を続けている。それが今の僕に課せられた題目だ。これをこなせなければ、僕はまた病院へ送られることになる。そして、おそらく次は、二度と外には出られない。

それだけは願い下げだった。

『ナァ……別ニ、運動スルノガ傷ニ障ルトカ、ソウイウワケデモナインダロ？』

「どうだろうな。——今日の診療で、先生に聞いてみる」

我慢の限界だった。こいつらの姿を眺めるのも、おぞましい声を聴いているのも。

僕は性急に席から立ちあがる。

『オイ、フミノリ――』

その発声器官とおぼしき肉孔の周囲で靡(たなび)く繊毛から、糸を引き粘液の飛沫(しぶき)が僕の顔に降りかかった。とっさに顔を庇(かば)ったが間に合わず、次の瞬間、腐った卵の中身のような汚臭の汁が僕の顔をべったりと濡(ぬ)らしていた。

もうたくさんだ。何もかもどうでもいい。椅子(いす)なり机なり、いますぐ手に届く物を片っ端から摑(つか)み取ってこいつに叩きつけて、息の根が止まるまで叩きつけて、すべてを終わりにしてしまいたい。

――衝動を、僕は寸前で堪(こら)えた。

気取られてはいけない。僕の目にどう見えていようと、この世界で正常なのは彼らの方だ。異常なのは僕の方なんだ。

「だから、今日も診療なんだ。……もう時間だから」

愛想笑いを浮かべたつもりだったが、上手くいったかどうかは判(わか)らない。僕は財布に手を入れ、最初に指に触れた紙幣を確かめもせずにテーブルへと置いた。どの額面でも、頼んだ飲み物の代金には充分なはずだ。釣りはどうでもいい。ただただ、一刻も早くこの場を立ち去りたい。

「それじゃ」

文字通り逃げるようにして、僕はその場を後にした。
僕は狂ってなんかいない。

カフェテリア　瑶

「ねぇねぇ、今度のスキーだけどさ。今年は、どっかスケートも遊べる所にしない？」
高畠（たかはた）青海の提案に、津久葉（つくば）瑶は眉をひそめた。
「スケートぉ？　わざわざスキー場にまで行ってスケート？」
「ハハ、勘弁してやってくれよ津久葉。こいつ今そっちにハマってんだ」
笑いながら、戸尾（とのお）耕司が青海の発言をフォローする。彼女の言動の突飛さは今に始まったことではない。それを補佐するのが、青梅の彼氏である耕司の常だった。
「なんせ青海ってさ、この前、この歳になって初めてスケートやったんだ」
「なによぅ。スケートしたことなかったのがそんなに不思議？」
「二十歳になって初体験ってのは、今日日（きょうび）そうそういないんじゃないかな？」
「子供の頃は何となく怖かったのよ。あの靴、なんだか刃物みたいでさ」
「でも、いきなりやって滑れたの？　青海ちゃん、凄くない？」

「要領はスキーとそう変わるもんじゃないからな。重心を前に出して、靴の前の縁でコントロールする感覚とか」

「耕司にそう言われたもんだからさ、騙されたと思ってやってみたワケよ。そしたらもう楽しくって」

　そうか、デートに行ったんだ。——微かな羨望がちくりと瑶の胸を刺す。

　瑶の目から見ても、二人は似合いのカップルだ。ときどきこうして妬けることもある。目の前にしていると、どうしても自分の運のなさが思いやられるのだ。

「ふぅん……私も見てみたいな。青海ちゃんがスケートやるところ」

　内心の乱れを紛らわせるべく、瑶はつとめて明るい声を出した。

　羨ましいとか、自分に運がないとか——そんな風に思うべきではない。瑶にだって大切に思う相手はいる。その相手が瑶との時間を過ごせないのは、彼に途方もない災いが降りかかったからだ。それこそ運がないどころでは済まされない、正真正銘の不幸が。

「だからさ、ね？　今度のスキー旅行。ついでにスケート旅行にしちゃえば二倍おいしく楽しいってワケよ」

「でもさぁ……スケートはスケートリンクに行けばできるじゃない。わざわざスキー場に行ってまで、やる？」

「だから、屋内じゃなくてさ、屋外スケート。凍った湖とかで滑れるところ」

「そんな都合のいいとこ、あるかなぁ……何だかすっごく混んでそう」
言いながら、瑶はそれと気取られないように、そっと『彼』の横顔を窺(うかが)い見る。そう、さっきから耕司と青海の談笑に瑶が加わっている形の会話しかないが、今このカフェテリアでテーブルを囲んでいるのは二組のカップルなのだった。つまりもう一人、果たして自分の彼氏……と呼んでいいのかどうか。曖昧(あいまい)なままの人物が同席している。
「なぁ郁紀、お前はどう思う？」
耕司が話を振る。もしかしたら、瑶の内心の痛みを察したのかもしれない。そうした心遣いの細やかな優しさが彼にはあった。
「どう……って？」
話を振られた、瑶の隣の席の『彼』――匂坂(さきさか)郁紀は、返事にもならない呟きで曖昧に混ぜ返した。
「いや、だからさ。今年の冬のスキーだよ。お前も――行くよな？」
まるで腫れ物に触れるかのようにやんわりと折り返す。これが数ヶ月前ならば、耕司はこんな気後れした態度を見せず、毅然(きぜん)として郁紀の態度を正そうとしただろう。そういう遠慮のいらない友情を、二人は長年の付き合いの中で築いてきたはずだった。
「わからない」
対して、郁紀の返事は短くそっけないものだった。

「何か、他の予定でもあるのか？」
「いや、別に」
親友であるはずの耕司ですら、今の郁紀には以前のような態度で接することができないでいる。ましてや瑶などは、どんな言葉をかけていいのかすら判らない。
あの夏の終わりの日の出来事は、数ヶ月経った今もなお深い爪痕を残している。郁紀だけでなく、彼を取り巻くすべての人々に。
「なぁ……別に、運動するのが傷に障るとか、そういうわけでもないんだろ？」
「どうだろうな。――今日の診療で、先生に聞いてみる」
そう答えるのが我慢の限界だとでも言わんばかりに、郁紀はそそくさと席から立ち上がった。
「おい、郁紀――」
さすがに少し咎める語調で、耕司が郁紀を呼び止める。
すると――郁紀は怯えて身を竦めるかのような勢いで腕を上げ、顔を庇った。
もしかしたら、耕司の口から唾が飛んだのかもしれない。だとしても、それは互いに会話を交わしていればまれに起こり得る程度のことだったはずで、とても躍起になって身を庇うようなことではなかった。ましてや相手は耕司なのだ。見ず知らずの人間ならばともかく、その仲に瑶や青海が嫉妬することもあったほどの朋友である。

たとえ真相がどこにあったとしても不作法で、かつての郁紀からは想像もできない程に思いやりのない態度だった。

「だから、今日も診療なんだ。……もう時間だから」

吐き捨てるようにそう言う郁紀の口調には、気まずくなった空気を和ませようなどという配慮は欠片ほどもなかった。自分のコーヒー代のつもりか、テーブルに紙幣を置く手つきさえ、なにか穢らわしいものを振り捨てる所作に見える。

「それじゃ」

逃げるように——そんな比喩そのままに、郁紀はカフェテリアを出ていった。

残された三人は重い沈黙を抱えたまま、テーブルに視線を落としていた。置き去りにされた一万円札が、所在なげに皆の視線に耐えている。

よく見れば、郁紀の注文したコーヒーには一口も飲んだ様子がなかった。

「やってられないわね、もう」

溜息交じりに呟く青海。そんな彼女を咎めるように、耕司が小さくかぶりを振る。

「郁紀には——もう少し時間が必要なんだと思う」

「だってもう三ヶ月よ？　何なのよアレ!?　付きあってるこっちまで変になりそう」

「俺だってわからない。わかるはずもないと思う。お前だって想像つくか？　あんな惨い形で家族全員を奪われて……平気でいられるわけないよ」

それは、正しく悲劇だった。
タンクローリーの横転事故。巻き込まれた匂坂家の車は原形を留めていなかった。郁紀の父母の遺体は、どちらかの判別さえ難しい有様だったという。
郁紀自身もまた、一時は生存を絶望視されていた。彼が今こうして退院し、社会生活に復帰しているのは奇跡以外の何物でもない。
「見舞いに行ったときなんて、もっとひどかったじゃないか。俺たちのことすら判らずに怯えて、暴れて、ベッドに縛りつけられて……。あの時のことを考えれば、今は、よくあそこまで立ち直ってくれたと思う」
「それにしたって変よ、匂坂くん。あたしたちのこと見る目つき、アレ何なの？　まるでこっちが人間じゃないみたいな――」
「よせ、青海」
耕司が強い語調で制止したのは、親友へというよりもむしろ、瑶への心遣いからだったのだろう。そしてそんな耕司の優しさが嬉しい反面、それに甘えてしまう自分の不甲斐のなさが恨めしかった。
郁紀に想いを寄せたのは、あくまで瑶一人の気持ちの問題だ。ついに勇気を出して彼に告白したとき、その場では郁紀が返事をしてくれなかったのも、失望するようなことではなかった。む

しろ即答を避け、彼女の気持ちを受け止めてくれた郁紀の誠実さに対し、よりいっそうの好感を抱いたほどだ。

ノーと言われなかった。それだけで、二人の仲はもう成立したようなものだと耕司や青海は楽観視してはしゃいでいたが——それきりだった。

いまだに郁紀の回答はない。

それもそのはずで、想いを告げた瑶が次に郁紀と再会したのは、その一週間後——事故により重傷を負った彼との、集中治療室の窓ガラス越しというものだった。そして永遠とも思えるような五十日が過ぎ、退院した郁紀は……どこか人が違っていた。事故以前にようやく遂げた告白も、果たして憶えてくれているのかどうか……。

彼女の想いは宙吊りにされたまま、冬を迎えようとしていた。

病院　涼子

丹保（たんぼ）涼子（りょうこ）医師にとって、その青年はひどく厄介な患者だった。

「その後の経過はどうですか？　匂坂さん」

「いえ、別段……これといって問題もなく」

まるで感情というものが抜け落ちたような、硬く平滑な口調。

彼が自らと世界との間に張り巡らせた障壁は、心理カウンセラーなどではない涼子の目にも明らかなほど、はっきりとそびえ立っている。

「吐き気や目眩（めまい）、幻聴や幻覚といった体験は？」

「いえ、何も」

匂坂の視線は涼子に向けられているようでいて、ほんのわずか斜め下に逸れていた。上辺だけは会話の体裁を装っているが、その実、完全に拒絶（きょぜつ）されている。

これでは問診が成り立つわけがない。涼子は溜息をついてカルテを置く。

「匂坂さん……ご承知のように、あなたが当院で受けた処置は、脳神経医学の分野では世界的にも最先端の治療です」

マイクロマシンによる硬膜下血腫（こうまくかけっしゅ）の除去――日本ではまだ、ここT大付属病院にしか設備のない治療法であり、あの時点で唯一、匂坂郁紀の生命を救い得る手段だった。

「つまり同時に、まだまだ臨床データの出揃っていない、未成熟な治療法であるということも言えてしまいます。医療に携わる者として、脅かすような言い方は適切ではありませんが……施術後に重篤（じゅうとく）な障害をきたすようなことだって決してないとは言えません。予後の経過には、充分に注意する必要があります」

故にこその、週に一度の検診である。涼子としてはもう少し真面目な態度で患者に協力してもらいたい。

「重篤な障害、ですか」

匂坂郁紀の口元が、ぴくりと動く。

自嘲のようにも見える、皮肉めいた——だがその口角の歪みが意味するところを涼子が理解できないうちに、彼はまた元の無表情に戻っていた。そして不意を衝くように、逆に質問をしてくる。

「先週のＭＲＩはどうでした？」

ＭＲＩ……磁気共鳴撮像のことだ。これにより、脳外科医は患者の頭を切開することなく脳の状態をつぶさに観察できるが、あまり患者側から切り出すような単語ではない。涼子はあらためて彼のプロフィールを思い出した。

「そういえばあなたは、医者の卵だったわね」

「先生が心配しているような脳機能不全は、画像診断だけでも色々と判ることが多いはずですよね。何か注意が必要な異常があったんですか？」

「……いいえ」

異常はない。微塵もなかった。手術は厳しい成功率をクリアして、奇跡的とも言える成果を挙げていた。

だが、それでも涼子には何かが引っかかる。

あえて口幅(くちはば)ったい言い方をするならば『医者の勘』だ。この患者はどこかおかしい。斜に構えた態度の裏に、何かを隠しているような気がしてならない。

それがもし単純ではない、非器質性の障害などであればお手上げだ。彼自身が異常を訴えてこない限り、こちらとしては対処のしようがない。

「では、やはり問題はないとしか。現に僕はこうして、病院の外でも何不自由なく生活できています」

「匂坂さん、ただでさえ難易度の高い手術です。予後の観察に予断が禁物なのはわかるでしょう？　もう少し私たちを信頼してもらいませんと」

「……信頼。では、ひとつ相談に乗ってもらえますか？」

「ええ、もちろん」

苛立(いらだ)ちを笑顔で覆い隠して涼子は頷く。

「じゃあ、先週の話の続きなんですが。——先生。あれから奥涯(おうがい)教授については何か判りましたか？」

「……」

返答に窮(きゅう)して、涼子は笑顔を強張らせる。

結局同じだ。先週も似たような会話の流れで、この患者はこの話題を持ち出した。部外者の彼が、決して知るはずのない人物についての質問を。

「奥涯教授のことは、その……あなたの治療とは、何の関係もないでしょう？」
「信頼しろと言った矢先に、いきなり隠し事ですか？」
主に自己の生命に対する焦りから、こうした論理の飛躍により医師を困らせる患者は少なくない。だが匂坂の態度は、涼子にはそれらとはどこか異なるように感じられた。この冷徹さは医師に対する質問ではなく、確信を持って行われる被疑者への詰問だ。
「なにぶん、かなり前にここを辞められた方ですからね……私としても、交流があったわけではないですし……」
「辞めた理由に関しては」
「さあ。聞き及んでいません。何か個人的なものでは？」
最初こそ怯んだものの、以降は淀みなく答える。最初から嘘をつく覚悟でいれば、涼子もこうして鉄面皮を装えるのだ。
「それにしても、匂坂さん、なぜあなたはそんなに奥涯教授に拘るんです？　お知り合いですか？」
「教授はいま失踪中なんです。知ってましたか？」
「いいえ」
返答がやや拙速すぎたかもしれない。もう少し驚いた顔をすべきだっただろうか。

「近頃、教授の身内の人間と懇意にしていましてね。その人の願いで、行方を捜しているんです」

――身内？　涼子は匂坂の言葉に眉をひそめた。

「奥涯教授に近縁の方はおられないはずですが？」

「ほう、誰から聞きました？」

「それは……噂話に」

個人的な交流はなかったと、さっきそう言ったばかりだった。

「なるほど。そんなことが噂になる程度には、奥涯教授は有名人だったわけですね？」

「まぁ、一風変わった人だったみたいですね」

「なのに誰も、彼が大学を辞めた理由を知らないと？」

「……」

涼子は黙り込んだ。笑顔で取り繕うにも限度がある。

だが、ここにきてようやく匂坂も、涼子の様子を察したものらしい。妙に硬かった口調をほんの少しだけ和らげた。

「先生、僕はどうしても奥涯教授に会わなきゃならないんです。教授の失踪で、行く当てを失って困ってる子がいるんですよ。どうか力になってもらえませんか？」

「それはむしろ警察の領分なんじゃないかしら」

すげなく言い放ったが、実のところその提案は危険な賭(か)けだった。奥涯雅彦(まさひこ)の失踪が警察沙汰になれば、当然捜査は大学にも及ぶこととなるだろう。だが教授がしでかしたあの不始末は、決して公(おおやけ)にはできることではない。大学は、いよいよ一丸となって証拠隠滅に当たらねばならなくなる。

そうなれば、涼子自身もまた――

だが、匂坂が本当に捜索願を出すことはまずあるまい。理由はわからないが、匂坂の言葉は嘘だ。奥涯雅彦に彼の行方を気にかけるような親族は存在しない。その点は入念に確認を取っている。だからこそあの事件は、人知れず葬(ほうむ)り去ることができたのだ。

それにしても――ただの患者であるという以外にこのT大とは何の縁もない匂坂が、どうして奥涯のことを知ったのか。

「匂坂さん、私の知っている範囲のことは喜んでお教えします。ですが、奥涯教授は今年の四月に辞表を出され、以降は何の音信もない状態なんです。どこか長期の旅行にでも行かれたとか……とにかく、大学側では把握していないんです」

「……そうですか」

食い下がるかと思いきや、匂坂はあっさりと引き下がった。

依然、匂坂の予後は不安要素が多く、また彼と奥涯雅彦とを結ぶ謎の糸に至っては不安を通り越して不穏ですらある。

それでも今、涼子にできることは何もない。この患者が心を開いてくれない限り。
わずかに躊躇(ちゅうちょ)した後、涼子は電子カルテにひと言だけ『経過良好』と本日付けの診断を追記した。
「匂坂さん、それでは来週の診察ですが、今日と同じ四時でも――」
言いさしたところで、扉の音にモニターから目を上げる。
匂坂はすでに椅子を立ち、診察室を出ていくところだった。

帰宅　郁紀

この、豚の臓物をぶちまけて四方を塗りたくったかのような光景が、病院の廊下(ろうか)だということは理解できている。
通常、そこに相応(ふさわ)しい色は？　もちろん白だ。あるいは淡く暖かな色であって、間違ってもこんな汚泥(おでい)を捏(こ)ねたような色ではない。だがおそらく、先刻からそこいらを行き来している腐肉の塊みたいな生物たちには、この廊下も、そう在(あ)るべくして在るように、相応しい形で見えているに違いない。
解(わか)っている。この廊下が本当は『白い』ということも。そして、このおぞましい肉塊たちが実は『人間』なのだということも。

つまり、おかしいのは僕の方だ。それが認識できているから、僕はまだ日常生活を送っていられる。

ここT大医学部に比べれば遙かにランクが落ちるとはいえ、僕もまた歴とした医大生であり、奇しくも脳神経外科学を専攻している。自分の身に起こったことは——信じがたいとはいえ——概ねのところで想像がつく。

これは病理的なものではない。おそらくは失認症、認知障害の一種だろう。

僕と同じ治療を受けて、脳障害になった患者もいると、そう丹保医師——と名乗る肉の塊——も言っていた。つまりは僕もそうした失敗例の一人というわけだ。なにが天下のT大医学部だ、なにが『重篤な障害』だ。ざまぁみろ……そう、あの知った風な女医に嘲笑をぶつけてやりたくなる。

とはいえ、執刀した医師たちを恨む気持ちはない。彼らが僕の命の恩人であることに変わりはない。手術の成功率がきわめて低かったことも、またそれ以外に僕が助かる道はなかったことも充分に理解できている。

要するに、僕は運がなかった。ただそれだけのことに尽きるのだ。

推測が正しければ、この症状には有効な治療法もない。僕は一生涯、この障害を抱えたまま、それと折り合いをつけて生きていくより他にない。補聴器や車椅子に慣れるのと同じように、僕はこの吐き気を催すような『現実』に慣れるしかないのだ。

もちろん辛かった。たやすく受け入れられることではなかった。
だが今は、まるきり絶望しているわけではない。こんな僕にも希望はあった。一縷(いちる)ではあるが、僕にとっては眩しい光が。
おぞましい世界を少しでも見ないで済むよう、僕は可能な限り足元に視線を落としたままで家路を急いだ。

山の手の郊外にある、閑静(かんせい)な住宅街の一軒家。この不必要にでかい家屋(かおく)が、今では丸ごと僕一人のものだ。
三ヶ月前、共に奇禍(きか)に遭(あ)った父と母は僕を置いて他界した。集中治療室にいた僕は、二人の葬儀にすら出られなかった。父の経営していた会社は人手に渡ったが、この家と、当面の暮らしに困らぬだけの遺産は手元に残った。
悲しいか、と問われれば当然悲しい。だが、事故によりこうした気儘(きまま)な一人暮らしの立場を手に入れたことが、結果として僕の救いに繋(つな)がったのは皮肉というよりない。もしも両親が健在だったなら、素性もわからぬ女性を同じ屋根の下に入れることなど、決して許しはしなかっただろうから——
「おかえり！」
玄関を開けた僕を、台所から弾むような声が出迎える。

鈴の音のように透き通った、紛れもない人間の声。それを耳にした途端、今日一日の間に聴かされ続けた奇声と不協和音の名残が、洗い流されるようにして僕の脳裏から消えていく。

「ただいま、沙耶」

奥から廊下を駆けてくる、てちてちと響く素足の音さえ耳に心地よい。もう余所では決して叶わない、沙耶と住まうこの家でのみ聴くことができる温かな音色。

「遅かったね。ちょっと心配しちゃったぞ」

「ごめんよ。今日は病院に寄る日だったから」

「あ、そうだっけ」

彼女の微笑み。小首をかしげるその仕草。僕が失ったもののすべてがそこにある。事故の後に出遭った中でただ一人――もしかしたら世界に一人かもしれない――僕の認知障害の例外にある少女。

たしかに肌は白く見えすぎる。瞳の色も奇異に感じる。髪の色だっておそらく本来とは違っているのだろう。だが容姿は人間の、紛れもないヒトの肢体そのものだ。

姿だけではない。その声も、そして――

靴を脱ごうと屈んだ僕の首根に、彼女はいつものように腕を廻し、その小さな胸で優しく抱きしめてくれる。粘つかず、冷たくもない、人間の――肌。その髪に薫る芳しい少女の匂い。

今の僕が五感のすべてで肯定し、許容できる唯一の存在。それが沙耶だった。

それだけではない。彼女は僕に微笑んでくれる。僕のことを抱きしめてくれる。それが今の僕の魂をどれほどに救済するかを彼女は知っていて、そしてそんな風に僕に必要とされることを、なぜか喜んでくれている。

もし彼女に出会うことなく、この汚穢（おわい）に塗（まみ）れ歪んだ世界にただ独り取り残されていたなら、僕はほどなく本物の狂気に侵（おか）されていただろう。今の僕は、彼女によって生かされていると言ってもいい。

「今日は一日、どうしてた？」

「居間の模様替え。もう半分ぐらい塗り終わったよ。で、今はね、郁紀の晩ごはん作ってるの。昼間、テレビで作り方やってたから」

「そうか。楽しみだな」

「もうちょっと時間がかかりそうなの。待っててくれる？」

「いいよ。じゃあ僕は居間の続きをやろう」

鼻歌交じりに台所へ戻る沙耶を見送ってから、僕は居間に入った。

世界の色彩が不愉快ならば、快（こころよ）いと思える色に塗り替えてしまえばいい。そう気がついた僕は、手当たり次第にペンキを買い込み、沙耶と一緒に色々な配合を試していた。すでに寝室は

隅々まで、沙耶が調合してくれたペンキで塗り込めてある。おかげで僕は、事故以来まともに得られなかった睡眠を手に入れることができた。

居間の塗装では、沙耶がカーテンをどうするかで悩んだらしく、窓のまわりが手つかずになっていた。僕は迷わずそれを剝ぎ取り、ガラスの上から刷毛(はけ)を走らせていく。どちらも、もう必要ない。雨戸を閉め切っておけば、外からは見えないし問題はないだろう。

「ごはん、できたよ～」

トレイに食事を載せて運んできた沙耶が、居間に足を踏み入れるなりクンクンと鼻を鳴らした。

「ペンキの匂い、平気？」

言われてみれば、閉めきった室内には溶剤の臭気が立ちこめているはずだ。だが、外で散々に不快な臭気を嗅がされてきた僕には、別段気になるようなものではない。

「沙耶は嫌いかい？」

「ううん、平気。郁紀が大丈夫なら、いい」

沙耶がテーブルに並べた料理は……残念ながら、お世辞にも食欲をそそるような色味と匂いをしていなかった。だがそんなことは、外食すれば毎度のことだ。

「いただきます」

日頃の習慣どおりに諦観と覚悟を決めて、無心に料理を口の中に運ぶ。案の定、胃が痙攣しそうな味だったが、悪いのは沙耶じゃない。きっと彼女は昼の料理番組で教えられた通りに調理してくれたのだろう。単にそれを僕の味覚が受けつけないだけのことだ。

「……おいしくない？」

「うー、まぁ、ね……」

こんなときに嘘をついても沙耶は喜びはしない。彼女は僕の障害を理解している。

「気にしないで。明日はまた別のものを作ってあげるから」

「ごめんな、いつも……折角、作ってくれたのに」

「いいのよ。こうやって色々試していけば、いつか郁紀でもおいしく食べられるものが見つかるかもしれないじゃない」

今の僕にとって、食事は気の進まない義務のようなものだ。苦痛を伴うが、果たさなければ生命が維持できない。だが生きていれば彼女の言うとおり、いつかまた心から美味いと思えるものが口にできるかもしれない。沙耶と出会えたように。

「沙耶は食べないの？」

「うん。私は……もう済ましたから」

この家に暮らすようになってからも、沙耶は僕と共に食事をしたことがなかった。もし遠慮をしているなら止めて欲しいと幾度か伝えたが、どうもそればかりでもないようだ。不思議ではあ

るし悲しくもあったが、無理強いをする気はなかった。そうでなくとも沙耶は、知覚の壊れてしまった僕の奇癖（きへき）に合わせ色々なことを我慢してくれている。
「僕の方は、もう一度病院で君のお父さんのことを訊いてみたよ」
「パパの？」
奥涯雅彦。
沙耶の父親で、Ｔ大医学部の教授。沙耶の唯一の縁者である彼は現在、行方不明になっている。彼の失踪の謎を解くことを、僕は約束していた。
「やっぱり、何も教えてはもらえなかった。何か隠している雰囲気なんだが……」
「――そう」
もっと落胆するかと思ったが、沙耶の反応は意外に醒（さ）めていた。
「……心配じゃないのかい？　お父さんのこと」
どこか煮え切らない表情でかぶりを振ってから、沙耶はふたたび僕に笑顔を向けた。
「ううん、そういうわけじゃないの。ありがとう、郁紀。私のために色々と」
「君はそれ以上のことを、僕にしてくれるんだ」
ごちそうさま、と僕は手を合わせて箸を置いた。料理は一口たりとも残していない。食味はどうあれ、これは沙耶の気持ちだ。そう思えば耐えられる。
「じゃあ、お風呂にする？」

「ああ。また背中、流してくれるか？」
「うん！」
この家に来て以来、沙耶はもう新妻気取りだ。
沙耶――なぜ君は、そこまで僕に……。

「ぁ……ふぅぅ……」
貪欲に、弾み車のように跳ね上がっては沈み込む細い腰。そのたびに僕の硬く尖った欲望が、彼女の熱く締まった胎内で搾り上げられ、揉み下ろされる。
「いい、ぃいのお……凄ィ……ぁっ……熱い……奥まで……」
可憐な、穢れを知らぬかに見えるか細い肢体が、そんな印象を真っ向から裏切って熱く汗を滲ませ、底知れぬほどに淫らな動きで快楽を貪る。
沙耶、僕の可愛い沙耶――本当にこれでいいのか？
何が君をそこまでさせるのか。身も心も捧げ尽くすほどの何が、この僕にあるというのか。
「ふぅ、郁紀ぃィ、もっと……もっと突き上げて……奥に、あ、当たってるのぉ……あううぅっッ」
それとも、ただの同情なのか？　真っ当に社会と繋がる術を、何もかも失ってしまった僕への哀れみなのか？　たったそれだけの理由でここまで乱れ狂えるほどに、君は淫奔な子だというの

か？
だが騎乗位で跨がり、艶やかな笑みとともに僕を見下ろすその眼差しには、露ほどの歪みも邪気も見えず、ただ蕩けんばかりの喜悦に潤んでいる。
その悩ましい嬌声とともに弾む白い軀があまりにも不条理で、夢のようで。
彼女も、僕の身体を背骨から腰まで貫いて焼くこの快楽も、何もかもすべてが幻なのではないかと、ふと怖ろしくなり、僕は救いを求めるように両手を差し伸べ、縋るようにしてその薄い身体ごと沙耶の乳房を掴む。
「ひゃうぅっ！」
途端に、小動物のような悲鳴を上げ、全身を痙攣させる沙耶。
桜色に尖った乳首が僕の指の間で揉み潰されるたびに、その細い喉が酸素を求めて反り返り、換わってぜいぜいと荒らげた呼気を宙に還す。
「あああ、ぃぃ……郁紀……バラバラに、なっちゃい、そう……もう……」
ここにいる。今たしかに沙耶は僕とともにいる。確かなのは今この瞬間だけ。信じられるのは僕と繋がっている彼女ただ一人だけ。
「郁紀ィ……なかに……なかにちょうだい……私の内側に、郁紀のをちょうだい……」
頷いて、僕は彼女を突き上げる腰に拍車をかける。喘ぎ声をさらに一オクターブ上に跳ね上げ、沙耶の痴態はより一層の激しさで狂い咲く。

「イクぅ、イッちゃうのぉ！　郁紀……ねぇ、ぃ、一緒に……一緒にぃぃ！」

この先、運命がどれだけ残酷になろうとも、何よりも僕が怖いのは——沙耶、君を見失ってしまうことだ。

「ぁ、あ、あぐぅぅぅッ！」

絶頂にむせび泣くような声を上げて痙攣する沙耶の軀。最後のうねりにきつく呑み込まれて、僕もまた彼女の胎内に熱く滾った精を吐き出す。

「ぁぁぁ……熱いよ……郁紀」

微笑みのまま放心し、ぐったりと脱力した沙耶の軀を、僕は抱き寄せて包み込む。柔らかく汗ばんだ肌の感触を、情熱に上気した体温を、両腕で確かめる。疑いようのない彼女という存在を。

「……郁紀？　泣いてるの？」

沙耶に指摘されるまで、僕は自分の頬を濡らす涙に気付かなかった。

「——どうしてなんだ、沙耶？　なぜ僕にここまでしてくれる？」

「郁紀……」

「解らないんだ。解らないのに、僕だけが……どんどん君に惹かれていく。どんどん、君なしじゃ耐えられなくなっていく」

僕は腕に力を込めて、よりきつく沙耶を抱きしめる。この肌が溶け合わさって二度と離れなくなることを、願って。
「教えてくれ……どうすれば、君を失わずにいられる？　僕は何をすればいい？　どうやって君に報(むく)いればいい？」
「……こうやって、抱いていて」
甘く優しく、沙耶は僕の胸にコツリと頭を当てた。
「郁紀に抱いてもらうの、大好き。ずっと一緒にこうしていたい。だから、私は郁紀から離れたりしない」
「なぜ――僕なんだ？」
「それはね、郁紀がひとりぼっちだから」
僕に抱き留められたまま、沙耶は上目遣(うわめづか)いに僕を見つめ返す。
「そして、沙耶もひとりぼっちだったから」
その瞳は深く虚ろで、その虚ろさゆえに限りなく優しかった。
「だから沙耶にも、郁紀しかいないの。この世でただ一人だけ、私を抱きしめてくれる――大好きな郁紀」
今ならば、言える。

たとえ僕の目に映る世界がどんなに醜く崩れていようとも。僕にはただ一人、沙耶さえいてくれれば、それでいい。

大学　瑶

今日こそは、面と向かって彼と話をしよう。そう心に決めた。
後込（しりご）みしていても何も始まらない。先延ばしにすればするほどに、辛い時間も長引いていく。もう一度だけ、勇気を出そう。
瑶が木曜日四限のコマに入れているのは生化学。この日、郁紀と顔を合わせる講義はここだけだ。
受講者の多い基礎科目なので二百名収容の大教室で行われるが、席の埋まり具合は半分程度なので、座る席を選ぶのにあまり不自由はない。
瑶が好んで着くのは中列あたり。いちばん聴講しやすい位置なので他の受講生もここに集中する。
たいていは郁紀も一緒に、瑶の隣の席に着く。並んだ空席がない場合には潔（いさぎよ）く諦めてしまうのが『恋人未満の親しい友人』として仕方のない距離だったが、そんな場合でも二人はそれぞれ最寄りの空席を探すのが常だった。

今日も教室はさして込み合うでもなかった。瑶がそれとなく荷物を置いて自分の隣席をキープしていても、誰も気にする者はいない。だが――ついに郁紀は来ることなく、そのまま定刻通りに授業は始まってしまった。

しばらく落ち着かないままで講義を聴き、それとなく首を巡らせ教室内を見渡す。

いつの間に入ってきたのか、最後列の片隅の席に一人だけで孤立し、郁紀が座っている。

もしかすると自分に気付かなかったのだろうか？　……そんなわけがない。やるせない想いとともに、瑶は隣席の荷物を手元に引き寄せた。

――講義が終わり、そそくさと教室を退出する郁紀を、あやうく取り逃がしそうになりながらもかろうじて廊下でつかまえる。

「匂坂さん！」

呼ばれたとたん、郁紀はまるで怒鳴りつけられでもしたかのようにビクリと総身を硬直させ、それから億劫そうに振り向いて瑶を見た。

「……何か？」

痩せた――あらためて瑶はそう痛感する。自分が記憶している郁紀の面影より、あきらかに目の下の隈と頬骨が目立っている。余程の心労に苛まれてのものか、それとも栄養状態が悪いの

か、あるいはその両方か。
必要以上に緊張し、苛立っているようにも、何かに脅えているようにも見える。視線はそわそわと忙しなく泳ぎ、決して瑶と合わせない。一体、何が彼をここまで変えてしまったのだろう。ただこうして向き合っているだけでも、瑶は胸が締め上げられるように悲しくなった。
今日こそは――奮い起こした勇気の在庫を、あらためて確かめる。
「あの、お話があるんです。ちょっと……いいですか？」

十一月の寒空に、吹きっ晒しのベンチで談笑しようなどと思う者がいるはずもなく、中庭は人影のないままに寂しく静まりかえっていた。
「話って、何？」
――憶えてないんですか？　そう口走りそうになる言葉をぐっと呑み込む。
「匂坂さん、最近、ちょっと様子が変です。見てて……心配になります」
「そうかもね。まぁ、あんな目に遭った後だから」
何事もない風を装った、その笑顔さえもが引きつっている。こうして肩を並べ語り合う際の間合いも、瑶の記憶にあるそれより遠い。
「本当に、それだけなんですか？」
「君にはそれだけじゃないように見えるのかい？」

邪険に混ぜ返されて気後れしそうになるところを、瑶は堪えた。
「何かを……必死に我慢してるみたいに、見えます」
「……」
匂坂は無言のまま、足元の枯れた芝生を靴先で蹴っている。瑶は自分の意気が萎えないうちにと、思い付くままに言葉を続けた。
「まるで、何もかもなくなってしまったみたいに。まわりの人が、すべて信じられなくなってしまったみたいに……。今の匂坂さんは、そう見えます」
「そうかい」
ポツリと、そう答える。
肯定でも否定でもない、硬く乾いた呟き。それはもはや韜晦ではなく、瑶へのあからさまな拒絶の意思表示だった。
だが、瑶はすでに覚悟を固めていた。今日ばかりは退くことはできない。
「友達って……こんなときのために、いると思うんです」
心から彼を想う気持ちを伝えたい一心で、瑶は訴えを続ける。
「ご家族のことは、本当に残念だったと思います。でも……匂坂さんはひとりぼっちじゃありません。戸尾くんや、青海ちゃんや、それに――私が、います」

一度口にしてしまうと、止まらなかった。胸の中で渦巻くこの気持ちを、そのすべてを今、この場で吐き出してしまわなければ。そうしなければこれらは永久に行き場を失ってしまうだろう。そんな予感と焦りが、瑶の言葉から歯止めを失わせていた。

「一人で背負い込まなくたっていいんです。かえって、本人じゃないほうが解決できることだって、きっとあります」

「それが駄目なら、せめて話だけでも……。誰かと分け合うことで、少しでも気持ちが楽になるのなら、それだけでも価値はあります」

「私、匂坂さんの力になりたいんです。他のみんなも、同じ気持ちだと――」

「やめてくれ！」

郁紀が一言のもとに瑶の訴えを断ち切る。

同時に、ここまで交わりを避け揺れ動いていた視線が初めて瑶を捉える。それは、決して怯むまいと胸に抱いた、瑶の決意も何もかもを一瞬で粉々に砕き去った。

彼の眼に宿っていたのは、怒りなどという血の通った感情ではなく……嫌悪だった。瑶を見下ろす瞳には、ただ純粋な厭悪（えんお）だけが浮かんでいた。

「そういえば君にはひとつ、返事しなきゃいけない用件があったね」

郁紀は――憶えていた。憶えていてなお、これほどまでに冷ややかな態度で瑶に接していたのだ。

それだけで、瑶にはもう充分すぎる回答だった。
「僕は君のこと、特別に意識したことなんてなかった。だから君に好意を持たれても、どう接すればいいのか迷ってた。僕が君のことをどう思ってるのか、正直な気持ちが自分でも判らなかったからだ」
「匂坂さん……」
「でもね、今ではもうはっきりと答えが出てる。あれから考える時間だけは充分にあったからね。――津久葉さん、僕はあんたのことが大嫌いだ。顔も見たくない」
泣いてはいけない。そう自分を抑えようとしたが遅かった。瑶の瞳からは、すでに止めようもなく涙が溢れ出てしまっていた。
「もう二度と会いたくない、って言うのは無理だね。同じ学校に通ってるんだし。だからせめて、今後は僕に声をかけないでくれないか？　目障りなんだよ。つくづく」
「ひどい……」
空気を求め、喘ぐようにして漏(も)れ出た呟きに、郁紀が口元をつり上げる。
「君さ、少しは頭を冷やした方がよかったんだよ。どうせ青海や耕司に嗾(けしか)けられてその気になってただけなんだろ？　自分一人でのぼせてるぶんには勝手だけどさ、他人を巻き込むなっていうんだ」
足がすくみ、その場で座り込みそうになる自分を堪える。すでに瑶には限界だった。

見るに耐えないほどに歪んだ、それは酷薄な笑みだった。いまだかつて、何者からも向けられた経験のない悪意。
涙を見せてしまった後でも、声を上げて泣くことだけは絶対にしたくなかった。特に彼の前でだけでは。もう、どんなに自分が無様に見えようと構わない。今この場で泣き崩れてしまうことに比べれば。
一刻も早く、あの視線から逃げなくては。
冷たく笑う郁紀に背を向けて、瑶は息もできないままに中庭を駆け去った。

瑶と郁紀が連れ立って中庭に行くところを、先に見つけたのは青海の方だった。
しゃしゃり出て割り込むのは気が引けて、かといって放ってもおけず、結局、耕司と青海は二人の死角になる物陰で一部始終を見届ける羽目（はめ）になった。
「あいつ……」
青海としては、今すぐに郁紀に詰め寄って一撃殴りつけたい心境だった。そういう青海の気性を理解している耕司が、最後まで彼女の袖を固く摑んでいなければ、実際にそうしていたかもしれない。
気だるげな足取りで郁紀が立ち去り、程なく二人だけになった中庭に立ち、耕司は深い溜息をついた。それでも喉の奥に溜まった苦いものは消えなかった。

「どうしちまったんだかなぁ、あいつは……」
先刻の瑶に対する態度は、耕司といえども許し難いものだった。それでもやはり、先に立つのは当惑だった。
郁紀との付き合いは長い。大学に入る以前からの仲だ。そんな耕司の知る限りでも、郁紀が他人に対して、あれほど冷酷な態度をとるのを見たことがない。
どう考えても、事故を境に人が変わってしまったとしか思えない。
「ねぇ耕司、このまま放っておくつもり？」
「放っておくもなにも。俺たちに何ができる？」
「覗(のぞ)き見よりマシなこと、よ」
青海はどうやら完全に怒り心頭の様子だった。
「あたし、匂坂くんに一言いってやらなきゃ気が済まないわ」
「それで津久葉の気が晴れるってもんでもないだろうに」
「だったらあたしの気だけでも晴らすわよ！」
耕司と郁紀が友人同士だったように、瑶もまた青海の親友だった。そうした関係で引き合わされたことが郁紀と瑶の始まりになる。青海が親友の心配をするのも当然ならば、郁紀に対して怒るのも当然のことだった。
「あたし、匂坂くんと二人だけで話してみたいわ。耕司は付いて来なくてもいいから」

「……本気かよ」
「そのかわり、瑶のこと見ていてあげて。あの子、たぶん心底傷ついてるから……泣き終わった後で、誰かの優しさが必要になると思う」
「なぁ、それって俺とお前の役回りが逆じゃないのか？」
「あたしみたいな性格だとね、慰め役は無理。励ますつもりで余計に傷跡拡げちゃうのがオチなのよ」
「……なるほど、納得いった」
「あ、嫌な言い方」
「じゃあ、まぁ、そっちは程々にしとけよな」
青海がそれ以上むくれる前に耕司は会話を切り上げて、瑶の行方を捜すことにした。

回想　郁紀

不愉快だった。たまらなく不愉快だった。同時に、爽快でもあった。
とうとう僕は一線を越えてしまった。
遠からずこういう破局に至るものと覚悟はしていた。他人に対して不快感しか抱けないようになってしまった状況になってもなお、事故より以前の人間関係を維持しようなどという考えが、

どだい不可能なことではあったのだ。
だが今日のこの一件は、いずれ耕司や青海の耳にも届くだろう。匂坂郁紀は性格が一変したと、皆がそう確信するだろう。それはそれでもう構わない。――少なくとも、それだけの理由で精神病院に送られたりはしないはずだ。今日より輪をかけ、奇異に思われるような行動をしなければ。これ以上、注目を浴びなければ。
このまま耕司たちと疎遠になってしまえば、なおのことといい。それだけでも心労の種が減る。そう考えると肩の荷が下りたような心境だった。
もう徒(いたずら)に干渉してくる手合いはまっぴらだ。僕からしてみれば、近寄って来られるだけでも鳥肌が立つというのに、連中ときたら、こちらの都合はまるでお構いなしなのだから。だが胸がすく一方で……やはり少しは気が咎める部分も、なくはない。
先刻の『あれ』が、かつては親交のあった瑶なのだと――実感はないものの、理屈の上ではわかっている。べつに彼女の人格にまで恨みはないのだ。
傷つけるのは本意ではなかった。こんなことなら、交際を申し込まれたその場で断っておくべきだったのだろう。
瑶――綺麗な女性だった。
勿論、悪い印象なんてなかった。だが面白半分に僕と彼女との間を取り持とうとする耕司と青海の動きは、正直なところ玩具(おもちゃ)にされているようで不愉快だったし、もう一方の当事者である瑶

の、二人にいいように踊らされているという自覚をまるで持ち合わせていない、そういうある種の鈍感さは見ていて歯痒(はがゆ)かった。
それでも、誰に悪意があったわけでもない。あの頃の僕には、誰かを傷つけてまで我を通す理由もなかった。何となく瑶と付き合ってみて、それで仲間同士の輪が崩れずに済むのなら、それもいいのかもしれない――と、そんな妥協も心にあった。
だが今の僕には、身辺のことを流れのまま任せておけるような心の余裕はない。
沙耶以外の誰かと向き合って話をするだけでも、我慢ならないほどに辛いのだ。優しくなれというほうが無理な相談だ。
考えるうちに、どっと疲れが湧(わ)いた。早く沙耶の待つ家へと帰りたいのは山々だが、その途中で混み合った電車に乗ったり、繁華街の人の群れを目にしなければならないかと思うと気が滅入る。
ふと見ると、手近なところにベンチがあった。僕は腰を下ろすと目を閉じて、不快きわまる世界を視野から閉め出した。臭気や騒音までは防ぎようもないが、こうするだけでも気休め程度には神経を鎮められる。
当初、集中治療室で意識を取り戻したときも、世界はこんな風に闇(やみ)に包まれていた。

眼球と視神経には異常が認められなかったにもかかわらず、視力だけが回復しなかったのだ。事故の後遺症による脳機能障害。そう判断するしかなかった。

失明したのはショックだったが、今からしてみれば、そのころの苦悩はまだ生易しいものだった。当時はまだ聴覚、触覚、嗅覚、味覚には何の異常もなかったのだから。

本当の悲劇は、視力が回復してから始まった。

せめてもの幸運は、まだ失明状態のうちに、僕の巻き込まれた災厄と、僕が受けた脳外科手術の特殊性について理解ができていたことだろう。

最初に見たのは——悪夢としか思えない病室内の有様だった。

次いで『医師』だと名乗るが溶けた腐肉にしか見えない蠢く何かと、『看護師』だと名乗り、入れ替わり立ち替わりで何くれとなく僕の身辺の面倒を見てくれる、身の毛もよだつような蠢く何か。

初めのうちこそひどく錯乱したが、程なくその異常の原因自体には察しがついた。

僕の脳に、何かが起こったのだ。

もし意識の回復と同時に視力も戻っていたらと思うと、ぞっとする。いきなり地獄のような景観に直面し、訳も分からぬまま発狂していたに違いない。

だがやがて、僕の視覚異常は、ゆっくりと触覚や味覚、嗅覚にも伝播していった。

料理の味も、シーツの触り心地も、見舞いの花から薫るはずの柔らかな匂いも。すべてが僕の目に映る歪んだ『現実』に合わせるようにして、生理的嫌悪をかき立てる不快で耐え難いものへと変化していったのだ。

さらに、診療に訪れる医師の言葉までもがヒトの言語からかけ離れていくに至り、僕は自殺を決意した。この、新しい世界と折り合いをつけて生きていく自信には、とうてい持ち合わせが足りなかったからだ。

その夜、沙耶と出会うまでは。

せめて苦しみの少ない死に方はないものか。そんなことを考え、僕は鬱々と微睡んでいた。眠りながら悪夢を見ているのか、目覚めながら悪夢めいた現実を見ているのか。

どちらとも判然としない状態で狂気に耐え続けていた僕は、いつの間にか病室に侵入していた彼女にもまったく気付かないでいた。

ふと見ると、ベッドサイドに佇んで興味深げに僕を見下ろしている顔があった。

それは膿汁色の粘液にまみれた顔らしきものでもなく、蚯蚓のような繊毛にびっしりと覆われた顔らしきものでもなく。

白く滑らかな頬も、つぶらな瞳も、愛らしく繊細な鼻立ちもすべてが完全な、紛れもない人間の、輝くほどに美しい少女の顔だった。

「ぁぁ――」

感動のあまり吐息が溢れた。目が見えるようになって以降、初めてまともな人間を目にした安堵と喜びをそのとき僕は噛みしめた。

そんな僕の反応は、むしろ彼女にとって意外だったらしい。

「怖くないの？　私のこと」

言われて気が付けば、なるほど、時刻はちょうど丑三つ時を指していた。こんな時間に年端もいかない女の子が病院の中をうろついているわけがない。普通であれば、幽霊か何かを連想しもっと驚いて然るべきなのだろう。

僕からしてみれば、そんなことはどうでもよかった。地獄で、仏に遭遇したのだ。

「君は――誰だい？　なぜ、ここに――？」

「私は沙耶。パパのこと捜しに来たの」



僕と同じく入院中の患者か、それとも夜勤の看護師か、いずれかを父親に持つ娘なのだろう。そう理解した。非常識な話ではあるが、子供のやることと思えば仕方はないかもしれない。むしろこの病院の警備体制が問題だ。戸締まりもろくにできていないのか。

「あなた、怖がらないんじゃ、つまらない」

「あ、ちょっと――」

すぐにも立ち去ろうとする彼女を、僕は藁（わら）にも縋る思いで呼び止めた。ただ、その後のことまで考えていないことに気が付いたのは、彼女が振り向いた後だった。

「なぁに？」

見つめ返す深い瞳に呑み込まれ、魂の芯から洗われ、癒（いや）され――僕は頭の中が真っ白になりながらも、躍起になって意味を成す言葉を探す。

「ひとつ……お願いがあるんだ。おかしいかもしれないが、君にしか頼めない……」

もう、恥も外聞（がいぶん）もない。

口を衝いて出るがまま、僕は自分の中で一番大きく叫ぶその声を吐き出した。

「手を……握らせてもらえないだろうか」

沙耶は怪訝（けげん）そうに小首を傾げ、それから、さも面白そうに破顔した。反吐（へど）の出るような肉色の景色を背に、僕には眩しすぎる程の明るい笑顔で。

「変な人。そんなこと言い出したの、あなたが初めて」

沙耶が白く細い手を差し伸べる。

僕は壊れ物を扱うように——それこそ、ひとひらの雪を溶け崩さないまま手に載せるような心地で、その指先に自分のそれを重ね合わせた。

心持ち高く感じる体温。折れそうに繊細な五指。その柔らかな指の腹。それらの感触が僕を通して流れ込む。僕の掌（てのひら）の先に、彼女がたしかに実在している。

喜びの涙が滂沱（ぼうだ）と溢れ出た。思えばそのとき、僕は運命から救済されたのだ。

「本当に……。ああ、ヒトだ……。この半月で、初めて人に触れた……自分以外の人間に初めて……」

「……？」

「他の人じゃ、駄目なんだ。僕は、事故に遭って。おそらくはその後遺症で……他人がヒトの姿に見えないんだ」

「ふぅん……ほんとに、不思議な人」

沙耶はゆっくりと自分の指を曲げ、僕の指に優しく絡めてきた。

「あなたって面白い。明日の夜も、また来ていい？」

「ああ、そりゃあもう。——いいのかい？　君は、そんな事をして」

「大丈夫よ。夜は私のものだから」

その日から、深夜の逢瀬が始まった。毎晩、午前三時過ぎ。当直看護師の巡回の間隙を巧みに狙いすまして、沙耶は僕の病室を訪れてくれた。

聞けば恐れ入ったことに、なんと彼女はこの病院の施設内に、人目を忍びつつ住み着いているのだという。

「これだけ広いと、隠れる場所には事欠かないから」

驚く僕に向かって、沙耶はこともなげに笑った。

元々彼女はこの病院に勤める医学教授の父と、郊外の一軒家に二人きりで暮らしていたのだが、ある日を境に父親が戻らなくなり、ひとりぼっちになったということらしい。

そして父親の帰りを家で待つことに飽いた沙耶は、ある晩思い立ってこの病院へと侵入し、以来父の手がかりを探しつつ二月余りもの間、院内で生活していたのだという。

「学校には行かなくていいのかい？」

「いいの。勉強はぜんぶパパに教えてもらったから。沙耶はとっても頭がいいんだよ」

不思議な少女だった。あどけない容姿や話しぶりとは裏腹に、大人たちの目を欺いて独力で衣食住を確保する生活力。常識の欠落は幼さ故だとしても、会話の端々に覗く知識の深さや聡明さは、およそ年相応とは思えないものだ。

だが、いずれにせよ些細なことでしかない。僕にとっては沙耶こそが唯一、この狂った世界の中で無二の存在なのだ。それより大事なことは——

「危なくないのか？　見つかりそうになったことは？」
「ぜんぜん平気。ここにいれば食べる物にも不自由しないし、パパの家にひとりぼっちでいるよりも、ずっと楽しいよ」
沙耶は無邪気に笑って舌を出しながら言った。
「時々、いたずらしたりしてね。精神的に参っている患者さんをチェックしておいて、真夜中に忍び込んで脅かしたりするの。そういう人だと、大騒ぎしてもみんな真に受けたりしないから。結局は悪い夢とか気のせい、みたいな話で済んだりするし」
そういえばこの病院は、怪談話が絶えないことで有名だった。しかし、まさかこうして本物の悪戯娘が隠れて住み込んでいようとは、いったい誰が想像できるだろうか。
「じゃあ僕も、最初はそのつもりで？」
「うん。——ごめんね。怒った？」
なるほど、僕は彼女の獲物だったというわけだ。だが、おかげでこうして沙耶との知遇を得たと思うと、厳しくたしなめる気にもなれなかった。
「もうやらない方がいい。その代わり、夜は僕の話し相手になってくれないか？」
「うん。沙耶もその方が楽しい」
僕は自分が抱え込んだこの知覚障害を、用心深く隠し通した。

術後の障害としてこれほど劇的な症例を示した患者に、医師たちがどういう興味を示すか――僕自身、医大に籍を置いている身だからこそ、彼ら研究者が僕にどれだけ因業（いんごう）な視線を向けてくるかが容易に想像できた。僕は自らの尊厳に賭けて、断じて哀れなモルモットになり果てる気などなかった。

日々、不快感と嫌悪感を押し隠し、医師や看護師たちを相手に平静を装い続ける。

僕のよすがは沙耶だった。夜になれば彼女がやって来るという希望だけを支えに、僕は日中の地獄を意志の力で堪え忍んだ。そしてそのノゾミに支えられ、医師たちが目を見張るほどのペースで容態を回復させていった。

やがて退院を翌朝に控えた最後の夜、僕は思いきって沙耶に切り出した。

「君は――これからも、この病院に居続けるのかい？」

「うん。結局パパの手がかりはなかったけど、他に行くところもないし。いよいよバレそうになるまでは、いいかなって」

裏を返せば、彼女には強いてこの場に留まる理由もないということだ。僕は勇気を出して、おずおずと声を落としながらひとつの提案を口にした。

「よかったら……僕の家に来ないか？」

「え？」

「家族はいないから、部屋はいくらでも余ってる。人目を忍ぶ必要もないし、住み心地もそんなには……悪くないんじゃないかと、思う」

「ずっと、郁紀と一緒に暮らすの？」

それが不満の声なのか、聞き返す勇気は僕にはなかった。代わりに付け加える。

「君のお父さんのことは、僕が捜してあげる。必ず居場所を見つけてみせる」

「……難しいと思うよ。それ」

やや当惑したように視線を泳がせながら、沙耶が言った。

「たぶんパパ、何か悪いことをして姿を消したんだと思う。だから警察とかは困るの。なるべくこっそり捜さなきゃいけないし」

「気をつけるよ。それに、どんなことだってやる。僕は――」

勢い余って歯止めがきかず、僕は秘めた心の本音まで口にしてしまった。

「――沙耶と、離れたくないんだ」

沙耶は困惑しきった顔で、しばらく考え込んだ後、

「……少しだけ、考えさせて」

そう言い残して、いつもより早く僕の病室を出ていった。

翌朝。

退院祝いに渡された花束は、色も臭いも吐き気を催すような代物だったが、それでも僕は笑顔を繕って受け取った。

耕司や青海、瑶を名乗る肉塊も出迎えにやってきた。入院中に何度か見舞いに現れたときもそうだったが、事故以前から知る人々が、無惨に変わり果てた姿を目の当たりにするのは本当に辛かった。

我知らずと絶望と諦念から滲んだ涙を目睹され、嬉し泣きだと言い張るよりなかったほどに。

そして廊下でも、ロビーでも、駐車場でも。耕司の車に乗せられ、遠ざかる病院を背にしながらも。いつもであれば顔を背けるおぞましく変貌した世界へ目を凝らし、僕は必死に沙耶を探した。

だが、最後まで彼女は姿を見せなかった。

耕司たちが帰った後、生家の門前に一人立ち、僕はあらためて周囲を見回した。

僕は転居の経験がない。生まれてから今日までこの家で、僕は育ち、暮らしてきた。此処より他に自分が帰るべき場所などあり得ない。

屋内は元より、いま立っているここから玄関に至るまでの庭すら目を閉じても歩けるほどの、我が家。そう思っていたはずの場所が――まるで見覚えなく空虚に歪み、爛れた形で僕の目に映っている。

壁は有機的に撓み、油が浮いたような鈍い虹色に濡れて光っている。思い出深い庭の草木も、深海の奇怪な腔腸動物のようにそびえ、揺らめいている。臭気もひどい。
最早、間取りに覚えがあるだけの異世界だ。僕にはもう、帰る場所などない。そういうことなのだろう。首を振り、憫笑しながら二階にあがる。

見る影もない有様の僕の寝室。だがそのベッドの上にきつく両膝を抱え込み、まるで捨て猫のように身を縮こまらせ、一人の少女が座っていた。
そして立ちすくむ僕の顔を、気後れしたように上目遣いで窺いながら、少女は——沙耶は、消え入りそうにか細い声でこう言った。
「本当に……ここにいても、いい？」
答える代わりに、僕は沙耶を抱きしめた。決して逃すまいと固く、力を込めて。
沙耶も、拒まなかった。

匂坂邸　青海

匂坂家の門戸に立ったところで、青海はひとつ大きく深呼吸をした。

当然、それで怒りが冷めるわけではない。だが言いたいことを明確に主張するためにも冷静になっておく必要があった。逆上して言葉もろくに出てこなくなるのでは困る。
インターホンの呼び鈴を押して待つ間、青海は門の外から見渡せる範囲で匂坂家の庭を見渡した。
青海とて、普段はひとさまの家の外観について難癖をつけるほど神経質なたちではないが、それにしてもあんまりだと思う。伸びるがままに放置された雑草と、厚く積み上がった枯れ葉の層。廃屋かと見紛うほどだ。手入れしていないどころか、しばらく足を踏み入れてさえいないのではなかろうか。窓に至っては、この時間にしてすでに雨戸が閉ざされており、陰鬱（いんうつ）な印象を強くしている。察するに、一日中ああなのだろう。
一体、どういう生活をしているのだろうか。家族を失い突如（とつじょ）として一人暮らしになったとしても、この頓着のなさは限度を超えている気がする。
そういえば気のせいか、どこからともなく肉の腐ったような臭気が流れてくるが、まさか発生源はこの庭だろうか？
相変わらず呼び鈴に応答はない。待っては押し、さらに待ち……そんなことをしばらく続けた後、ふと思い至り、かがみ込んでインターホンの下部をのぞき見る。
案の定、コードが断線していた。

しかも切り口は真新しく、鋭利で、壁からケーブルを引き出した上で人為的に切断したものと思われた。おそらく郁紀がしたことなのだろうが、来客を拒むにしてもやり方というものがある。他人を舐めているとしか思えない。拒絶された気分とともに、自分がここまでやってきた理由が改めて胸中で膨らみ、再び血液を急騰させた青海は、荒々しく門を押し開けて庭へ踏み入り、玄関へと向かった。

通話機からしてああなのだから、ノックをしたところでせいぜい居留守を使われるのが落ちだろう。こうなったら問答無用でドアを開けて怒鳴りつけてやろう。いや、鍵ぐらいは掛けているかもしれないが、そのときは……。

案に相違して、玄関のドアノブは何の抵抗もなく回転し、勢い余った青海は必要以上に大きくドアを引き開け、室内へと分け入った。その途端、むっとするほどの異臭が押し寄せて青海の息をつまらせる。

（……え？　な、なに……？）

何かがおかしい。立ちすくむ青海をよそに、ドアの内側につり下げられたカウベルがガラガラと騒々しく鳴りわたる。郁紀は、これで来訪者の存在に気が付いただろうが――

『ォガェリナザィ』

青海は耳を疑った。廊下の奥の部屋から、たしかにそういう声が聞こえた。人間の発声とは思えない、だが動物の鳴き声にしては複雑すぎるイントネーション。

「——誰かいるの？」

返事はない。代わりに、なにか濡れた柔らかいものが転がるようなピチャピチャという音が、家の奥へと遠ざかっていった。

「……」

たったいま耳にした音について、なかなか意味をなす思考を形にできないまま、青海は呆然（ぼうぜん）と空っぽの玄関を眺めていた。何もない、空っぽの……そう、玄関の三和土（たたき）には一足も靴がなかった。ということは、郁紀はまだ帰宅していないのだ。では、あの音は一体誰が——青海の空耳だろうか？

さっきまで昂（たか）ぶっていた感情が、嘘のように冷めて凝（こご）っていた。青海はカウベルを鳴らさないようドアを開けたままにして框（かまち）を上がり、廊下に一歩、踏み込んだ。

ギシ、と神経を逆撫でするような音を立てて床板が軋（きし）む。どうして息を殺して静かに動こうとしているのか、考えてみれば青海にも不思議だったが、なぜかそれはとても肝心なことのように思えた。

屋内に漂う臭気の強烈さは、外で嗅いだものとは比べものにならない。魚の臓物をかき集めて捨て置いたような、蛋白質（たんぱくしつ）の汚臭。台所に、何かひどく傷んだ食べ物でも放置してあるのだろう

か？　そういえば廊下の奥から、何か物音がする。
軋む床板を一歩ずつ踏みしめながら進むと、やがて廊下は左右に分かれた。一方は明るく、一方は暗い。青海は明るい方の部屋を覗き込んだ。
台所だった。ここばかりは雨戸もなく、採光窓から外の光が差し込んでいる。
音の正体はコンロの上で煮立っている鍋だった。まな板の上には包丁と、途中まで刻まれた人参が転がっている。何の変哲もない夕飯前の家庭の景色。それらすべてを窓からの夕陽が、熟(う)れすぎて腐乱した果実の色に染め上げている。
どうしようもない違和感——当然だった。ここで料理をしていたのは誰で、その人物はいったいどこに行ったのか？
「誰かいないんですか？」
そう呼びかけてから、自分の声がどうしようもなく震えていることに気づき、青海は後悔した。静まりきった家の中に、むなしく響く彼女の声は、なぜか愚(おろ)かしいほど無防備なものに思える。
ふいに青海のストッキングに、じわり、と冷たい感触が染み込んできた。
おそるおそる爪先に触ってみると、指先に糸を引く薄緑色の粘液がついた。魚の死んだ水槽の、藻(も)がびっしりと繁殖して中が見えないほどになった後の濁り水。そんなような液体がうっすらと床を濡らしている。間違いなく悪臭の元と同源のものだ。

靴を履いたまま上がるんだった……青海は心底そう思った。他人の家だからという遠慮は、とうに意識になかった。

未練がましい気持ちで、もと来た方を振り返る。いま青海がいる位置は、先刻の玄関からは死角だった。奇妙な声と、何かが動く物音がしたのは、きっとこの台所だろう。

……隣は、おそらく居間だろう。外から見たとおり雨戸を閉め切っているらしく、真っ暗い闇の中は何も見透かせない。

青海としては、できることなら振り向きもせずにこの家を出ていきたかった。だがそうすると、あの闇に背を向けたまま廊下を戻らなくてはならない。……それだけは嫌だ。

理性というより、何か不条理な強迫観念に突き動かされるまま、青海は一歩だけ居間へと足を踏み入れた。

暗い。何も見えない。それに強烈な汚臭。廊下や台所の比ではない。手を横に伸ばして壁を探る。電灯のスイッチは拍子抜けするほど簡単に見つかった。藁にも縋る思いで青海はスイッチを押した。

色。色。色。

臓物の紫と腐肉の茶色と鮮血の真紅と脂肪の黄色と、それ以外の言葉にならない色彩の狂乱が壁を、床を、窓を、天井を、全てを、塗り込めていた。

偏執的なほどに丹念な刷毛使いによる、ただ一筋の塗り残しもなく分厚く重ねられた色の不協和音。この部屋を塗り潰した人間の憎しみと悪意と狂気の程を、余すところなく物語る色合いだった。

あまりの毒気に当てられて、青海は脚の力が抜けた。たまらず崩れるように座り込んだ途端、床を濡らしていた粘液が彼女のジーンズに染み入ってくる。冷たい感触に侵されるふくらはぎ、股、尻……。

そして、首筋。

思わず首に当てた手の甲に、さらに冷たい粘液がピチャリと飛び散る。

上だ。青海の頭上から滴り落ちてくるのだ。

青海の生涯で最悪の不幸は、そのとき頭上を仰ぎ見てしまったことかもしれない。

天井に張り付いて待ち伏せし、今まさに直下の獲物へと襲(おそ)いかからんとしていた捕食者の容姿を、青海はつぶさに、余すところなく目にしてしまった。

悲鳴を上げる前に、口も鼻もすっぽりと覆われていた。臍(へそ)から下腹にかけてを一気に引き裂かれ、内臓を貪り食いながらも『それ』は青海の中へと侵入してくる。

その感触を感じる頃には、すでに青海の精神は完全に崩壊していた。

匂坂邸　郁紀

覚悟を決めて電車に乗ってはみたものの、やはり混雑時の密接な人いきれにはとても耐えきれず、途中駅で降車した僕は残りの路（みち）を歩いて戻った。

随分と遅くなってしまった。沙耶も心配しているだろう。怒ってなければいいが。

門をくぐり帰宅すると、なぜか玄関のドアが薄く開け放しになっていた。怪訝に思い廊下の奥を窺う。明かりのついた居間から、なにやら食事の気配らしきもの――舌鼓を打つような音と、鼻をくすぐる覚えのない匂い――が、漂ってくる。

沙耶だろうか。いったん呼びかけようとしてから、思い直してそのまま家に上がる。

居間に近づく毎に、匂いは濃度を増した。だが決して不快ではない。むしろ爽やかで胸のすく、陶然（とうぜん）とする香気だ。どこか沙耶の髪の香りにも似ているからだろうか。

覗き込んだ居間の光景に、はじめ僕は戸惑った。

床一面に香草か何か、草のようなものが敷き詰めてある。香りの元はこれだろう。他にも、果物や野菜とおぼしい塊が大小さまざまと、そこかしこに散らばっている。

そうした巣のような、草原のピクニックのような広がりの真ん中で、沙耶は僕に背を向けて座り込み、夢中になって何かを頬張っていた。

「沙耶？」

「あ――」
　呼びかけに振り向いた沙耶は、心底驚いたらしく目を見開き、それから、まるで悪戯の現場を見咎められたかのように、さも気まずそうな顔つきでその目を逸らした。
「なにを食べてるんだい？」
「これは、あの、その――」
　沙耶は見ていて気の毒になるほどに狼狽（ろうばい）していた。
　そういえば、沙耶は食事の場面を決して僕に見せたことがない。よほど恥ずかしいのだろうか。何だか僕はとんでもなく卑劣（ひれつ）な覗き見をしてしまったような気分になり、途端に沙耶に申し訳なくなる。
「ひとつ、いいかな？」
　僕は手近なところに転がっていた果実らしきものを拾い上げ、手を挙げて制止しようとする沙耶の反応を待たず、口に運んでみた。
　不思議な食感だった。
　歯触りは桃か洋梨のように、柔らかく弾力がある。よく噛むとシャリシャリと奥歯で潰れていき、そのたびに瑞々しい汁気が口一杯に広がる。それに、鼻に抜けるような力強い香り――僕が今まで味わったことのあるどんな食べ物とも違う。
「なにか味付けとか、調理してあるのか？　これ」

「調理ってほどのことは……捌(さば)いてから、ちょっと溶かして食べやすくしただけで、ほとんど生なんだけど」

「ふぅん」

僕は別の塊を手にとってみた。今度は硬そうな芯のまわりに厚い果肉がついている。齧(かじ)り取るとこれも、風味は似たようなものだった。

「ねぇ大丈夫？　それって――」

「うん。僕でも食べられる味だ。っていうより、美味いよ。これ」

「――そうなの？」

沙耶は僕の言葉に、最初は面食らったように目を白黒させていたが、やがて可笑しそうに笑い転げはじめた。

「あはっ、そーなんだぁ。郁紀もこういうのが好きだったんだ。なぁんだ、あれこれ工夫して頑張ってた私がバカみたい」

「沙耶って、いつもこういう物を食べてたのか？」

「こんな大物は久しぶりだけどね、うん。近所の公園とかで獲ってこれるやつ」

たしかに少し離れた場所に、都内有数の緑地公園がある。こんな果物が成っているなんて聞いたこともないが――そうか、今の僕には果物のように見えているというだけで、多分これは、本当は別のものだ。

「ごめんね。いちばん美味しいところは、さっき沙耶がぜんぶ食べちゃった」
「いいよ、また今度で。でもこれで、明日から一緒に食事ができるね」
「うん！」
沙耶は本当に嬉しそうだった。もちろん僕も同じだ。一人で食べる味気ない食事に比べれば、誰かと食卓を共にするだけで、どんなに食が進むことか。
「まだまだ一杯あるし、食べきれない分は冷やせば二、三日は大丈夫だよ。ちょっと味は落ちるんだけどね」
「じゃあ、早めに片付けておこうか」
小さい果肉は保存容器に、大きなものは鍋やボールに入れてラップをかけ、僕らは残りの食料を冷蔵庫に詰め込んだ。明日からの食事を思うと、今から心が躍る。
こうしてひとつずつ、僕は生きる楽しみを取り戻していくのだろう。沙耶と一緒に。
沙耶が僕を導いてくれる。彼女となら僕は生きていける。

第二章

本当にあったコワ〜イ話・病院編　某有名大学付属病院の怪

『都下有数の設備を誇る某大学付属病院。ここに研修生として通ったＫさんの、ショッキングな最新体験談！　あなたは信じる？　信じない？』

うちの病院で奇妙なことが起こるようになったのは、今年の春先からなんです。

入院中の患者さんが、夜中にひどくうなされて目を覚ますことが何度もあって。それもみんな、ものすごく怖い夢ばかりらしいんです。不眠症になっちゃって眠剤を処方しなきゃならなくなった人も沢山いて。何人かはそれがもとで転院しちゃったぐらいで。

不思議なのは……患者さんたちの見る夢っていうのが、詳しく聞くとみんな同じらしいんです。

ベッドの枕元に、何かものすごく気持ち悪い姿をした怪物が立っていて、じっとこっちを見下ろしてくる、っていう……。

でも本当に奇妙なことが起こり始めたのは、それが境ですかね。地域猫とか、大学猫って言うんですか。うちの病院があるキャンパスのまわりって、けっこう猫が居着いてたんですよ。学生がエサをあげて構うから、近所の野良猫が集まってきて。

それが気がついたら、だんだんと数が減ってるんです。

それも、猫たちが大学に来なくなったっていうより、辺りで猫自体を見かけなくなったって言うか。

犬の散歩も見かけなくなりました。噂だと、飼い主がコースを変えたんじゃなくて、犬の方が嫌がって大学の近くには寄りつかなくなったんだとか。

そのうちに、今度は医学部の中からなくなる物が出てきました。

臓器、です。

死体を解剖して移植用に摘出した臓器が、保管場所から消え失せる、っていうトラブルが立て続けに起こったんです。何度か責任問題にもなったそうで。しかも本当は二度や三度の話じゃ

なくて、私たち研修生には伏せられたところで、もっと何度も同じ事が起こってたらしいんです。

この病院には何か棲み着いてるんじゃないか、って、そういう噂をする人たちも出てきました。

清掃員の方が、時間外……夜間に付いたとしか思えない奇妙な汚れを見つけることが何度もあって。廊下を何かが這いずった跡とか、天井裏から壁に滴った変なシミとか。

夜中に宿直の看護師さんが妙な物音を聞いた、って噂もよく聞きました。で、そんな日に限って入院中の患者さんの悪夢騒ぎがあったりするんです。

あとこれは、病院の中じゃ絶対に言っちゃいけないことになってるんですけど……。

一度だけ、産婦人科でとんでもない騒ぎが起こったらしいんです。

新生児が一人、夜のうちにいなくなったとか。

それが本当なら警察が来たりニュースになったりしてないとおかしいんですけど、それは偉い人たちがあちこち手を尽くして、くれぐれも表沙汰にならないように取り計らったんだっていう話です。

……もちろん、噂ですよ？

でもそういった奇妙な出来事も、夏の終わり頃にふいに途絶えて、そのまま全然起こらなくなりました。

そりゃあ、病院ですから夢見の悪い患者さんくらいはいますけどね。おかしな物音や気味の悪い汚れはなくなりました。猫もまた姿を見かけるようになってきました。

それにしても今年の夏、あの病院で何が起こっていたのか……今になって思い出しても気味が悪いんですよね。

大学　耕司

『おかけになった電話は、電波の届かない場所にあるか、電源が……』

「駄目だ」

「……」

青海と連絡が取れなくなって、三日が経過していた。

アパートにも帰宅した形跡はなく、実家でも心当たりはないという。青海の両親はすでに捜索願を出している。

「まぁ、あいつのことだからな。何事もなかったみたいにヒョッコリ顔出しそうな気もするんだが」

「……うん。だといいけど……」

瑶の表情は暗い。

もちろん青海の心配もあるのだろうが、あの日の郁紀とのやり取りもまだ吹っ切れてはないのだろう。

あれきり瑶は郁紀と会っていない。郁紀も彼らの前に顔を出すことはなかった。授業の合間には何くれとなくこの店に集っていた四人組が、今では二人きりだ。

「ねぇ戸尾くん、もう一度考えてみようよ。どこか青海ちゃんの行きそうな場所に心当たり、ない？」

「いや……一通りは確かめたし、なぁ」

耕司は曖昧に言葉を濁した。もちろん嘘だ。あの日の夕方に青海が向かったと思われる場所を、耕司だけは知っている。だが耕司としては、今の瑶の前で郁紀の話題を持ち出したくはない。

二人の間に漂う気まずい沈黙を救うように、講義開始前の予鈴が鳴った。

「じゃあ、俺、行くわ」

「……うん」

耕司の記憶が確かなら、瑶にも次のコマの授業はあるはずなのだが、彼女は心ここにあらず、といった態（てい）で席を立とうともしない。

かけるべき言葉も思い当たらず、耕司は後ろ髪が引かれる思いのままカフェテリアを後にした。

青海の行方、瑶の様子、どちらも耕司には心配だった。そして、いずれの憂い事に心を向けても、たどり着く疑念の行方はひとつだった。

（郁紀は、いったい……）

青海と連絡が取れなくなり、まず耕司が問いただしたのは郁紀だ。

彼と談判すべく意気込んで去っていった青海が、耕司の知る彼女の最後の姿だったからだ。だが彼の返事は、取りつく島もないほど素っ気のないものだった。

知らない、のひと言。

一体なぜ、青海が自分を訪ねてくるなどという用があり得るのか。それさえも釈然としない様子だった。

当然といえば当然だ。あの日、郁紀に傷つけられ走り去る瑶を二人が目撃していたことは誰も知らない。

そもそも、果たして青海は郁紀の家を目指したのだろうか？　彼女の行動は勢い任せの感情的なものだった。途中で冷静になり、気が変わったとしても何の不思議もない。あるいは途中で、何らかの別のトラブルに巻き込まれた可能性は？

そのいずれかであろうと、耕司は考えていた。――いや、彼の深層心理までを正しく表現するならば、そのいずれかであってほしいと願い、信じ込んでいた。さらに考え得る別の可能性については、無意識のうちにたどり着くことを拒んでいた。

すなわち、郁紀が嘘をついている可能性。青海が彼との相対を果たしており、その後の失踪にも関与しているという可能性。

失踪時の状況を教えて欲しいと警官が聞き込みに来たときも、耕司は別れ際に彼女が告げた目的地について、『N区S駅』とまでは答えたが、その先は曖昧に濁し、また向かった目的についてはわからないと告げるに留めていた。

もちろん捜索には協力したい。だが彼女は郁紀の家までは行っていない。そう郁紀自身が言っているのだから、警察に申告すべき情報はそこまでで充分なはず――そんな理に沿わない理屈が、耕司を縛っていた。瑶との件は別としても、事故以来復調とは言いがたい郁紀を、刺激したくないと慮（おもんぱか）る気持ちも働いていた。

それらの矛盾は、それと気付かぬ耕司の心に重く蟠（わだかま）っていた。ただ郁紀に対する疑問だけが、形にならないまま思考をループしていた。

物思いに耽るあまり、歩きながらも周囲の様子はまるで目に入っていなかった耕司だったが、むしろそんな状態だったからこそ、学生たちの往来の向こう側に垣間見えた親友の後ろ姿に目ざとく気が付いたのかもしれない。

（——郁紀？）

講堂に向かうのかと思いきや、様子が違う。帰宅するつもりだろうか。

奇妙だった。午後には医学部必修の基礎科目があるというのに。

ほんのいっときだけ耕司は立ち止まったが、逡巡したのは一瞬だけだった。気付かれないよう慎重に距離を計りながら、耕司は親友の後を追った。

どうやら帰宅ではなかった。

自宅とは反対方向の電車に乗った時点で、それだけが判明する。推測するにT大病院に行くのかとも思ったが、最寄りのはずの駅に着いても郁紀は降りる気配を見せない。

（どこに向かってる……？）

最初のうちこそ、耕司は自分のやっていることがひどく馬鹿げたことに思えたし、黙って後をつけるなどというやり方にも気が咎めるものがあったが、そんな呵責も郁紀の行動の謎が深まるにつれ、脳裏から消えていった。

その行動が不可解であればあるほど、彼の性格を一変させた真相へと迫る手がかりになりそうな気がしてならない。どんな些細な情報でも、ないよりはいい。

すでに耕司にも、郁紀の豹変(ひょうへん)が事故だけを原因とするものとは思えなくなっていた。より納得のいく理由が欲しかった。果たして、今の郁紀を信じていいのかどうか、それを判断するためにも。

郁紀が電車を降りた。別段何があるとも思えない郊外住宅地の小さな駅だった。改札へと消えていく彼の背中を見失わないよう、他の降車客に交じって後を追う。

駅前にはロータリーもなければ、商店街と言えるほどの賑(にぎ)わいもない。小さな書店とコンビニエンスストア、あとはスーパーマーケットが一軒あるだけの寂れぶりだった。先を行く郁紀を見失う心配はなかった。

すでに通い慣れている道程なのか、郁紀は足早に先を急ぐ。丘陵地をなかば強引に切り拓いた、坂道だらけの新興住宅地だった。宅地にし切れなかった斜面や雑木林がそこかしこに残っている。進学のために上京してきた耕司は、東京でもわずか小一時間ほど都心から離れるだけで、こんなにも閑静な土地があるとは思ってもみなかった。

やがて郁紀は、とある一軒家の玄関口に吸い込まれるように消えていった。

しばらく待って、郁紀が出てくる様子がないのを確かめてから、耕司は門前に近づいて家主の名をあらためた。

──『奥涯』と、門札にはそう書かれていた。耕司の知る限り、郁紀の口からそうした名前が語られた記憶はない。となると、最近になって知己を得た人物だろうか。だが、投函口からはみ出すほどに溜め込まれたメールやビラの厚みは、件の人物の不在とその期間の長さを物語っている。どうも計算が合わない。

二ブロックほど離れたところに小さな児童公園があり、奥涯家の玄関を見張るだけならそこからでも事足りそうだった。幸い裏口があるような家屋にも見えない。耕司は公園のベンチに腰を下ろし、監視を始めた。

一時間が経ち、二時間が経った。奥涯家には誰も出入りする気配がない。夕暮れがゆっくりと家々の景観を変えていった。

持ち合わせた煙草の箱が空になり、あとは苛立ちとの戦いが始まった。何度か気晴らしに携帯電話で青海の番号をリダイヤルし、無駄と知りつつも短いメールを打った。もちろん何の反応もなかった。

やがて空の暮色が蒼く深まり、街灯が点る頃合いになって、ようやく郁紀が家から出てきた。来たときと同様すたすたと足早に、駅の方角へと歩き去る。

耕司は少し判断に迷ったが、今日のところは郁紀の追跡よりもあの家の正体を探る方が先だと結論した。

まず、念のためにチャイムを押す。反応はない。次いで周囲に人の目がないことを確認し、おもむろに玄関のノブに手をかける。抵抗がない。鍵はかかっていなかった。

屋内に滑り込んだ途端、陰鬱とこもった空気が耕司の鼻を刺激した。

黴（かび）と埃（ほこり）と、人の出入りが途絶えて久しい空間独特の饐えた臭気。加えて、何とは名状しがたいが、しばらく放置された水槽が放つような汚臭もかすかに漂う。やはりこの家に住人はいない。

明かりのスイッチに触れたが反応はなかった。主電源が落ちているのか、それとも電力自体が来ていないのか。仕方がないので、耕司はオイルライターに火を灯し手元を照らした。厚く埃の積もった床には、間違いなく郁紀のものであろう、足繁く行き交った様子の窺える靴痕が残されている。耕司もそれに倣（なら）い、土足で玄関に踏み込むことにした。

驚いたのは、まるで損なわれていない生活の跡だった。

見たところ、家具家電といった家財は元より、食材、衣類、鞄など身の回りの品もそのままに、何も持ち出された形跡がない。埃の積もり具合からみて、空き家になり数ヶ月は経過している様子だが、見立てが正しければ家主はほぼ着の身着のままで家を出ていったことになる。

居間のカレンダーは今年の四月のまま放置されていた。

廃屋然とした静寂の中、過日の暮らしぶりがそのままに窺える屋内は、海底に沈没した船舶の客室を彷彿(ほうふつ)とさせた。墓所めいたその沈黙が、ふと耕司の脳裏に不吉な連想を呼び起こす。

家主の生活は途絶えたが、必ずしも立ち去っているとは限らない。今こうして歩を進めている足元にでも、干涸らびた変死体が転がっているのではないか。いや、干涸らびていればまだいい。悪くすると、腐爛(ふらん)を重ねたような——

ともあれ、ライターの炎よりもましな光源が欲しかった。このままだと、実際に死体が倒れていたところで、気が付けるかどうかも危うい。

郁紀のものとおぼしき足跡を辿って、耕司は二階へと上がった。饐えた空気の中に紙の匂いが混ざりはじめる。古書店に足を踏み入れれば、あるいは司書のバイトでもやっていれば嫌でも嗅ぎ慣れる、歳経た書籍の——紙魚虫(シミムシ)たちの楽園の薫りだ。

果たして、上がってみればそこは書斎だった。天井まである書架に詰め込まれた、おびただしい密度の書籍たち。耕司も医大生だけあって、この部屋の主が医学関係者なのは一目で判った。ただしそのラインナップは一介の学生ではあらゆる意味で手の届かぬ専門書のオンパレードで、内容的に臨床医学より研究者寄り、という判断までが限度だった。

どうやら郁紀はこの家で過ごした時間の大半を、ここで費やしたものらしい。床に残された足跡の有様から、時間をかけた家捜しの様子が見て取れた。特にデスクの引き出しや書類棚は引っかき回して探ったらしく、中身が明らかに荒れている。

そんな中、耕司はサイドテーブルに平積みになっている数冊の本に目をつけた。位置からするとデスクに座ったままで手に取り、繰り返し参照していた本だとわかる。そうした位置にどういった書物があるかによって、その人物の人となりがある程度以上に窺い知れたりするものだが

――

耕司は眉をひそめた。三冊の本はどれも歳経た重厚な革表紙の洋書で、学術書というよりはむしろ、ガラスケースに収まっていそうな稀覯書（きこうしょ）の類に見える。

表題も謎だった。『Traite des Chiffres』――これは記号論の本だとしても、『Ars Magna et Ultima』というのは占いか何かの本だろうか？　さらにもう一冊の『Voynich manuscript』――何かの写本だということらしい。だが開いて数ページを捲（めく）ってみたところで、まるで意味をなさないアルファベットの羅列が並んでいるだけで、耕司にはとても読めたものではない。特殊な記述を用いて、暗号化でもされているのだろうか。

いずれにせよ、どれも医術とは関連がない。にわかに、奥涯氏を医学者だとする推察にも自信がなくなってくる。

そうこうしているうち、ポケットサイズのマグライトを発見した。この書斎の様相からするといかにも違和感のある代物だが、おそらく郁紀が持ち込んだものだろう。ありがたく利用させて

もらうことにして、手明かりをオイルライターから持ち替える。小ぶりながらもＬＥＤの白昼光は強力で、不安定に揺らぐ小さな炎とは比ぶべくもない。

「……ん？」

その効能は覿面に現れた。ライターの弱い光では判らなかった奇妙な痕跡に、耕司は気がついた。

汚れだ。

特にドアノブや階段の手すりが著しい。手垢などというレベルではなく、汚損したままの雑巾で摑んだような、黒ずんだ液状の汚れがそこかしこにこびりついている。

注意して見れば、床に近い壁のあちこちにも、同様の飛沫が散見できた。吐瀉物にまみれたモップで乱雑に床を拭いて廻れば、こんな跡がつくかもしれない。

「……」

あまりにも奇異な痕跡だった。

全身から汚水を滴らせながら屋内をうろつく居住者の姿を想像し、耕司はわけもなく胸が悪くなる。

書斎の隣には寝室があった。耕司は直感に駆られ、クローゼットの中を検めた。

案の定、空のままのスーツケースが二つほど見つかる。

もし家主が長期の旅行に出かけているのならば、家に残っているのはいかにも不自然な代物だ。
体温が数度下がる。
やはりここに住んでいた人物は、この家のどこかに――
さっさと逃げ出してしまいたい気持ちを堪えつつ、耕司は二階から下り、一階の捜索を始めた。もし変死体でもあるならば、即座に警察を呼ぶ心づもりだった。何となれば、すでに屋内には耕司の指紋がいたるところに付いている。いま第一発見者になって通報すれば罪科は不法侵入程度で済むだろうが、後日になっては申し開きが立たない。そうなっては、青海の帰りを待つことすらままならなくなってしまう。
改めてマグライトの明かりの中で見ると、居間の汚損は二階に輪をかけてひどいものだった。ソファーなどは、ヘドロの底から引き上げてきたかのような有様だ。
台所。水回りの様子を一目見て、耕司はシンクに近づくのをやめた。この家の住人がどういう暮らしをしていたのか、もう想像もしたくなかった。
浴室の前まで来た。
耕司の脳裏を、テレビドラマでよく見るようなワンシーンが過(よ)ぎる。浴槽に満たされた湯に浸かり、手首を剃刀(かみそり)で切る自殺の場面。近頃見た海外ドラマの中でも、死亡した犠牲者の肉体を風呂場で解体して処理するシーンがあったような……。

覚悟を決めて、耕司はそっと浴室の扉を開け、白くぼんやりと浮かび上がる陶製のバスタブの内側にマグライトの光を差し入れた。

大量の、骨だった。

干涸らびた腐肉と血をこびりつかせた肋骨らしき骨の輪郭が、白光に浮かび上がる。

下肢の力が抜けそうになった。咄嗟に手を壁につき堪え、目にしたばかりの惨澹たる情景に思索を巡らせる。

が、しかし……。

骨だ。骨が——小さい。それに数が多すぎる。人間の骨では、ない？何かがおかしい。違和感がある。

何度か深呼吸して気持ちを落ち着けてから、耕司は浴室に再度踏み込み、浴槽の中を観察した。

骨は浴槽の半ばぐらいの深さまで、まるで落ち葉か何かのように堆積していた。明らかに人間ではない……犬や猫、それと鼠や雀といった小型の脊椎動物のものだ。しかし、だとしても量が異常だ。これだけの量を蓄積するには、いったい何匹分の死骸を集めればいいのだろうか？

骨は残らずバラバラに解体されている。おそらく、肉や内臓も切り分けた上でのことだろう。そうでなければ腐敗や臭気で近隣に露見し、すでに事件化しているはず——そう思ったが、さらに仔細に調べたところで、どの骨にも溝状の傷が幾重にも刻まれているのがわかった。つまり肉は——歯で、こそげ落とされている。

自身の理性のためにも、それが人間の仕業とは考えたくなかった。
おそらく何らかの肉食動物を、この家ではペットとして飼っていたに違いない。餌として与えた小動物の骨を、家主は浴槽に放り込んで溜まるがままにしてきたのだろう。だがなぜ、ちゃんと処分しなかったのか？　餌の食い残しなど、生ゴミとして破棄すればそれで済むことだろう。それとも家から出られない理由でもあったのだろうか？
人間の骨ではないと判った時点でわずかに安堵したのも束の間、耕司はこの家にまつわる不可解な謎がなおいっそう不気味に膨張するのを感じた。
だいたい、こんな家に上がり込んで郁紀は一体何をしていたのか？
「耕司か？　何をしてるんだ、こんなところで」
「⁉」
ぎょっとして振り向いた耕司のマグライトが、大きく震えながら背後にいた郁紀の無表情な顔を照らし出した。
「わかってるのか。不法侵入だぞ」
「お前だって……同じだろうが……」
激しい動悸（どうき）の合間から、かろうじて声を絞り出す。
郁紀は耕司の肩越しに軽く浴室を覗き込んだだけで、あっさりとその扉を閉めた。まるであのおぞましい骨の山が、まったく見えなかったとでもいうように。

「僕はこの家の人と知り合いなんだ。頼まれて捜し物をしに来ただけさ」
「知り合いって……いつから？　いったい何者なんだ？」
「いずれ、機会があればお前にも紹介するよ。僕の恩人とも言える人だから」
耕司の方を見ようともせずにそう言って、郁紀は再び家を出ていこうとする。
「おい、郁紀……」
ようやく動悸が治まりひとごこちがつき、耕司はその後を追いながら声をかけた。
「お前まさか、近頃様子がおかしいのは、その知り合いっていう奴のせいなんじゃ――」
玄関口に立った郁紀が、肩越しに耕司を一瞥する。
思わず耕司が立ちすくむほどに、その眼差しは冷ややかで感情を欠いていた。
「僕の後をつけて来たんだね？　耕司」
「……」
言い逃れの言葉などあろうはずもない。耕司は、郁紀の視線に射すくめられたまま生唾を呑み込んだ。
「そういうのは、迷惑だ。二度とやらないでもらいたい」
答えも待たず、郁紀は耕司一人を置き去りにしたまま玄関から出て行った。
「――……ああ」

そのときまで耕司にとって匂坂郁紀とは、それでも気心の知れた親友として胸中の隅に置かれていた。

だが今はわからなかった。ただ凍み氷るような畏怖の想いだけがそこにあった。

果たしていま耕司を睨み据えていった人物は、本当に彼が知る郁紀なのだろうか。その皮を被った別の何者かではないのか。無二の友であった郁紀という人間は、実はもう存在しないのではないのか――

そんなことを耕司は、なかば本気で考え始めていた。

匂坂邸前　郁紀

目障りな奴だ……。どうしてああも僕に干渉してくるのか。

社交辞令として声をかけてくるなら、こちらだって我慢する。当座の所は、友人としての振る舞いを続けるのもやぶさかではなかった。だが興味本位で他人のプライベートに首を突っ込んでくるというのであれば、それは明らかな侵害だ。

相手に関心を持つことはすべて好意の表れであり、正しいことで、皆すべからくそうあるべし、といった勘違いをしている手合いがこの世の中にはいる。耕司がまさしくそのタイプだ。

人の都合を考えず、とにもかくにも首を突っ込む。あいつにとってはそれこそが親切や友情、正義の形なのだろう。

なんて迷惑な。もしこれ以上、耕司が僕のやることに横槍を入れてくるようなら、何か対策を講じなければならないんじゃないだろうか。沙耶に言われた通り、奥涯教授の捜索はできるだけ密かに進める必要がある。それをあいつはぶち壊しにしかねない。

沙耶は『手がかりになりそうな物は何も残されていない』と言っていたが、あにはからんや、奥涯家は探す価値のありそうな場所があまりにも多かった。この調子では、あの書斎を調べるだけでも何日かかることになるか。

さらに幾度か、あの家には通わなければならないだろう。耕司に場所を知られたのは思うより厄介かもしれない……。

『——チョット、匂坂ョXン？』

自宅の門をくぐろうとした僕を、身の毛もよだつような声が呼び止めた。

思わず身構えそうになるのを抑えて、何食わぬ顔で振り向くと——うじゃうじゃと沸き立つ肉の山が、剝き出しの眼球でじっと僕を睨んでいる。

『コンバB&ワ、匂坂サン。今オ帰リさIスカ？』

「ええ、まぁ——」

判った。こいつは僕の家の隣に住んでいる鈴見（すずみ）とかいう中年男だ。職業は絵描きだか何だかで、仕事勤めの女房の代わりに、日がな一日家にいるらしい。
元々近所付き合いと言える程の交流もない相手だが、なぜ今日に限っていきなり声をかけたりしてきたのか……。
『オ一人ノ暮ラ稱ｵTハモウ、慣レマシ觸カ？』
「ええ、はい。おかげさまで」
『……色々ト大変デシ&鉉ﾉガ、アナAQハマダ若イ。過ギタコト{ムｧEモ先ノコトヲ考エテ頑張ッテ熙Rjサイ』
「はぁ」
——何のつもりだ？　ただ辻説法（つじせっぽう）がしたくて呼び止めたのか？
『コ△ダケ立派ナオ宅ダト、ヤハリ一人デ面倒ヲ摘Xｾノハ大変ナノHﾘ0ｷ$ナイデスカ？』
「まぁ、そうですね。苦労してます」
『セメテ家政婦サx7ILｨモ雇ワレテハドウA^\MDMカ？　オ父上モソウシ夲癲ラレタノデショウ？』
「ええ。でも、まだ学生の身ですし、蓄えには限りがあるので。なかなか」
『ソウデスカ——』

隣家の肉塊はそれでもまだ何か言いたげに、ゆらゆらと蠢いている。見ているだけで僕の中の嫌悪感が臨界に近づいていく。

『デモ、セメテ庭ダケG$Tヅ一度、手ヲ入レテハ虔潭デスカ？　良カッタ6ɪラ私モオ手伝イシマスヨ』

「あ、いえ。お構いなく。一人でも何とかなりますから」

……なるほど。僕の家の体裁が悪いと、あんたの家の美観まで損なわれて困る、というわけか。俗物が気取りやがって。

僕は形ばかりの愛想笑いを返すと、さっさと門の内側に退散した。

まったく、どいつもこいつも……癪(しゃく)に障る！　いっそ誰もいない場所に行って暮らしたい。沙耶と二人きりで。

玄関から中に入るまでの間、鈴見の視線はずっと僕の背中にまとわりついていた。

匂坂邸前　鈴見

逃げるようにして家に入っていく隣家の青年を、鈴見洋佑(ようすけ)は腹立ち紛れの溜息とともに見送った。

何なんだ？　あの態度は。人と話しながらも、まるで汚いものを見るように終始、目を逸らして嫌そうに……。
昔からあんなに感じの悪い男だっただろうか。いや、そんなことはない。ご両親が健在だった頃は、きちんと礼節を弁えたごく普通の青年だった。
となると、やはり事故と慣れぬ一人暮らしがストレスになっているんだろうか。あんな調子では精神を病んでしまいかねない。それとも、あの有様ではすでに……。
うんざりした気分で、洋佑は荒れ果てた隣家の庭を見渡した。
夕食の席に着いても、洋佑の脳裏には匂坂家の長男のことが残っていた。
「――どうしたの？　あなた。難しそうな顔して」
「うん……今日な、隣の家の息子に会ったよ」
「お隣のって、フミノリお兄ちゃん？」
「ああ、郁紀君といったか。庭のこと、ひとこと言っておいた」
「そうよねぇ……せめてあの臭いだけは、どうにかしてもらいたいわよねぇ」
元より庭先の荒れようは気になってはいた。加えてここ数日、漂いはじめた悪臭が日毎に強さを増しており、一家で閉口していたところだったのだ。
「どこか草叢の中で、犬か猫でも死んでるんじゃないかしら？」
「どうかな。案外、生ゴミをそのまま庭に捨てているとかかもしれんぞ」

「まさか。いくら何でもそんな……」
「いや、あの様子だとやりかねん。家族をなくして、葬儀以来、一日中ずっと雨戸も閉めたきりで……。本人も、すっかり荒んだ様子だった」
「お兄ちゃん、アタマおかしくなっちゃったのかな？」
「こら、博美（ひろみ）。そういう言い方はダメよ」
「いや、あれは実際、ちょっと度が過ぎてる。本人もだいぶ参ってるんじゃないか？」
「……大丈夫なの？　それ」
「お隣とはいえ人の家のことだから、何ともなぁ……」

匂坂邸　郁紀

その夜は一分一秒が拷問（ごうもん）のように僕を責め、苛むようにゆっくりと過ぎていった。

奥涯家から戻った僕を迎えたのは、静寂だった。沙耶が、行く先も告げずに忽然（こつぜん）と姿を消していた。

彼女が散歩に出ること自体は珍しくはない。僕も同伴することがある。だがそれは決まって人通りの絶えた真夜中の、それも長くて二時間程度のささやかなものだ。

今、時刻はすでに午前五時。しばらくすれば空が黎明（れいめい）の兆しを見せ始める。

僕が戻る直前に入れ替わる形で沙耶が出ていったと仮定しても、すでに半日近くが経過している計算になる。一睡もできないまま、ただ悶々と時を過ごすしかなかった。

こんな事なら、奥涯家の捜索をもっと早くに切り上げて帰宅していればよかった。耕司などにかかずらい、無駄にした時間が心底惜しい。

このまま沙耶が戻らなかったら――そう考えると、頭髪を引き毟りたくなるほどの焦燥に駆られる。

久しく遠ざかっていた孤独への恐怖が、じわじわと僕を圧迫していく。

やがてカウベルの音が響き、待ち望んだ「ただいま」の声が玄関から届いたとき、僕は心的疲労のみならず、安堵のあまりに足元がおぼつかなくなるのを感じた。

「あぁ疲れた。やっぱり往復すると遠いなぁ」

「沙耶！　いったいどこに――」

戻った彼女は、小脇になにやら分厚い書類の束を抱えていた。

「――それは？」

「郁紀のカルテとか、手術の記録。今日は病院まで行って来たの」

よいしょ、と彼女が荷物を下ろすと、途端に紙束が崩れ床を覆い尽くした。

沙耶はお気に入りのクッションを抱き寄せてソファに腰を下ろすと、さもくたびれた様子で「んうぅぅ」と唸って大きく伸びをする。

「こんな時間まで？　Ｔ大から歩いて戻ってきたのか？」
「ごめんね。もっと早く帰れると思ってたんだけど、調べ出したらキリがなくって」
沙耶は床に散らばった書類を拾い、慣れた手つきでそれを仕分け直しはじめる。
「けっきょく、ぜんぶ持ち出してきちゃった。あー重かった」
疲れているせいだろうか。僕には沙耶の話の脈絡がまったく摑めない。
「それで……そんなもの持ってきて、どうするつもりなんだ？」
「どうするって——もちろん、調べるのよ。家で時間かけてじっくり」
そんなことを言いながら、沙耶は束になったＭＲＩのフィルムを次々と天井の明かりに翳（かざ）し確認している。たまに「あ、これ要チェック」などと呟いて別の山に分類している様子からして、まんざら冗談という訳でもないようだ。
「沙耶。……君、読影（どくえい）なんてできるのか？」
「パパに色々と教わったから。……ふぅん、なるほどね。これじゃ、いつまで経っても治せないよねー」
「……治せない、のか？」
「人間のお医者さんじゃ、ね」
沙耶の口調は、冗談とも本気ともつかなかった。
「私でも、まだちょっと難しいかな。色々と試してからでないと」

さらりとそう言いながらも、沙耶が書類を捌いていく手つきは止まらない。その手際があまりにも鮮やかで初めのうちはわからなかったが、彼女は手に取った一枚一枚についてきちんと上下まで視線を走らせていた。

——まさか、本当にこの子は僕のカルテを読み通そうとして、いや、読み通しているのだろうか？

「なぁ、沙耶？」

「うん？」

沙耶がカルテから視線を上げる。

「今日はもう疲れたし……寝ないか？」

「うん。郁紀がそうしたいなら、そうする」

沙耶はにっこり笑って書類を放り出すと、すぐさま僕の服を脱がしにかかった。

「お、おい……」

「寝る前に一回だけ。ね？　いいでしょ？」

その清楚な容姿に反し、沙耶のセックスに対する貪欲さは大人顔負け——いや、ちょっと異常とさえ言ってもよかった。情熱的なだけではなく、こんな細い身体のどこから湧き出てくるのかと思うほど、その体力にも限りがない。僕に存分に貪らせ、その上でなお足りぬとばかりに僕を貪り、いつも先に音を上げるのは僕の方だ。

「なぁ沙耶。こう毎日続けてちゃ身体に毒じゃないのか？」
「え？　郁紀、どこか具合が悪いの？」
「いや僕は……。身体はすっかり回復してるし、平気だけど。でも沙耶はまだ――」
「アハハ。平気だよぉ」
小悪魔のように笑いながら僕をベッドへと押し倒す沙耶は、いつもと変わらない甘やかな重みとその柔らかさで、僕の自由を奪ってしまう。
「平気なわけないだろ。いくら言ってもその……避妊もしてくれないし」
呆れたことに、沙耶はそうした用心にはまるで無頓着だった。それどころか、事に及んでは必ず僕が彼女の中で果てることを強要してくる。幾度も抵抗したが、彼女に誘惑され勝ち目のあるはずがない。結局、最後には僕が負けてしまう。
「郁紀はさ、沙耶に子ども産ませるの、嫌？」
真っ直ぐな瞳が、正面から僕を射すくめる。
「……嫌も何も、沙耶みたいに小さい身体じゃあ、もっと慎重に考えないと。母胎の負担ってのは、君が思うよりずっと大きいんだ」
「ん～、郁紀が心配してることって、わりと的はずれなんだけど……」
まるで僕の方が間違っていると言わんばかりに、首を傾げる沙耶。

「でも、それって郁紀が沙耶のこと大事に思ってくれてるからなんだよね。うん、それはそれで嬉しい」
「おっ、おい、沙耶」
「だから……ね？　やっぱり一回だけ！」
そう言って彼女は、再度僕の胸板にその体重をかけてきた。
――ともかく、沙耶は戻ってきたのだ。今は、それで充分だ。

隣家　鈴見

午後二時。鈴見洋佑にとっては一日の内で最も人生が充実する時刻だった。
妻と娘を送り出した後、午前のうちに掃除と洗濯を済ませ、ゆったりと昼食を取った後、イーゼルへと向かう。
売れる画家ではない。個展も赤字が前提だ。だが書斎のマッキントッシュで片手間にこなす副業のエディトリアルデザインで、日々の暮らしに苦がない程度の糧（かて）は得ている。
雑誌社に勤める妻の収入と合わせれば家族三人、家のローンと娘の学費を賄（まかな）ってなお余裕のある生活ができた。
欲を出さずに悠々自適。洋佑の理想そのままの生活だ。

己の人生と、その象徴ともいえる我が家を洋佑は愛していた。庭の草を刈り、窓を拭き廊下を磨き、台所とトイレと浴室を清潔に保つ。それは自身の肉体を風呂で清めるに等しい喜びだった。

手の爪の伸び具合や腹の減り具合と同じように、各部屋の扉の開閉の具合や花瓶に活けた植物の鮮度、製氷皿にある氷の量、そういった家の諸々の状態を明確に把握できているのが洋佑の自慢であり、それらが過不足のないコンディションに保たれた上でこうして二階のアトリエに座り、テレピン油の匂いを嗅ぐ。そのとき彼は、この上もない満足感に満たされるのである。

パレットの上で得心のいく色を探して絵の具をこねながら、ふと喉の渇きを覚えたときも、すぐに洋佑は冷蔵庫のオレンジジュースの残量が乏しいことに思い至った。乏しいといえば、そろそろ入浴剤と粉石鹸も補充しておかねばならない。夕飯の食材を買いに行くついでにそれらもスーパーで買い足すとなると、それなりの荷物になるだろう。

さて、それでは作業をどの辺りで切り上げ買い物に向かったものか。……そんなことを漫然と考えながら、洋佑は階下に下りて台所に向かう。

そのとき、首元をひと筋の微風がくすぐった。洋佑は廊下の途中で立ち止まる。

隙間風。——有り得なかった。

窓はすべて施錠されている。午前の掃除で、洋佑がこの手で閉めたのだ。

風の出所を探して、洋佑は居間に入った。

すぐに、異臭に気がつく。隣家から漂ってくるのと同じ、鼻を突く、腐った沼の瘴気のような臭い。

見れば淡い風を受け、カーテンが緩やかに膨らんでいる。

庭に続く窓が開いていた。

鍵の傍のガラスに穴が空いている。奇妙なことに、割られたのではなく、薬品か何かで溶かしたような穴だった。そこから手を入れて開鍵し、サッシを開けたのだろう。

胸を騒がす怒りと、それに倍する恐怖が洋佑を虜にした。

耳を澄ましても、物音はない。侵入者はすでに目的を果たし、出ていった後なのだろうか？　だが空き巣だとしたら部屋に物色された跡がないのが妙だ。それとも、洋佑が来るのに気がついて、とっさにどこかに隠れたか――

右手には絵の具がついたままのパレットナイフがあった。風に気をとられ、手に持ったまま来てしまっていたのだ。洋佑は麻痺しかかった思考でナイフをじっと見つめた後、考え直した。これではあまりに心許ない。代わりに、テーブルの上にあった灰皿を手に取った。ガラス製だが分厚く頑丈で、鈍器と言って差し支えないだけの質量を備えている。

隅々まで手入れの行き届いた屋内が、まるで見知らぬ異界のように感じられた。

動悸が切迫していくのを意識しながら、洋佑は居間の中を見渡した。何者かがいるとして、身を隠せそうな場所はそう多くない。ダイニングから台所へ抜けたか、あるいは客間へと逃れたか、ふたつにひとつ。

台所は洋佑の下りてきた階段と近い。動きがあれば廊下にいた時点で判ったはずだ。となると、まず怪しいのは客間の方か。

洋佑は摺り足で移動し、客間へ続く引き戸に手をかけた。

それにしても――臭い。隙間風が運ぶ臭気だけで、こんなにも匂うものだろうか？　まるで匂いの元が部屋の中にあるようではないか。

覚悟を決めて、引き戸を開け放つ。

畳敷きの和室は無人だった。さらに押入があるが、あそこには人が入れるだけのスペースはない。

やはり、家の中にはもういないのか……安堵に似た脱力が、洋佑の緊張を緩ませる。

足首を摑まれたのは、そのときだった。

驚愕に身を凍らせた隙に、そのまま足を掬われ、洋佑は受け身も取れないままに転倒する。引き戸のレールに激しく頭を打ちつけて、眼孔の奥で星が散った。

洋佑の足首を摑んだ手は――果たしてそれが手と呼べるモノかどうかは別として――居間のソファの下から伸びていた。

床との隙間は五センチもないはずの、その狭すぎる空間に、庭からの侵入者は潜んでいた。断じてそれは、人間ではなかった。
「うわあぁぁあっ⁉」
悲鳴を上げた洋佑が床から起きるよりも早く、さらに無数の手らしきモノが彼の腕と足に絡みつき、洋佑の自由を奪う。
『ォヂヴィデ。ゴワグナィガラ』
くぐもった、泡立つような声とも思えぬ音声とともに、冷たく軟質の感触が洋佑の上に乗り上げてくる。
「ひぃッ、ひぃッ、ヒィィィィッ！」
すでに喉が痙攣して悲鳴さえも出ない。パニックに陥った洋佑の耳元に、ふたたび不気味な声が囁(ささや)きかける。
『ィダグジナィョ。ゴワガラナィデ。ィダグジナィガラ』
そして洋佑の両耳と鼻から、細くうねる管状のものが頭蓋(ずがい)の中に進入してきた。
そのおぞましい感触に発狂する一歩手前の状態で、洋佑の意識は断絶した。

「お時間を取っていただいて、ありがとうございます」
そう神妙に頭を下げながらも、耕司はその女医の若さに内心で驚いていた。
それでいてT大最先端医療の現場に立つ脳外科医というのだから、よほど優秀な人物なのだろう。
「お気になさらず。私としてもちょうど、彼のお友達に話が聞きたかったところなの」
一見すると冷ややかに見える、やや整いすぎた感のある美貌（びぼう）とは裏腹に、彼女は気さくに笑って答えた。
「はじめまして。匂坂郁紀くんの主治医を務めさせていただいている、丹保です」
「郁紀の友人で戸尾耕司といいます。彼女は、津久葉瑶」
紹介を受け、瑶もやや恐縮した面持ちで頭を下げる。
駄目で元々のつもりでT大付属病院を訪れ、郁紀の主治医に面会を申し入れた耕司と瑶だったが、拍子抜けするほどあっさりと診察室に通された。
「匂坂くんについて話が聞きたいってことだったけど、私の方も同じでね」
「はぁ……」
「彼、一昨日の診察に来てくれなかったのよ。留守電に入れた伝言にも返事がないし」
一昨日……郁紀があの奇妙な空き家を家捜ししていた日だ。耕司は表情を曇（くも）らせた。あれは、受診の予定をすっぽかしてまですることだったのだろうか？

「彼、学校ではどんな様子？」
「どうもこうも……もう滅茶苦茶です」
横にいる瑶がぴくりと肩を震わせたのが目に入り、耕司はもうすこし言葉を選べばよかったと後悔した。
「事故の前とは、まるで人が違ったみたいで。僕たちも色々と、その、どうしていいか判らなくて……それで今日は、先生の話を伺えたら、と」
「……あなたたちも医大生？」
「え？　はい」
「そう。じゃあひとつ聞くけど、彼のカルテ、見てみたいと思う？」
「……見せてくれるんですか？　そんなもの」
怪訝そうに訊き返す耕司と瑶の二人を、丹保医師はしばらくジッと見つめた。その視線に尻の据わりが悪くなり、耕司がもぞりと身じろぎしかけた所で――
「そう思った人がいたみたいなのよ。それもこちらには断りなく、ね」
医師は視線を外し、溜息交じりにそう呟いた。
「一昨日の晩、この病院に侵入者があったの。保管庫から消えたのは、匂坂くんのカルテと、関係手術資料がまるっと一式」
「――本当ですか!?」

面食らった耕司と瑶の顔を丹保は再びまじまじと眺め、苦笑してかぶりを振った。
「まぁ、あなた達は無関係そうね。ちょっと安心したわ」
「あ、当たり前です」
「サーバ内の電子カルテはノータッチだったし、治療記録を消したかったわけではなさそうなのよね。ただただ、匂坂くんに興味があったとしか思えない」
「はぁ……」
耕司の脳裏を不吉な空想が過ぎった。まさかカルテを盗んだのは、郁紀本人ではあるまいか――。
丹保医師の顔を窺うと、彼女もまた沈鬱（ちんうつ）な面持ちで耕司の視線を受け止めた。
それだけで耕司は、丹保も彼と同じ疑念を抱いていることを察した。
「あなたには、他に心当たりはない？　匂坂くんの知り合いで、そういうことをやりかねないような人」
そう言われ、耕司が真っ先に思い浮かべたのは、当日、郁紀を尾行し行き着いた、あの不気味な家のことだった。
「知り合い……なのかどうかすら、自分には判らないんですが――多分、医学関連の人間で確か、奥涯っていう名前の……」
丹保の表情がありありと変わったのを見て取って、耕司は言葉を止めた。

「ご存じなんですか？」
「……匂坂くんがその男と、いつ、どうやって知り合ったのか判る？」
「いえ、こっちが知りたいぐらいで。一体何者なんですか？　その奥涯っていう人は」
丹保はしばし、苦々しく床を睨んでいたが、やがて目を閉じ深々と溜息をついた。
「――いいわ。その気になれば簡単に調べがつくことだし。奥涯雅彦はうちの大学にいた教授よ。色々と……不祥事があって、半年以上前に免職されているけど」
「不祥事って、いったい何を？」
「ごめんなさい、そこからは部外者に話せることじゃないわ。ただ、匂坂くんには何の関係もないことよ。それだけは確か」
すげなく言い放つ丹保に対し、耕司は食い下がるだけの言葉を用意できなかった。
だが何も関係がない、などということがあり得るのだろうか？　どうも、郁紀についての謎を解き明かす有力な手がかりのように思える。
「先生、もしかしたら郁紀は何か――犯罪に関わっているかもしれないんです」
意を決して、打ち明けた。これには目の前の丹保のみならず、耕司の横で二人の会話を追っていた瑶も眉をひそめる。
「どういうこと？」

「彼を訪ねていったきり……行方不明になった人間がいます。もちろん、郁紀は否定していますが」
「それって……青海ちゃんのこと？」
「すまん、津久葉。……今まで、どうしても言えないでいた」
ショックに呆然となった瑶にいたたまれず、耕司は頭を下げた。丹保も、いよいよ深刻さを増した表情で眉根に皺（しわ）を寄せている。
「どうやら、その奥涯という人が今、郁紀の関心の焦点になっているらしいんです。彼が何者で、郁紀が彼の何について探っているのか……」
「……」
「それが判れば、少しは事情が見えてくるかもしれません。お願いです先生、教えてください。この病院でいったい何があったんですか？」
長い沈黙があった。
丹保医師は目を泳がせて逡巡していたが、それでも最後には迷いを振り落とすようにかぶりを振った。
「……ごめんなさい。こればかりは……私の一存で話せる事柄じゃないの」
「先生――」

「とにかく、少し時間を頂戴。私も、私なりに調べてみる。放っておける状況じゃないのはよく理解できたから」

「……はい」

歯痒くはあったが、学生でしかない身分の自分にできることは少ない。瑶についても同様だし、だからといって警察もあてにはならなかった。

緊急性や事件性が認められない限りは行方不明者ではなく、一般家出人という区分になるのだという。せいぜい交番に回覧が出回る程度の『捜査』しかされない。

後は、この若い女医を信用するしかなかった。

「お互い、携帯の番号を交換しておきましょう。何か判ったら連絡する。あなた達も、何か新しい動きがあったらすぐに私にも教えて」

「――わかりました。お願いします」

鈴見

俺は……一体、どうなった……？

混濁の中から、洋佑はごくわずかずつ思考を取り戻していった。

寒い、いや――暑い。

生温かい舌と冷たい蛞蝓（なめくじ）とが交互に肌の上を這い回っているかのような、掻痒（そうよう）。
一体、何がどうなっているのかわからない。おそるおそる目を開ける。

壁も、天井も、すべてが『それ』に覆われていた。
居間で洋佑を襲い、洋佑の頭の中に入り込んできた、『アイツ』に――
恐怖が、あっけなく理性を噛み砕く。
「ぅわ、わ、わぁぁ……ッ」
体の上に覆い被さっていたものを払いのけ、身悶えした途端、洋佑は寝転がっていた場所から転がり落ちた。
床――なのか？　毛足の長い絨毯（じゅうたん）かと思ったそれがざわざわと蠢き、洋佑の指の一本一本に絡みついてくる。
すべて蚯蚓だった。
「ヒィッ！」
手足にまとわりつく蚯蚓をブチブチと引きちぎって立ち上がろうとするが、バランスが取れずにまた転ぶ。その途端、床の蚯蚓が一斉に洋佑の全身を搦（から）め捕る。
一体ここはどこなんだ……。俺はどこに連れてこられたんだ……!?
ぶよぶよと蠢く部屋の出口を求めて、洋佑は蚯蚓敷きの床を這い回った。

だが外の廊下も、隣の部屋も、壁も、天井も。どこもかしこも血と腐肉と胆汁で埋め尽くされ、胎動していた。どこも逃げ場所はなかった。

「何なんだ……何なんだよォォ……」

おぞましいことに、この地獄は……間取りだけはあれだけ完璧に把握していた洋佑の家とまったく一致していた。洋佑は半狂乱になったまま、悪夢の中で歪んでしまったような家の中をさまよい歩いた。

アトリエに相当する小部屋には、肉片のこびりついた骨を組み合わせて作られたイーゼルに、血まみれのカンバスが載せてあった。配置の癖までが巫山戯(ふざけ)た戯画のように、完全に洋佑のアトリエを再現している。

「畜生……ここから出して……出してくれぇぇッ！」

泣きわめきながら洋佑は腕を振り回し、周囲の物を手当たり次第に殴りつけた。骨のイーゼルが砕け散り、破片が洋佑の拳を裂く。鋭い痛み――だが悪夢は覚めない。これが悪夢でないというなら何だというのか？

やがて力を使い果たした洋佑は、床にくずおれて啜り泣いた。祈ったこともない神に祈った。その祈りに応えるように、軋るようなドアの開閉音が、洋佑の耳朶(じだ)に届く。

階下……玄関？　また誰かがやって来た？

『タダイマ』

身の毛もよだつような鳴き声に洋佑は慄然となった。アイツだ。あの化け物がまた戻ってきた……。

『ぱぱタダイマ～。オナカスイタ～』

『アラ……イナイノカシラ。買イ物ニ行ッテルノカナ？』

『ウ～、ゴハン、マダナノ～？』

ひたひたと湿った足音を立てながら、何かが階段を上ってくる。洋佑は脅え、竦み上がりながらも、震える手で床を探り――叩き壊したばかりのイーゼルの骨を取った。

折れた骨の先端は鋭利に尖っている。両手で持って体重をかければ、身を守る程度の武器にはなるかもしれない。

『アナタ？　イナイノ？』

怪物の呻き声が、だんだんと廊下を近づいてくる。洋佑は息を殺し、部屋の入り口から死角になる壁際に背を押しつけて待った。心臓の鼓動がガンガンと耳の中で鳴り渡る。この音を聞きつけられたらそれまでだ。今度こそ喰い殺されるかもしれない。泣き声を堪えるだけでも必死だった。

そしてついに、洋佑のいる小部屋の扉がゆっくりと押し開かれた……。

『――アナタ？』

「ぅわぁぁぁっ！」

恐怖のあまり裏返る怒声とともに、洋佑は扉を開けた『それ』に襲いかかった。

どろどろの粘液と肉汁にまみれた生物がそこにいた。おぞましさに身体が凍りつく前に渾身の力を込め、洋佑は骨の杭を振り下ろす。

『ギャアアアッ！』

怪物が絶叫した。杭は相手の身体の中心に刺さり、反対側にまで貫通していた。悪臭を放つ肉塊がうねり、身を捩る。そいつは苦悶していた。そう理解した途端、洋佑の中でかっと本能の血が燃え上がった。

「うおおおおっ！」

斃せる。ならば、やられる前にやらなければ——

洋佑は全身のバネを使い両手で杭を振り上げ、何度も執拗に怪物を抉った。

ゴブゴブと泡立つような声をあげて怪物が痙攣する。まるで弱々しく助けを乞うかのように、震える触手が宙に差し伸べられる。

「死ね、死ね！　死ねぇぇッ！」

びくびくと撥ねる怪物の身体を床に押し倒すと、洋佑は渾身の力で踵をその上に踏み下ろした。何度も、何度も……そのたびに、相手の呻きと痙攣は弱まっていった。

ついに怪物がぴくりとも動かなくなったところで、洋佑は荒い息をつきながら、骸から杭を引き抜いて立ち上がる。

『……ぱぱ？』

小さな鳴き声に振り向くと、もう一匹、今しがた斃したものより小さな怪物が、階段の踊り場からこちらを窺っていた。

そうか、まだいたのか……。死に物狂いの暴力が、洋佑に、力への陶酔と高揚感をもたらしていた。今度はもっと楽にやれる。小さいし、さっきの怪物より弱そうだ。洋佑は躁的な笑みを浮かべながら、骨の杭を構えて二匹目ににじり寄った。

小さな怪物は、甲高い悲鳴を上げながら階段を駆け下りていく。

逃がすものか。洋佑は雄叫びを上げながら、その後を追った。こいつらを皆殺しにすれば、もしかすると悪夢から覚めるかもしれない。その可能性に思い至り、殺意がますます獰猛に膨れあがる。

『ぱぱ！　ヤメテ！　ぱぱァ！』

逃げる怪物が転倒する。洋佑はその小さな身体に馬乗りになって、力の限りに杭を振り下ろす。繰り返し突き刺し、ぶよぶよの肉体が完全に形を失うまで、容赦なく杭の先で抉り、引き裂き、執拗に殺し尽くす。

やがて屋内で聞こえる音は、洋佑の荒い息づかいだけになった。化け物は二匹とも殺したはずだ。だが——世界は一向に悪夢から醒める様子がない。

ふらふらとおぼつかない足取りで、洋佑は玄関から外に出た。

「……あは、は、あはははは……」
空も、街も、狂っていた。ねじくれた輪郭。沸き立つ色彩。汚臭に澱(よど)んだ重い大気。どこにも逃げ場はなく、世界には果てがなかった。
まるで地獄の『星月夜』だ。洋佑の精神の中で、最後の理性が砕け散った。
「こんにちわ。おじさん」
鈴の音のような声がした。洋佑は振り向く。
隣家の門の前に、その少女は立っていた。透けるように白い肌、清楚なワンピース。狂気に埋め尽くされた世界の中で、その姿は輝くばかりに美しく見えた。
「おじさんには、私がどう見える？」
「ああ……とっても……可愛いよ……」
洋佑の中で、ぞわり、と狂おしい欲望が鎌首をもたげる。
「ほんと？　じゃあ実験は成功かも！」
なにやら小躍りせんばかりに喜んでいる少女に、洋佑は歩み寄り、その艶やかな長髪にそっと手を触れる。
「こんな可愛らしい女の子は――この世界には――キミだけなんだろうねェ」
「……おじさん？」
少女は怪訝そうに、ねばついた視線と笑みを向け、立ちはだかる洋佑を仰ぎ見た。

「お嬢ちゃん、おじさんと遊んでくれるかい？」
「いいけど……何するの？」
「そりゃあもう、おじさんが愉しめそうなこと、全部さ」
喜色満面でそう嘯(うそぶ)くと、洋佑は少女のワンピースの襟元に手をかけ、それを一気に縦に引き裂いた。
「ひっ！」
愛くるしく繊細な顔が驚きと恐怖に凍る。その表情が、二匹の化け物を殺したあとも胸に燻(くすぶ)り続けていた暴力衝動の残り火に、新たな燃料を注ぎ込んだ。
「いい顔だ、お嬢ちゃん……おじさんにもっと、そういう顔を見せてくれないかい？」
「や……嫌ぁ！」
怯えきった少女は半泣きで隣家の玄関へと逃げ帰っていく。洋佑は獲物を追うハンターの心地よい興奮を存分に味わいながら、その後を追った。
「嫌ぁ！　来ないでぇ！」
必死になったところで、大人の脚力にはかなうはずもない。廊下を駆け抜け、台所に逃げ込んだ少女を、洋佑は易々と捕まえた。背後から抱きすくめ、身動きできないように床から持ち上げる。
「は、放して！　そんな……どうして？　どうしてなの!?」

「言っただろう？　お嬢ちゃんが可愛らしすぎるからだって」
細い手首が抗う手応えを大人の腕力で楽しみながら、洋佑は体重をかけて少女を押さえ込み、まだ身体に残る衣服を破き取っていく。
「嫌だぁ、こんなの嫌ァッ！　やめてぇえ！」
身体の下で若鮎（わかあゆ）のように跳ね回るなめらかな肢体に、洋佑は陶然と見入る。硬く小さく実を結んだ薄桃色の乳首。柔らかくも引き締まった腹と細い腰。狂気のように歪んだ世界の中で、こんなにも清らかな身体を組み伏せている。その感覚には、たまらなく倒錯（とうさく）した趣があった。
「こんなの……こんなはずじゃ、ないのに……」
啜り泣く少女の声が、洋佑の歪んだ欲望をいやが上にも増幅していく。洋佑が悪夢に蹂躙（じゅうりん）されているように、洋佑もまた、このいたいけな少女を存分に蹂躙できるのだ。被害者から加害者へのこの転身には、胸のすくようなカタルシスがあった。
すでに準備万端整った男根をもどかしく引き出し、張りつめた切っ先で、硬く噤（つぐ）んだ少女の秘裂（ひれつ）を弄（もてあそ）ぶようにつつく。とうとう少女は声を張り上げて泣き叫びだした。
「やだよぉ、怖い……怖いよォ！　……郁紀いぃ！」
「アハハ、まだ何もしてないじゃないか」
泣きじゃくる少女の耳元に、洋佑は優しく囁きかけた。
「今からそんなに可愛い声で鳴いて……お楽しみは、ここからだよ。――ほぉら」

「やめ――」
見開かれた少女の瞳を覗き込みながら、洋佑は一気に深々と突き入れた。
「ヒ、ぃ、いた、痛いィ！」
まだろくに濡れてもいない股間を力ずくで割られ、少女が甲高い悲鳴を漏らす。予想に反して破瓜（はか）の手応えはなかったが、しかし未熟な容姿とは裏腹に、洋佑を包み込む少女の感触は驚くほど充実していた。
「おやおや、ずいぶん男に慣れてるねェ。可愛い顔して本当はエッチな子だったんだ」
「……もうやめて……乱暴にしないで……」
「いやいや、こんな悪い子にはお仕置きが必要だと思うね。おじさんは」
笑いながらそう言って、洋佑は思うさま乱暴に腰を突き上げる。そのたびに少女は苦悶に喘ぎ、首を振って溢れ出た涙の飛沫を散らす。
やがて抵抗するだけの力も失せたか、少女はぐったりと脱力し、ただ洋佑の仕打ちを耐え抜くことだけに専念しはじめた。それでも容赦なく股間を抉る洋佑の、欲望に爛れきった双眸（そうぼう）に、涙で濡れた眼差しで訴えかける。
「どうして……どうして、優しく、してくれない……の……」
「可愛いからさ！　いじめたくなるほど可愛く、壊したくなるほど美しいからだよ！」

快感に荒く呼吸を乱しながら、洋佑は吠えるようにして答えた。少女が嗚咽の合間に漏らす掠れ声が、絶望の眼差しが、よりいっそう喜悦を昂ぶらせる。

「助けて……助けてェ……郁紀……」

匂坂邸　郁紀

いつものように、街の景観は僕の神経を逆撫でする。だがそれも、今日は普段ほどの苦痛ではない。

だんだんと慣れてきたこともあるし、何より今日は、ここ数日続けてきた奥涯邸での捜索に、ようやく成果らしきものが出た喜びのほうが勝っている。

その封筒は、おそらく抽斗の縁から裏側へ落ち込んでしまったのだろう。書き物机から全部の抽斗を引っ張り出したその奥に、折れ曲がった状態で発見された。

中身は三点の風景写真だ。今の僕にはまともな景色として認識できないが、いずれもおそらく何かの建物の外観を撮影したものだろう。それぞれの写真の裏には肉筆で住所の走り書きがあった。長野県M村、栃木県S町、それに静岡県H町。どれも聞いたことのない町名だ。あまり名の通っていない、辺鄙なところなんだろう。

写真の隅に記載された日付は、十年以上前のものだった。これが何のために撮られたのか、どういう意味があるものなのかはわからないが、沙耶にこれを見せれば何か心当たりがあるかもしれない。

ともかくこれは、沙耶がまだあの家にいたときに見逃してしまっていた、純粋に新たな手がかりだ。少しは期待してもいいだろう。

沙耶――早く会いたい。彼女が僕の帰りを待っていると思うだけで、家路を急ぐ心が浮き立つ。

門に近づいてすぐに、またも玄関のドアが開け放たれているのに気が付いた。

なぜか今回は門扉（もんぴ）すら開いている。とてつもなく嫌な予感がした。

急ぎ玄関の扉をくぐり抜けた途端、廊下の奥から沙耶の啜り泣く声が聞こえてきた。それだけじゃない。声に重なり、なにか獣のような、湿っぽく唸る息づかいも――

靴を脱ぐ暇さえ惜しかった。僕は彼女の泣き声を頼りに台所へと駆け込んだ。

そこに、怪物がいた。怪物は沙耶を床に組み伏せて、彼女を犯していた。

全身から滴る分泌物を沙耶の肌に塗りたくり、彼女の弱々しく震える足の間に身体を割り込ませて、獣じみた荒々しさで全身を揺すり上げている。沙耶の性器は痛ましいほどに押し広げら

れ、そこに食い込んだ怪物のおぞましい器官は、深く、深く奥底まで沙耶の内側を蹂躙していた。

　怪物の動くリズムに合わせて、沙耶の啜り泣く声がしゃくり上げるように上擦(うわず)る。涙に濡れた瞳が僕を見た。息も絶え絶えという様子で、彼女はか細い声で僕を呼ぶ。

「……郁紀……助けて……」

　そのひと言が契機だった。どす黒い怒りが、一瞬のうちに僕を内側から染め上げる。

　ようやく気配に気がついたものか、沙耶の肉体に没頭していた怪物が、首を巡らせて僕を見た。不揃いな目蓋(まぶた)が、驚いたように縦に瞬く。僕は自分でも驚くほど躊躇なく速やかにその傍らをすり抜け、台所のシンクの横にある肉切り包丁を手に取った。そして間髪を入れず、奴の目玉の並んだ顔面らしき部位を切り払う。

　絶叫をあげて怪物は沙耶の上から離れた。今の一撃で視覚を失ったらしく、伸ばした触手を遮(しゃ)二無二(にむに)振り回して僕を遠ざけようとする。僕は目眩を覚えるほどの強い殺意に凝り固まったままその触手をまとめて片手で摑みあげ、無防備を晒した奴の胴体とおぼしき肉に二度三度と包丁を突き入れた。刃先は面白いほど易々と奴を切り裂き、体液が間欠泉(かんけつせん)のように吹き出して僕の顔を染める。

　縦に横に切り裂いて、そのたびに轟くヤツの絶叫を聞いているうちに、ようやく僕の感情が、この熱が怒りなのだと認識できる所にまで追いつく。こいつは――沙耶を――僕の沙耶を――

許せない。

「あああああッ!!」

僕は我を忘れて吼(ほ)え猛りながら肉塊を斬って斬って斬って斬って斬りまくり、奴が微動だにしなくなってからも切り刻み、それから屍(しかばね)となってしまえばもう苦痛を与えられない事実に気がついて余計に逆上し、あまりに簡単に殺してしまった後悔に歯噛みしながらなおも包丁を突き立てた。

やがて、僕は切っ先の欠けた包丁でガリガリと台所の床を引っ掻き続けているだけの自分に気がついた。怪物はもういなかった。さっきまでは怪物だった残骸(ざんがい)が、あたり一面に散らばっているだけだった。

手を止めて、床を削る音がなくなったところで、消え入りそうな沙耶の泣き声が僕の耳に届く。

「沙耶――」

一体何と声をかけていいのか判らないまま、僕は片隅にうずくまっていた沙耶の身体を抱き上げた。沙耶は一瞬だけ怯えたようにビクリと身を硬くしたが、相手が僕だと気付いた途端、わっと声を上げて泣きながら僕に縋りついてきた。

「郁紀……郁紀……怖かった……怖かったよぉぉ」

返す言葉もなく、僕はただ強く彼女を抱きしめることしかできなかった。

沙耶がこんな目に遭っていいわけがない。何もかもが——そう、自分自身も含め何もかもが許せなかった。沙耶を護れなかった。傍にいてやれなかった。僕次第でこんなことは未然に防げたかもしれないのに……。

「……ごめんなさい……ごめんなさい……」

消え入りそうな声で、沙耶が繰り返す。僕はそっと彼女の頬を胸に押しあてた。

「沙耶は何も悪くない。沙耶のせいじゃない」

そう言い聞かせようとする僕の腕の中で、沙耶は激しくかぶりを振る。

「ううん、違うの。私がやったの……」

「君がやった、って……何を？」

「私、この人の脳をいじったの」

泣き腫らした目で、沙耶はあたりに散乱する残骸を見やった。

「この人の頭の中を、郁紀と同じ状態にして……。世界が、郁紀が感じているのと同じように見えるようにしたの」

僕は沙耶が何を言っているのか理解するのに時間がかかり、その言葉をどう受け止めて良いのかさらに迷う。

「それは——いったい——どうやって？」

途方に暮れて、そう訊き返すのが精一杯の僕に、沙耶はようやく感情を落ち着け、沈んだ声で語り始めた。

「……私には、そういうことができるの。ほかの生き物の身体を組み替えたり、調整したり……生まれつき備わってる能力なの」

「……」

「どこをどういじればいいのかは、その生き物によってまちまちだから、ちゃんと勉強してからでないと駄目だけど……郁紀の脳に何があったのかは、下調べをしてだいたい解ってたから。だから同じことができるかどうか、他の人で実験してみたの」

「なんで……そんなことを？」

「そうすればみんな、郁紀みたいに、優しくしてくれるように――なるかと思って」

沙耶のその呟きの奥底にある絶望的なまでの孤独の色が、哀しい祈りが、僕の胸を締めあげた。

「それなのに、この人は……ぜんぜん優しくなんかしてくれなかった。沙耶のこと虐めたいって、壊したいって言って、あんな……」

その先は言葉にならず、彼女はまた僕の胸の中でさめざめと泣き始める。落涙する沙耶の背中をさすりながらも、僕の思考はほとんど真っ白に麻痺していた。

沙耶は――この子は、何者なのだろうか？　僕には到底答えが出せそうにない。

けれど、そんな僕にでもひとつだけ、すでにはっきりと答えの出ていることがある。
それは沙耶が、彼女が根本的なところで勘違いしている、たったひとつの単純な事。
「僕が沙耶に優しいのは、僕が事故に遭ったからだって……そう君は思ったんだね？」
「……うん」
悄然と頷く沙耶に、僕は微笑してかぶりを振った。
「違うんだ。それは確かにきっかけではあったけれど、でも、きっかけでしかない」
「……？」
「そこから先なんだよ。僕と沙耶が出会って、それから二人で過ごした時間の——日々の積み重ねが、今の僕らの関係を作ってるんだ。解るかい？」
「郁紀……」
「あの日から今日まで、沙耶と一緒にいた僕だから……沙耶に優しくして、大切にしてあげたいって……そう思う僕になった。そう思われる沙耶になったんだ。これって——大変なことだろう？」
また沙耶の目から涙が溢れた。だがそれはさっきまで僕の胸を濡らしていた涙より、ずっと温かいものだった。
「うん、わかってる。さっき、やっとわかった。沙耶には郁紀しかいないんだって。郁紀みたいな人は、もう他に誰もいないいんだって」

彼女が笑った。
この瞬間、僕は、今まで沙耶と共にあったどの瞬間よりも痛切に、彼女との絆を感じていた。
きっと、沙耶も同じだっただろう。ふたたび僕は沙耶を深く抱き寄せ、そっと唇を重ねた。沙耶もまた両手を伸ばして僕の頭をかき抱き、唾液（だえき）と舌とでそれを確かめ合った。
そのとき沙耶は、僕にとって世界のすべてだった。
沙耶にとっても、僕が世界のすべてだった。
そして、いま世界は二人だけのものだった。
そうだ。僕はまだ彼女に肝心なことを言っていない。なぜ今になるまで言葉にしていなかったのか。あまりにも当然すぎることだったが、それはやはり――一度は口に出して誓わなければならないことだった。
「沙耶、僕は君のことが――」
「――待って」
なぜか沙耶は僕の唇に指を当てて、その先の言葉を遮（さえぎ）った。
「その前に、郁紀。ひとつだけ確かめさせて。あなたの望みを」
「僕の……望み？」
沙耶は頷き、いつになく真顔で僕の目を覗き込んだ。

「さっきも言ったけど、私には、私にしかできない方法で生き物の身体に干渉できる。人間の脳をいじる方法も、これでちゃんと確認が取れたわ。だから――」
沙耶は言葉を切り、深く息を吸ってから、言った。
「今なら、あなたの頭を元の状態に戻すことも、できるの」
「……何だって？」
それは今まで、僕が自分の未来から、完全に切り捨てていた可能性だった。
「その人にやったのと逆のことを、郁紀にしてあげればいいだけ――簡単なことなの」
沙耶の言葉の意味するところを、僕は何度も頭の中で反芻(はんすう)し、確かめた。
「だから郁紀、教えて。あなたが昔の暮らしに戻りたいかどうか。あの事故で失ったものを、取り戻したいのかどうか」

僕は――

選択肢

・取り戻したい

・もういらない

〈選択：もういらない〉

僕はどんな顔をしただろう。事故の後、はじめて目を開き恐怖したあの日ならば。

この先、幾歳月もの時を経てこの日を思い起こした時には、他の選択もあったと迷うことがあり得るのだろうか。

でも、今ここで答えろというのなら、迷うまでもなく回答はひとつだ。

僕は見る影もなくバラバラになった怪物の骸を見て、沙耶に訊ねた。

「あの人は、誰だったんだい？」

「隣の家に住んでたおじさん。名前は知らないけど」

「……そうか」

見知らぬ他人ではない。何度も言葉を交わした。かつては今より交流もあった。

その彼を、ついさっき、僕はこの手で殺したわけか。

さしたる感慨はなかった。

隣家に住む画家で、家族を持つ気さくな中年男。その面影は、僕がどこか遠い場所に置き去りにしてきた記憶にすぎない。最後の邂逅（かいこう）に至っては、家の庭が汚いだと何だのと言いがかりをつけられた最悪のものだ。

挙げ句の果てには、こともあろうか沙耶を穢し泣かせたのだから、外面以前に内面が化け物になり果てていたのだろう。
殺して正解でしかない。
嘘偽りのない、今の僕の気持ちだ。
この手を誰かの血に染めたことに、何の後悔も感じていない。僕があの事故で失ったのは五感だけではない。つまりはそういうことなのだろう。沙耶がなんと言おうと、二度と元に戻ることはない。鈴見という男の命と同様に。
「なぁ沙耶。僕のこの異常はおそらく、医学的に治せる類のものじゃない。それが簡単にできるっていう君は、おそらく――人間じゃ、ないんだね？」
「……」
沙耶は複雑な表情で俯いた。
すべてが歪んで目に映る僕に、ただ一人まともな姿で見えた沙耶。
僕は彼女だけが特別なのだと思っていた。ただ一人、真実のままに僕の目に映る少女なのだと。
だが、そうじゃなかった。
僕にとって特別であることには変わりがない。でも、逆だったのだ。彼女もまた他の人々と同じように、本来の形からはかけ離れた、真実とは異なる歪んだ姿で僕のこの瞳に映っているのだ

ろう。そして歪んだ結果がこの――沙耶というだけの話だったのだ。
僕は立ち上がり、切り刻まれた鈴見の死骸に歩み寄った。
「昔読んだ漫画でさ……事故から生き返ったせいで世界が当たり前に見えなくなる男の話があった。今の僕みたいにね」
かつての隣人の残滓(ざんし)をまじまじと見やる。生きて動いている間は、あれだけ鼻が曲がりそうな体臭を放っていた化け物だが、血や臓腑からは良い匂いがした。
「その男の目には人間が石くれに、機械のロボットが美女に見えるんだ。だから男は、人とは似ても似つかないロボットに恋をしてしまうんだ」
肉片のひとつを拾い上げ、切っ先の欠けた包丁で果実のように皮を剝き取ってみる。
ああ、やっぱり。
これは――いつも僕と沙耶が食べてるものにそっくりだ。
「なぁ、これ。美味そうだし、食べちゃおうか？」
「郁紀……」
「あ、ごめん。今はそんな気分になれないよね。でも死んじゃえば肉は肉だし、捨てるのも勿体ないと思わないか？　また冷蔵庫に仕舞っておこうよ」
「あなたは……いいの？」
「いいよ」

僕は迷いなくそう答えた。

「あと隣の家には、家族が……奥さんと娘が一人、いるはずなんだ。旦那がいなくなったら騒ぐかもしれないし、通報される前に何とかしようと思うんだけど」

「そんな風で……あなたは、いいの？」

沙耶は再びそう訊いてきた。どこか恐れを抱いている風ですらあった。

彼女を納得させるには、まだ言葉が足りないようだ。

「——さっきの漫画の話だとね、人でないものを愛した男は、最後に自分が人間であることを辞めて、恋を成就させるんだ。ハッピーエンドだよ。そうだろう？」

「郁紀……」

「沙耶と一緒にいられるのなら、僕はもう何もいらない。何もかも、このままでいい」

僕は包丁と肉と放り捨てて、もういちど沙耶を抱き上げた。

「もう、言ってもいいよね？　沙耶、君のこと——愛してる」

「あなたには、後悔させたくないのに……なのに……」

沙耶が、両手で涙を拭う。だがその表情にはもう、さっきまでの怯えの色はない。

「……でも、嬉しい。——私って、身勝手だよね」

「身勝手でいいよ。お互い様だ」

微笑みを交わし、満ち足りた気分のまま、僕らは二人で部屋の片付けを始めた。

人間一人分の血肉となると、なかなかどうして相当な量だが、思えば決して初めてというわけではない。

知らなかったとはいえ、過去にも同じことをしている。なんとか片付けていく。むろん、沙耶は僕以上に慣れている。そうして手際よく働きながら、思い出したように彼女が言った。

「お隣の家族の話だけど」

「うん？」

「たぶん、このおじさんが殺してる。家に来て……こうなる前に」

「なんでそんな……あ、いや。……うん、そうか」

かつて自分が、はじめて変貌した世界に放り出された時のことを思い出した。

目覚めてみれば醜怪な肉の塊に囲まれ、見知った全てが目の奥が痛くなるほどに色鮮やかな腐泥に覆われていた。

僕は恐怖のあまり忘我し暴れ、緊急措置として拘束されるところまでいった。あの時、手元に武器があれば、僕はそれを躊躇なく使っただろう。

だから——そんなこともあるのだろう。

隣家の奥さんと娘には気の毒ではあるが、いずれにせよ好都合だ。ここの片付けが終わったら、彼女たちもありがたく回収しよう。

当分は食事に困らなくて済みそうだ。

だが溜めこむにしても、そんなに冷蔵庫に入るだろうか……。いや、そうか。隣の家の冷蔵庫も借りればいいんだ。

僕たちはそんなことを相談しながら、睦まじく作業を続けた。

第三章

匂坂邸　郁紀

「この写真……知ってる」

大変だった一日をようやく終えて、ベッドに就こうとしたところで、僕は奥涯邸からの収穫物を沙耶に見せた。

「これ、見覚えがあるよ。うん、たしかに沙耶の知ってる場所」

三枚の写真のうち、沙耶が関心を示したのは、裏に栃木県の住所が書き記された一枚だった。

「これは……家だよね。それと、木と……山？」

「そう。郁紀すごいね。写真も見られるようになった？」

「なんとかね」

知覚異常を発症した当初、僕はもっぱら距離感に頼って景色を把握していた。手前の家屋と彼方の山、山並みとその上に浮かぶ雲……それらを対比で判断するしかなかった。

だが最近では、山や空がどう見えて、人工の建築物とはどう違って見えるかなど、だんだんと単体だけでも元のマテリアルを判別できるようになってきた。以前なら、平面に描画された写真の類は、そもそも何が写っているのやら皆目検討もつかなかったのだが。

三枚の写真のいずれも似たような情景だった。市街地ではなく、木々に囲まれた森の中の一軒家が写っている。住宅というよりは――

「パパはね、別荘だって言ってた。人に会いたくないときに使うんだって」

「なるほどね」

確証はないが、よく見ると三枚の写真は、日付が古いにも拘わらずその誤差が数日内に集中している。沙耶も知らない残りの二軒は、もしかすると、別荘を購入するにあたっての比較検討対象だったのではないだろうか。

いずれにせよ、沙耶の見知っていた場所は一カ所のみだ。単純に、まずはそこから回ってみるしかない。

――栃木県S町。

携帯のアプリで地図を確認する。ここからだと自動車でおおよそ三時間ほどと出る。

「だったら、お父さんがここにいる可能性は？」

「何度か固定電話の方にもかけてみたけど……。たぶんいないと思う」
「でも、行方不明になって以降で、立ち寄った可能性はあるよね」
「どうかなぁ。郁紀と出逢わなかったら、そのうち行ってみてたかもしれないけど」
僕は考え込んだ。どうせ手詰まりなら、わずかな可能性でも賭けてみるしかない。それに、沙耶の反応はいまいちだが、教授の失踪が自発的なものなら、潜伏場所としての可能性は決して低くないように思えた。
「明日にでも行ってみようかな。ここ」
「え～？」
意外なことに、沙耶が不服そうな声で口を尖らせる。
「だってここ……遠いんでしょ？」
「行って調べて、帰ってきても、まぁ半日もあれば充分さ」
「そのあいだ、沙耶はお留守番なの？」
何を言い出すかと思えば……僕は少し呆れて笑いながら、沙耶の頭をなでた。
「少しは我慢してくれよ。なぁ、沙耶だって、お父さんのこと見つけたいんだろ？」
「……」
沙耶は複雑な面持ちで沈黙した。それから上目遣いに僕の顔を窺いながら、おずおずと切り出した。

「ねぇ、郁紀……。パパのことは、もういいよ」
「――え？」
拍子抜けした僕は、一瞬言葉を失った。
「いいって、でも……君のお父さんだろう？　心配じゃないのか？」
「いいの。私にはもう郁紀がいるし」
そう言って沙耶は、ぬくもりを求めるように僕の横にすり寄り、目を細める。
「パパっていっても、本物のお父さんっていうわけじゃないの。沙耶のこと教育してくれたし、ある意味では愛してくれてたのかもしれないけど、でも……。郁紀の方がずっと優しいし、あったかい」
その沙耶の気持ちは、たしかに嬉しかったが――同時に寂しい言葉でもあった。
「郁紀は嫌？　沙耶と二人きりじゃ」
「いや……でも、うん。そうだな。やっぱり奥涯教授には会ってみたい」
自分の心情を説明できる言葉を拾いあげ、沙耶に伝える。
「沙耶のことを、もっとよく知りたいから。だから、僕以外に沙耶のことを知っている人がいるなら、ぜひ会ってみたい」
「ふぅん、そうなんだ……」

沙耶はべつに怒った風もなく、ただ僕のそういう思考が彼女にとっては珍しいのか、小首を傾げて考え込んだ。
「それに……うん。やっぱり明日、この場所に行ってみよう」
奥涯教授の件とは別に、僕の中で、とある目論見が形を作ろうとしていた。
もしこの別荘で教授が見つかれば良し。見つからなければその時はその時だとして、この人里離れたロケーションには――もしかして使い道があるのではないか。
「うん」
「沙耶、寂しいかもしれないけど、ちょっと我慢して待っててくれ」
頷いてから、沙耶は問いかけるような眼差しで僕の目を覗き込んできた。
「やっぱり……郁紀にはさ、家族とか、友達とか、もっともっと仲間が大勢いたほうがいいのかな？」
「そりゃあ、その方が楽しいだろうね」
そう言ってから、僕は沙耶が拗ねやしないかと思い慌てて付け足した。
「でも勘違いしないでくれよ、たとえそういう人たちに囲まれて暮らしてたとしても、沙耶だけは僕にとって特別な一人なんだからね」
「うん。ウフフ、ありがと」
くすぐったそうな笑い声を上げて、沙耶は僕に頬ずりしてきた。

「沙耶も、郁紀が喜びそうなこと——郁紀のためだけに頑張るからね」

大学　耕司

その日、耕司の受講する講義はすべて午前に偏っていた。
最後の科目を終えて、昼飯がてら瑶と合流しようかと廊下を歩いていたところで、携帯電話の着信音が鳴り響く。
買って間もない新型の方を懐から取り出しかけたところで、くぐもった着信音に気付いて思わず舌打ちした。古い方の携帯だ。鞄に入れておいたのだった。
世間の流れに抗いここまで携帯のみで来たが、青海の買い換えろ攻勢に折れ、ついに耕司も最新のスマートフォンを購入したばかりだった。
彼女が勧めるまま聞いたこともないキャリアに乗り換え、古いメールアドレスは引き継げないというのでいっその事と完全新規を選択したはいいが、青海の失踪もあり買い換えを周知するタイミングを完全に逸してしまった。
知人友人から青海の情報を募っている手前もあるし、今はむやみに連絡先を変えるわけにはいかない。しばらくはこのままで二台持ちせざるを得ないだろう。こんなことなら鞄のほうに新型を入れておけばよかった。

携帯を引っ張り出し、着信者名を見たところで耕司は凍りつく。
郁紀だ。なぜ今になって？　どういうつもりで？
少なくとも、彼の方から電話を寄越すことなど、もうないと思っていた。いくらか用心しながら、耕司は通話ボタンを押下した。
「――はい？」
『やぁ耕司。今日はもう、講義はないよな？』
「……ああ」
確かに郁紀ならば、木曜の午後は耕司が暇を持て余していることを知っている。
『相談がある。駐車場に来てくれないか？』
「今すぐにか？」
『ああ、待ってる』
手短に用件を伝えただけで、通話は切れた。
どういう心境の変化だろうか――無雑作に携帯をジャケットに突っ込みながら、耕司は郁紀の真意を訝る。ここ一週間ばかりの間、郁紀は明らかに耕司や瑤との接触を避けていた。それだけに不気味だ。ようやく話をする気になった……というのなら、良い兆候として喜ばなければならないのだろうが。
そうは思っても耕司は、胸の内から一抹の不安を拭いきれなかった。

「——待たせたか？」
「いいや」
駐車場に停めていたアコードのフェンダーに腰をかけ、郁紀は待ち受けていた。
あの屋敷での夜は論外として、こうして明るい場所で顔をつきあわせて話すのはいつ以来だろうか。そのせいか、耕司は親友の表情に奇妙な違和感を覚えた。
どこがとは言えないが、何かが——決定的に違う。
「覚えてるかい。僕が人から頼まれて捜し物をしてるって話。言ってしまうと、捜してるのは今、行方不明になっている奥涯教授その人なんだけれど——」
「……」
「それがここにきて、色々と難しくなってきたんだ。僕一人じゃ無理かもな、って」
意外なことに——郁紀はここしばらくの、あのまるで何かに脅かされ追い立てられているかのような切迫した雰囲気から解放されていた。
それどころか、照れ隠しなのか、微笑めいたものさえ浮かべている。
「で、お前にも手伝ってほしいんだ。耕司」
——にも拘わらず、この郁紀の変化が、耕司にはまったく好ましく感じられない。
「いったい、どういう風の吹き回しだ？」

極力表情と感情を抑え、郁紀に問うた。
「だってお前も興味があるんだろう？　耕司」
郁紀がそう巻き返す。微笑めいた顔にも変化はない。その裏に何かがあるとしても、窺うことはできなかった。
「僕の後から、奥涯教授の家を色々と捜し回ってたじゃないか。僕とお前とでバラバラに捜すなんて二度手間だよ。どうせなら協力して、もっと効率的にやろう」
「……」
果たして気のせいなのだろうか。
微笑む郁紀の瞳の奥底に、絡みつくような悪意の色を見出してしまうのは。
「ともかく、足が必要なんだ。車を出してくれないか？」
「まぁ、構わんが……」
郁紀の車は例の事故で廃車になっている。他人に頼るのもわからなくはない。
耕司はアコードのロックを開け、運転席に座るとエンジンをスタートさせた。郁紀も助手席へと乗り込んでくる。
「で？　どこに行けばいいんだ？」
「栃木の北の方。那須高原のあたりだな」
「栃木だ？」

「住所はここにある。この建物を捜したい」
そう言って、郁紀は裏に所番地のメモ書きがある写真を耕司に手渡した。
冗談でも何でもなく、いきなり二百キロ弱のドライブを強要されていると知り、耕司は頭に来るのを通り越して呆れるしかなかった。
「今から出発すれば、夕方ごろには着くだろう？」
「……のんびり、道の駅で寄り道でもしなけりゃな」
ハンドルを指で叩きながら気持ちを鎮め、空いた片手で写真を取る。
青海が行方不明になっていることは、当然郁紀も知っている。その上で彼女のことには一切触れず、この話運び。一体、このデリカシーのなさはなんなのだろうか。
一連の事柄の、奇妙な関連性も気になる。奥涯雅彦。免職とまでは丹保涼子から聞いていたが、まさか行方不明だったとは。
「で、別荘か何かか？　これは」
「そうらしい。もしかすると、奥涯教授がいるかもしれない」
いずれにせよ、あの異様な家の主だ。対面にはまったく気乗りがしなかったが、そんな場所に郁紀を一人行かせるのは余計に心配だ。
耕司は深く溜息をつき、覚悟を決めた。
ここまで来れば乗りかかった船だ。この友人の奇行にも、とことん付き合ってやるしかない。

「東京に戻るのは夜中かもな」
「悪いな、世話をかけて」
「……いいさ」
それ以上の言葉をなんとか呑み込み、耕司はアコードを発進させる。
助手席で静かに座り前を向く郁紀の微笑が、気にかかって仕方がなかった。

大学　瑶

昼休みのカフェテリアで、瑶は一人テーブルに着き、冷めていく昼食をよそに、ただ周囲に見知った顔を探して視線をさまよわせ続けていた。
耕司と申し合わせていたわけではない。
何か別の用事があってカフェテリアに現れなかったとしても、べつだん何の不思議もない。以前にもそういうことはあったし、そんなときは青海や郁紀とだけで雑談に興じたものだ。
その青海も郁紀も、今はいない。
一人で食べる食事の味気なさ……というより、むしろ食欲さえ萎えさせるほどの不安感が、瑶の箸の手を止めていた。

こうして、ただ一人取り残されてみると、自分がどれだけ孤独というものに耐性がないのか、まざまざと思い知らされる。

それにしても……いったい何が起こっているのだろうか。

青海はどこに消えたのか。

本当に郁紀は関係がないのか。それとも、耕司や丹保医師が心配しているように、郁紀が何かそれらに関する鍵を握っているのだろうか？

先週の木曜日……瑶にとっては忘れようもない日である。郁紀の言葉に傷つけられ、独りでは吐き出しようもない心の痛みを持て余していた瑶を、たまたま通りかかった耕司が目にとめてくれた。瑶を心配し、話を聞いて慰めてくれた。それしきのことで水に流せることでもなかったが、あのときの耕司の気遣いで、たしかに瑶は癒された。

時刻としてはちょうどその頃、青海は郁紀の家に向かっていた……そして、それきり姿を消した。

昨日、耕司とともに訪れたT大病院ではじめて明かされた事実である。

だとしたら……。

——一体、どうして青海は郁紀の家へ行こうなどと急に思い至ったのか。

たとえばあの日、耕司が瑶と出会ったのが偶然じゃないとしたら？

瑶と郁紀の間に何があったのか、耕司も青海も知っていて、それで二人ともそれぞれに行動を起こしたのだとしたら？

青海は中庭での光景を見たのかもしれない。立ち聞きしたのかもしれない。有り得ない話ではない。

瑶は、己が内側から身を切り裂かれるような感覚に一人震えた。

あくまで仮定だ。だがもしそれが真相だとすれば——青海の身に何があったにせよ、それは瑶にも責任の一端があることになりはすまいか。

「……」

声にもならない痛ましい呻きをあげ、瑶は頭を抱えた。

セルフサービスで持ってきたトレイの上の料理は、すでに冷め切っている。どのみち喉を通りそうにもない。

心苛まれて、焦らされて、なのに何の行動も起こせないでいる。もとから耕司のような闊達さもなければ、青海のような勘の鋭さもない。こんなとき何をどう判断し、どういう行動に移ればいいのか、瑶にはまるで見当もつかなかった。

たとえばこれが青海なら、見当がつかないなりに動いてみるような、そうした前向きさを持てていたはずだ。そんな親友の行動力に、これまで瑶は頼りきりだった。彼女のいない今、どんなに自分が無力で役に立たない存在か、瑶は思い知らされていた。

ただ深みにはまっていくばかりの、堂々巡りの自己嫌悪。そのとき鳴り響いた携帯電話の着信音は、むしろ瑶にとっては救いの手だった。

メールの着信だ。タイトルはない。発信者は――

「青海……ちゃん⁉」

我知らずと大声を出してしまい、慌てて口を押さえる。

だがメールを開いて表示された文章は、ますます瑶を困惑させるものだった。

『あなたは匂坂郁紀について興味があるか？　ＹＥＳなら今から郁紀の家に来ること。一人だけで。誰にも内緒』

「……」

文体からして、青海の書いたものとは思えない。だが確かに発信者名は高畠青海となっている。

深呼吸をし、はやる気持ちで入力ミスをしないよう、慎重に瑶は画面を操作して返信メールを作成した。

『青海ちゃんなの？　今どこにいるの？』

送信――液晶画面が滞りなく完了を告げる。

さらに先方からの返信を待つ間にも、瑶には考えることがいくらでもあった。

青海ではない別の誰かが、何らかの経緯で彼女の携帯を手に入れ、このメールを打ったのだろうか？　だとしても、なぜ瑶宛てに？

はたと、思い当たった。

過去に青海と交わしたメールの数々。女友達ならではの気安さで、そうとう気恥ずかしい内容のものもあった。一人だけでどうしようもなく気持ちが昂ぶったとき、心密かに慕っていた郁紀への気持ちを書き綴（つづ）り、親友に相談したりもした。

青海は自分の携帯にパスワードを設定していただろうか？　そうだとしても、このメールを送ってきた人間には通用しなかったことになる。つまり、いま瑶にメールを送ってきた人物は、過去に青海と瑶が交わしたメールの履歴をすべて読むことが可能なのだ。

〝匂坂郁紀について興味があるか？〟

もう一度、瑶は奇怪なメールの文面を読み直した。これは、郁紀に興味を抱きそうな人物として、瑶が指名されたということか。

唐突にまた着信音が鳴る。

瑶は一瞬だけ身を竦ませてから画面を見た。青海名義の着信。タイトルはなし。

『すべて会ったときに話す。一人だけで来ること。誰にも内緒』

青海ではない。悪戯にしたって度が過ぎている。彼女ならば不要に瑶を怖がらせたりはしない。こんなに回りくどいこともしない。

不安のあまり泣きそうになった。瑶の精神は、こういう説明のつかない不条理に立ち向かえるようにはできていない。

青海の携帯を手に入れて、しかも郁紀の秘密を知っていると嘯く人物。——いったいどこの誰なのだろうか？

自分一人ではどうにもできない。一も二もなく耕司か誰かに相談したい。……事実、瑶は耕司の携帯を呼び出しかけて、すんでのところで思いとどまった。

今こうしている間にも、このメールの送信者は間近に潜み、瑶のことを監視しているのかもしれない。そんな薄ら寒い思いに囚われて、瑶はカフェテリアの中を見渡した。

〝一人だけで来ること。誰にも内緒〟

無機質な文字列が、まるで突きつけられたナイフの切っ先のように瑶を脅かす。

だが——瑶はスマートフォンを握りしめて、胸の動悸を抑え込んだ。

さっきまで、食事も喉を通らないほどに自分を責めていたのは、こんな自分の臆病さが嫌だったからではないのか。

いま自分に何ができるのか知りたいと、座して待つ以上のことがしたいと、そう望んでいたのは瑶自身ではなかったか？

携帯を握る手が震えているのが、自分でも分かった。

どんなにか楽だろうか……このまま自分の臆病さを許して、青海も郁紀も、何もかも自分の窺い知らないことと割り切って、逃げてしまうことができたなら。

それは嘘偽りのない瑶の本心だった。人としての尊厳や義務をすべて擲って（なげう）でも、瑶はこの得体の知れない状況下から逃れたかった。

だが——一方では、瑶自身にもよく解っていた。自分という人間には、それさえも叶わないのだ。

そうやって逃げた先で、何もかもが手遅れになった後で、どれだけの自己嫌悪が自分を苛むことになるか……自分がそういう後ろ向きな後悔にどれだけ囚われる性格なのか、瑶は弁えていた。

結局、ひとりぼっちの瑶はあまりにも臆病すぎた。彼女には逃げようという意志も、そうした決断をくだす勇気さえも、持つことができなかったのだから。

匂坂邸　瑶

昼下がりの住宅街は、どこか薄ら寒いような静寂をたたえていた。

見えないところに回収され損なった生ゴミでも放置されているのか、そこはかとなく嫌な臭いが漂っている気がする。

なんのことはない、こんな日常の景色さえ、今の瑶にはどこか不吉なものに見えてしまうのだろう。まるで近隣の住人がすべて死に絶えてしまった、白日の下のゴーストタウンに立っているかのように……。

そんな弱気の虫を追い払い、瑶は匂坂邸の門前で呼び鈴を押した。

そういえば今日は学内に郁紀を見なかった。もしかして、家にいるのだろうか？

内容もだが、呼び出された場所が場所だ。あの気味の悪いメールが、郁紀によるものである可能性は当然考えられた。なぜか、違うという確信はあったが——

呼び鈴に返答はない。

一週間前の夕刻に、やはり沈黙したままの呼び鈴を前にして、同じように青海が途方に暮れていたことを、もちろん瑶は知る由もない。

だが今回、瑶は青海のときのように待たされ続けることはなかった。

彼女の不意を衝くようにして、ポケットの中の携帯がメールの着信を告げた。

『そのまま入ってこい。鍵は開いている』

「……！」

戦慄（せんりつ）して瑶は周囲を見回した。やはり——見られている。

視界の隅で、匂坂邸の二階の窓……固く閉ざされたカーテンの布地が、微かに揺れたような気がした。

監視者は——メールの主は——この家の中に、いる。
それ以外の窓は、一階も二階も含め、カーテンどころか雨戸まで閉め切られて、中を窺うことはできない。あの家の中で何が起こっても、外にいる人間はきっと誰も気付かないだろう。
今度こそ瑶は、今すぐに後ろも振り返らずに走って逃げ出したいという強烈な願望にとらわれた。
だがその恐怖と同じぐらい……いや、それに数倍する恐ろしさを、いま現在、彼女を見張り続ける視線に対して感じていた。まるで、蛇に睨まれた蛙だ。
もう、逃げられっこない。
瑶は門の前に立ちすくんだまま、めそめそと泣き出した。そんな彼女の手の中で、また携帯電話が着信音を鳴らす。急き立てるように、脅して催促するように。
内容は、開かずとも想像できた。
ふらふらと、まるで自分のものとは思えないほどおぼつかない足取りで、瑶は匂坂邸の門をくぐった。

玄関に入ると、今度こそ疑いようのない悪臭が瑶の嗅覚を打ちのめす。
日中にもかかわらず屋内は薄暗かった。
玄関に郁紀の靴はない。彼は留守のようだ。だが——

脇に設置されたシューズボックスの、わずかに開いた扉の隙間から覗いている一足の靴が、瑶の目にとまった。見覚えのあるその靴を思わず手に取り、これが何かの間違いではないかと、事実を受け入れずに済む思考の逃げ道を探す。

青海が履いていたものと同じ靴だった。

だからといって青海がこの家にいるとは限らない。同じ店で同じ靴を買った別人が脱いだのかもしれない。そう、青海がここにいるわけが――だが、であれば、どこにいるというのか？

メールの相手が持っているのはまず間違いなく青海の携帯なのだから、道理としてここに青海がいることとは矛盾しない。

だが、行方不明の人間がここにいていいはずがない――

瑶は固く手に握ったままの携帯で、おそらく家族よりも頻繁に連絡を交わしてきた番号を呼び出した。

電波が最寄りの中継所へと奔る一瞬の間。続いて……。

鳴った。

聞き覚えのある着信メロディ。間違いなく青海の携帯電話だ。

二階だった。さっきカーテンが動いた部屋。やはりまだ、あそこにいる。

青海の携帯の持ち主が、瑶の意図を理解するまでの、ごくわずかな間だけその着信音は鳴り響き……そして不意に止まる。

今はじめて、瑶は姿なき誘導者の存在を肌身に感じた。
「……誰ですか？」
意を決して呼びかける。だが、返事はなかった。
生唾を呑み込んで、瑶は玄関から廊下に上がり、階段に足をかけた。
青海かもしれない。郁紀かもしれない。二人が笑いあって、瑶をからかって楽しんでいる。もしかしたら耕司もその場にいるかもしれない。何のサプライズだろう。
なんと心慰められる想像だろうか。あり得るかどうかの可能性を棚に上げてでも、瑶はその想像を信じたかった。信じずには一歩も進めなかった。
「青海ちゃん……だよね？　匂坂くんだよね？」
一歩ずつ階段を上がりながら、瑶は涙声で呼びかけた。
すでに彼女はしゃくり上げながら泣いていた。無様に泣き崩れた顔を見られて、きっと笑われるんだろう。からかわれるんだろう。だったらそれでいい。それがいい。この上なく幸せだ。だから一刻も早くこの仕打ちを終わらせてほしい。
階段を上り切ろうにも、膝ががくがくと震えて満足に動かず、鈍重な足運びはのしかかる静寂の時間を永遠とも思える長さに引き延ばしていた。
その一刻一秒に瑶は泣いて許しを請うた。

そうやって、どれほどの時間を耐え抜いただろうか。気がつけば瑶は、二階の廊下に立っていた。
沈黙が瑶を出迎える。薄闇の向こうに、禍々しく悪意に満ちた静寂だけを漂わせて。
「青海ちゃん……青海ちゃぁん……」
弱々しく訴えかけながら、瑶は摺り足で前に進む。
「出てきてよぉ、お願いだよぉ……こんなの、もう……嫌だよぉ……」
目の前に半開きのドアがあった。たぶんこの中から、外の瑶を見ていたはずだ。
自分がドアノブに手をかけ、ゆっくりと引き開けるのを、瑶は心の奥のどうしようもない部分に追いやられた思考で、なすすべもなく意識していた。
部屋には、誰も、いない。
ただ息の詰まるような悪臭と湿った空気だけが、ねっとりと瑶を包み込む。
「もう……やめて……」
限界だった。もう一歩たりともこの場から動けなかった。
そうして瑶の意気が萎え、折れる瞬間を、相手は待ちかまえていたのかもしれない。
背後から瑶の両腕に、一時に絡みつく感触があった。自由を奪われるのと同時に、柔らかくも強靭（きょうじん）な、それでいてぬめりけと弾力のある……指めいたものが瑶のブラウスを引き裂き、強引に中へと進入してくる。

瑶は絶叫した。

まさかこんな声を出せるだけの力が自分の中に残っているとは思いもよらないまま、縛（いまし）めを振りほどこうと遮二無二、四肢を振り回す。本能の奥底から湧き上がる力が、ここが瀬戸際とばかりに荒々しく瑶の身体を駆り立てた。

だが、後ろから瑶を羽交い締めにする力は強く、頑として小揺るぎもしない。

代わりに、冷たくヌラヌラと湿ったものがブラジャーの隙間から押し入れられ、両方の乳房を包み込むに至り、瑶の悲鳴はさらに一オクターブも跳ね上がった。

瑶の両胸を、侵入者は容赦なく揉み上げ、搾り、おぞましい刺激に竦み上がって凝った乳首に吸着して翻弄（ほんろう）する。自分の肌を舐め上げられるズルズルと湿った音が、胸の谷間から瑶の耳に届く。

乳房に貪りついてくる感触のおぞましさと嫌悪感、もはや理解の範疇（はんちゅう）には収まり得ないその恐怖に、瑶の精神は崩壊の一歩手前まで追いやられた。すぐにも悲鳴で喉が裏返って声が出なくなり、呼吸すらもできなくなって、瑶は窒息しかけたままで髪を振り乱して抵抗する。

すると唐突に、乳房とブラジャーの隙間に滑り込んでいた何かが引き抜かれ、同時に瑶の両腕が縛めから解放された。

だが、すでに残っていた力を今の抵抗で使い果たしてしまっている。瑶はそのまま床に倒れ込んだ。両足の力も萎え、立つこともままならない。まるで身体が、糸の切れたマリオネットにな

ってしまったかのようだ。

瑶を背後から襲ったものは――今この時も、部屋の片隅の薄暗がりに潜んでいる。その気配をひしひしと感じながら、だが瑶は振り向くことさえできなかった。確認するまでもなく『それ』を見たが最後、自分が自分ではなくなる……正気を保てなくなるであろうことを充分に理解していた。

不意に、この場にあってはならないほど軽やかな電子音とともに、瑶の手の中で光が瞬く。

冷たく輝くディスプレイが、新たなメールの着信を通知してくる。瑶は、画面に現れる文字から目をそらすことができなかった。

『美人だね。柔らかくて大きくて、とっても素敵なおっぱいだね。あなたの身体は、さぞかし簡単に雄を誘えるんだろうね』

こいつだ。こいつだったのだ。青海の携帯からメールをよこしてきたのは。いま瑶の胸を触っていったものは。ああ……。

くぐもった呻き声しか出せず、身動きもできないまま、瑶は床に小さく丸まって身体をたたみ、幼児のように啜り泣いた。

「助けて……お願ぃ……。神様……」

闇の中に蠢くモノが、ブクブクと泡立つような音をたてた。

瑶には、なぜが理解できた。――それが、嘲（あざけ）り笑うそいつの声だと。

『そうやって、郁紀を誘おうとしたんだ。私の郁紀を奪おうとしたね。泥棒猫』

ひやりと、再び足首を摑まれる感触があった。悪寒はふくらはぎから腿を這い登り、ゆっくりと瑶の下肢を覆い尽くしていく。

獣として生まれ持った本能の奥底で、瑶はまざまざと悟っていた。

自分は今から、この生き物に犯されるのだと。死ぬよりなお残酷な運命を、拒むこともできず……。

「やめて……」

声にならないほど小さな声で、瑶は懇願していた。

人ならぬ『それ』の慈悲に縋ることの虚しさを、絶望的なほどに理解しながらも。

「お願い……許して……」

ブクブクと——またそいつは、嗤った。そいつは瑶の悲しみを、絶望を、心の底から喜んでいた。

のしかかってくる異形の体重を振り払うだけの力など、すでに瑶には残っていない。ただ、冷たく粘ついた感触にヌラヌラとくすぐられるたび、ぞわりと鳥肌の立つ肌が悪寒に震え、痙攣を返す——それが瑶の肉体にできる精一杯の反応だった。

目の中が暗くなる。

意識が泥沼のような暗い淵に、深い深い暗闇の奥底へと沈み込んでいく。ゆっくりと泡のように、理性や思い出や、綺麗なものだけが浮かんでは身体から離れ、宙に消えていく。
いいように左右の乳房を弄ばれ、乳首を吸われ、内股の間に割り込んできた重みに両脚を拡げられていくのを、どこか思考の遠いところで感じている。
（──あなたは、殺したりしない──）
瑶の、もはや人並みに稼働することのなくなった精神が、そのとき人の耳を超えた領域から囁きかける声を聞いた。
優しさと邪悪さを兼ね備える少女の声。嬉々として蝶の羽をむしるような、残酷なほどに無邪気な声。
（──かわりに、私たちの幸せを分けてあげる。喜びなさい、ヨウ。死ぬまで愛してあげるから──）
甘い囁きとは裏腹に抗いようのない、断固とした塊が、瑶の中心に押し当てられる。
それはいまだ瑶の経験したことのない、鋭く残酷な激痛だった。
だが今の瑶に、それを痛みとして認識できるだけの『彼女自身』が、まったく残されていない。
そういえば……。

深々と秘所を抉り、彼女の胎内でずるずると蠕動を続けているものを、ぼんやりと見下ろしながら、瑶はどうでもいいことのように、だが小さく痛む感慨を懐いていた。

……まだ私……好きな人にキスしてもらったことも、なかったっけ……。

別荘　耕司

東北自動車道で宇都宮を過ぎたあたりから、空に粉雪が舞いはじめた。

「下が雪道になってなきゃいいがな……」

助手席の郁紀は、白くけぶった車窓の彼方に視線を飛ばしたきり沈黙している。心ここにあらず、といった様子のまま、すでに小一時間ほども経つ。

相手が気付いていないのをいいことに、耕司は横目ながらも改めて郁紀を観察した。

今の郁紀に対して自分の中で激しく鳴り響く、アラートにも似た直感の正体が、いまだに耕司には分からない。

突然、郁紀は耕司を避けなくなった。視線を逸らさずに話すようになった。それでいて今の郁紀は、かつて耕司たちを遠ざけようとしていた頃の彼よりも、遥かに遠く離れた所へ行ってしまった気がしてならない。

助手席に座っている郁紀は、たしかにリラックスしている。だが、じっと虚空(こくう)の一点に据えられたまま動かない視線は、他人の思惑などいっさい関係がない次元で、すでに決定づけられた、たったひとつの結論だけを見据えているような……。

そう、今の郁紀は『完結』している。

上辺だけは当たり障りないが、これは態度が軟化したのではなく、より一層強固に閉じ、他を切り捨てただけなのではないか――

「――青海だけどな」

探りを入れるように、耕司は何の前振りもなく切り出した。

「いなくなって今日で一週間になる。まだ何の連絡もない」

「そう」

彼方を見据えたまま、そっけなく郁紀は頷いた。

「心配だね。どうしたんだろう」

「……」

もし耕司が、目指す山荘の近辺の天候や山道の具合などについて口にしたとしても、郁紀はこれとまったく同じ口調で、同じ返事をしただろう。そう思わせるぐらいに彼の語調は実がなく、空虚だった。

「もう一度訊くが、お前、何か思い当たる節はないか?」

「いや、ぜんぜん」
これもまた、青海が失踪した直後に耕司が問い質したときと、まったく同じ返答だ。
「……まるで気にかけてないみたいだな」
「そんなこと、ないさ」
ここにきて郁紀は今更のように、さも心外だと言いたげな顔を向けてきた。
「彼女、僕の家に来る途中でいなくなったんだろう？　もちろん僕だって心配だよ」
「……」
やり場のない苛立ちが、唐突に耕司の内側から湧き上がる。
できることなら今すぐ郁紀を殴り飛ばして、いったい頭の中で何を考えているのか、洗いざらい白状させてやりたかった。青海は耕司の恋人なのだ。気が気でないほどに心配なのだ。それをこんなにも薄情に受け流されて黙っていられるわけがない。赤の他人ならまだしも、郁紀は耕司の親友だった男だ。郁紀は元々、感情を表に出す性質ではない。故に誤解されることは多かったが、付き合ってみれば割に子どもっぽいところもある、だが細やかで優しい男だった。
そう。こんなに酷薄な男ではなかった。断じて。
何が彼をここまで豹変させたのか、たとえ力ずくで尋問をしようとも答えは出てこないだろう。

以前のように、ただ殻に閉じこもっていただけの頃ならば、あるいは問い詰める術もあったのかもしれない。だが、こうして賢しく韜晦してしまうようになった今は、それも叶うまい。郁紀は相手が誰であろうと欺き続け、決して本心を見せないだろう。

ならば手がかりは、自らこの手で掴むしかない。

「青海はな、津久葉のことでお前に話があったんだ」

「――ふぅん」

津久葉瑶の名前を聞いた郁紀は、気まずそうに苦笑して見せた。だが耕司はその笑みの裏側に、同情よりもなお冷たい、見下すような憐憫（れんびん）の色を見て取った。

「津久葉さんか……参ったね。まぁ、あんなことがあった後だし、声もかけづらくてさ」

有り得ない。

瑶に対する感情がこんなにも冷笑的であるならば、告白された時点でとっくに拒絶している。だが郁紀はそれをしなかった。少なくとも、事故に遭う前の郁紀は。

耕司はあらためて痛感した。いま目の前にいる男は、匂坂郁紀としての記憶だけを持ち越した、まったく別の人格なのかもしれない、と。

西那須野塩原インターチェンジを降りる頃には、気がかりだった雪も止んでいた。だが既にこの近辺では降雪も珍しくない時期なのか、間近に見る山並みは梢の下に白く凍った雪化粧を残し

ている。
国道を逸れて細く曲がりくねった山道に分け入っていく頃には、タイヤチェーンを怠ったことを後悔せずにはいられない状況になってきた。
それでも耕司は危なっかしいハンドリングでアコードを駆りながら、地形の高低差のせいか雪の影響か、精度が低くあやふやなＧＰＳの誘導を頼りに進み続けた。
「本当に、こんな場所に別荘なんてあるのか？」
「人目につかない所だからこそ、奥涯教授は気に入ったはずなんだ」
「……」
聞けば聞くほどに、耕司の中で奥涯という男の人物像に負の要素が増していく。

半ば森に呑み込まれかかっていたその私道を見つけたのは、郁紀の方だった。
ほとんど獣道の有様だ。あちこちに雪の重さに負けないほど育った雑草が生い茂っており、おかげでただでさえ薄く消えそうな轍(わだち)が雪に埋もれることを防いでいる。
「これ……本当に道か？」
アコードを停車させ、耕司は窓から顔を出して暗い森の奥を見透かそうとする。視界は梢の重なりに阻まれて、荒れた私道がどこに続いているのかも判然としない。
「写真だと、どう見える」

郁紀に促され、写真の情景と、森の彼方にそびえる山の稜線とを見比べた。

「……なるほどな。アングルは似てる。だとすると――」

――この先か。

「行ってみよう」

一見すると平淡ながら、耕司の反論を許さない熱量のある口調で郁紀が言った。

アコードのサスペンションが無事に乗り越えられる道かどうか、はなはだ不安ではあったが、ここまで来て引き返せるでもない。耕司はギアを二速にホールドし、凍った雪を踏みつぶしながら私道へと分け入らせた。

高地での日暮れは早い。車がのろのろと森の中を進む間にも、梢の隙間から垣間見える空はどんどんと明るさを失っていく。

自動車の排気音と、雪や下生えがタイヤに踏みつぶされていく軋みの他には、豊富なはずの生き物の気配すらまばらな静寂の森だった。郁紀もまた黙したまま、じっとフロントガラスの彼方を睨んでいる。

不吉なまでの静けさの中で、耕司はかつて、あの奥涯邸の前に立ったときと同じ、背骨の芯が、薄ら寒くなってくるような違和感に――原始の本能が、異界へと踏み込もうとする足を止めようとする叫びに――囚われていた。

やがて、暮れなずむ空を矩形に切り取るその影は、唐突に森の中に現れた。

「……」

車を止めて、耕司は改めて手元の写真と目の前の建築物とを見比べる。たしかに、間違いない。隣の郁紀に声をかけようとすると、すでに親友は無言のまま助手席のドアから降りるところだった。

「おい……」

制止は無駄だと悟り、耕司はかぶりを振るとアコードのダッシュボードを開けた。中からフラッシュライトを取り出すと、自らも車から降りる。靴を隔て雪を踏みしめる感触がもどかしく足元に拡がるのを感じながら、郁紀を追い前庭へ向かう。

実際、写真が撮影されたのは、相当に昔だったのだろう。比べて現在の山荘は風雪に傷み、見るからに廃屋然としていた。こんな山中で、手入れがなければ無理もない。

玄関は施錠されていたが、郁紀は何の躊躇もなくそれを蹴り破った。いまさら何をか言わんやといった気分で、耕司も黙ってそれを見守る。

屋内は窓という窓が分厚いカーテンに閉ざされており、ことのほか暗い。郁紀は自前で用意したライトを点灯し、ずかずかと上がり込んで家捜しを始めた。耕司としてはあまり気が進まなか

ったが、ほぼ廃屋である分、罪悪感という一点でのみ、奥涯の本宅よりはましだった。遠慮するのはやめて、郁紀とは別の部屋から物色を始める。

だが間もなく耕司は、探索行為それ自体がほとんど無意味であることを悟った。文字通り、何もないのだ。家具調度品は必要最低限——いや、部屋によってはそれすらなく、完全にがらんどうの部屋もある。設置された家具類も、その過半数が運び込まれてからまともに使用された形跡のない新品ばかりだった。それらが未使用のまま、ただ虫と黴と湿気に浸蝕され続けている。

本宅の汚れ具合とは、また別の意味で不気味だった。人が住まないモデルルームを放置して、寂れるがままに任せた——そんな印象がある。

辛うじて生活の痕跡らしきものがあったのは、トイレやバスルーム、台所、ベッドがひとつ置かれたきりの寝室くらいで、食って寝る以外の活動を何一つしなければそうなるかもしれないといった極小範囲のみ。

耕司は分厚い遮光カーテンを捲って外を見た。暮色はますます濃くなり、山荘の周囲は闇の中に沈みつつあった。

もし庭を調べるのであれば、完全に暗くなる前の方が賢明だろう。

さしたる収穫も期待できない屋内の捜索は打ち切って、玄関から外に出た。

あらかた光を失った空の下では、地を覆う残雪の、骨のように冷たい白さの方が、むしろ燐光(りんこう)を放っているかに見える。
その輝きは幻想的でありながら、今の耕司には現世と隔たった感覚をことさらに意識させられるようで不快だった。
玄関ポーチの横に、半地下にめり込む形で粗末なドアがあった。むろん施錠されていたが、いまさら遠慮したところで意味はない。玄関での郁紀の入室作法に倣い、思い切って蹴りつけると、拍子抜けするような脆(もろ)さで扉は内側に開いた。打ち放しのコンクリートの階段が闇の底へと下っていく。
地下室があるらしい。
「……」
こういう胡乱(うろん)な場所は、できることなら自分ではなく郁紀に捜してもらいたいところだったが、そうも言ってはいられない。耕司はライトの明かりを頼りに、冷たい闇の中へと踏み下りていった。
階下へと立ってみれば何のことはない、そこは小さな貯蔵庫とボイラー室だった。寒暖の激しい山奥に孤立した一軒家であれば、当然の設備だろう。
申し訳程度に棚に積まれた保存食は賞味期限をとうに過ぎ、ボイラーも久しく火の入った形跡がない。ここまではどう見ても、この別荘の方が東京の本宅以上に人の出入りが絶えて久しい。

少なくとも、ここに奥涯氏がいるかもしれないと言っていた郁紀の情報は、まったくの誤りか、それとも……。

途方に暮れたまま地上に戻る。そのまま、外壁に沿って周囲を一巡してみようと何の気なしに歩き出したところで、耕司は裏庭の存在に気が付いた。

その荒れようは前庭の比ではなく、もはや用途を見失った森の空閑地（くうかんち）という有様だった。おそらく、まだ別荘が利用されていた時分から、すでに放置されたスペースだったのだろう。

かつては薪割り小屋か何かだったらしい丸太小屋の残骸は、倒壊してからどれほど経つのか、朽ち果てて茸（きのこ）の培地になり果てている。その脇で、まだ形を留めている石積みの円筒があった。

井戸だ。

滑車も釣瓶縄（つるべなわ）も当然ない。おそるおそる近寄り、覗き込んでみると、水はすでに枯れていた。深さは十メートルとないだろうが、泥がどれだけ堆積しているかにもよる。

結局、屋外にも屋内と同様、何らかの手がかりになりそうなものは何もなかった。井戸の縁に寄りかかり、耕司はしばし思案した。奥涯という人物は何を思ってこんな辺鄙な山奥に別荘を購入し、訪れていたのだろうか。

あの室内の様子では、複数の人間が逗留（とうりゅう）していたとはとても思えない。

〝人目につかない所だからこそ――〟

郁紀が口にした言葉が脳裏に蘇（よみがえ）る。だとしたら、その用途は？　たとえば隠れて過ごすのが目的なのではなく、人目に晒したくない何らかの物を隠しておくためなら？　そう考えると、簡便な寝泊まり以上の生活の痕跡がないことにも説明はつく。

はたと、耕司は昨日会ったT大病院の女医を思い出した。

——丹保涼子。彼女なら何か知っているかもしれない。

上着からスマートフォンを取り出し、登録したばかりの番号を呼び出す。電波状況は——危ういところだが、通じそうだ。

期待はしかし、すぐさま落胆に変わった。番号は繋がらず、通話は定型メッセージとともに留守番電話サービスに接続される。向こうからの折り返しを待つなり、後でかけ直すなりすれば充分かと思ったが、考えてみれば、郁紀が側にいる時に彼女と連絡を取るのは問題だった。耕司と瑶が主治医のところまで押しかけていったと知れば、郁紀はまた機嫌を損ねるに違いない。

今のうちに、知らせられるだけの情報は伝えておいたほうがよさそうだ。

「どうも、戸尾耕司です。昨日はありがとうございました——」

なるべく要点だけを簡潔に、耕司は現状をメッセージに記録した。郁紀に奥涯教授の別荘だという場所まで連れてこられたこと。現在地を説明し、ここが本当に奥涯という人物の所有物件なのか確かめたい旨などをひとしきりまとめる。

「……東京に戻ったら、またこちらから連絡します。では」

通話を切り、耕司は昨日の会見のことを思い返す。丹保医師は言葉の通り、調査を進めてくれるのだろうか。彼女が最後まで頑として口を割らなかった奥涯教授についての秘密がいまだに気にかかる。果たして彼女を信用していいものかどうか、帰り道に瑶とも話し合ったが、結論は出ずじまいだった。

そうだ、瑶は今どうしているだろうか。今日はまだ顔も合わせていない。行き先も告げずにこんなところにまで来てしまったが、青海のことがあって間もないだけに、心配をかけてしまっているかもしれない。

耕司は軽い気持ちで瑶の番号を呼び出し……そして、いつもの彼女らしからぬ長い呼び出し音に少しだけ戸惑った。普段、この時間の瑶はフリーで、連絡がとれないことはあまりない。

だが、出ないものは仕方がない。諦めて切ろうとしたその直前、ふいにプツリと音がして回線が繋がった。

最初に耕司の耳に届いたのは、奇妙なノイズだった。電子的なものではない。もっと生々しく湿った、生物的な――そう、たとえば動物が呻くような、啜り泣くような、声にならない肉声にも似た――

違う。

これは泣き声だ。本物の。誰かが電話口の向こうで泣いている。苦しみに悶えて呻きながら、啜り泣いている。

「つ、津久葉？　津久葉か⁉」
『……だ、れ……？』
返答があった。津久葉瑶の声――だろうか？　呻吟に掠れ、潰れ果て、いつもの涼やかな声の主と同一人物だと確信が持てない。
いずれにせよ、ただごとではない。耕司は、周囲を染めつつある闇が、ゆっくりと色を濃くしていくような不安に駆られた。
「俺だ、津久葉！　津久葉なのか？　どうしたんだ⁉　大丈夫なのか⁉」
痛ましげな呼吸音と弱々しい呻きがしばらく続き、その後からようやく思い出したように絞り出された辛苦の呟きが、電話の向こうから漏れ出してきた。
『……わた、し……怪物に……襲われて……そしたら……身体が、ね……何か、ヘン……なの……』
「何があった？　怪物ってなんのことだ⁉　おい津久葉、大丈夫か！」
錯乱しているのか、彼女の言葉はまるで要領を得ない。だがその苦しげな様子から、瑶がとてつもない苦しみに苛まれていることは見てとれる。
『どんどん……ねぇ。どんどん……腐って、いくの……。肌が、崩れて……さっき……耳が、取れ、ちゃった……』
理解不能だった。

遙か遠く東京の空の下で、瑶の身に今、いったい何が起こっているのだろうか。
言い知れぬ、形にならない、名状しがたい絶望が耕司を呑み込んでいく。
『……助けて……戸尾、くん……こんなの……こんな形の、指。ちがうの。ゆゆ、び。こんなの……私の、手じゃ……ない……』
「津久葉！　警察を呼べ！　誰でもいい、今すぐに助けを呼ぶんだ！」
『……嫌……こんな、の……人に、姿……。見せ……られない……』
言葉の途中で瑶が咳き込む。ただの咳ではない。ゴボゴボと激しく咽(む)せ返り、気道に詰まった何かを吐きだしている。
「津久葉‼」
そう叫ぶ耕司の声は悲鳴に近かった。受話器の向こうで今、まさに瑶が直面している状況への想像を絶した恐怖に、耕司の理性もまた蝕(むしば)まれつつあった。
瞬間。その隙を狙っていたかのようにいきなり右腕を殴打され、耕司が手にしていたスマートフォンが吹き飛んだ。
「な――ぐぅッ」
罵声を浴びせようとした耕司の顎(あご)に、予期せぬ襲撃者である――いつの間にか側面に忍び寄られていたのだ――郁紀の右手が摑みかかる。それも、耕司より小柄な彼の体格からは予期できない、強さと激しさをもって。

井戸に寄りかかる形で背を向けていたのも災いした。井戸の縁を支点にして仰け反る形に体勢を崩された耕司は、姿勢を制御するにも自重を支える当てがなく、闇雲に手足を振り回す程度のことしかできない。

そうこうしている内に、すぐにバランスが崩れた。

ぞっとするような浮遊感と、暗転する視界。井戸の中に落とされた——そう理解する前に、猛烈な衝撃が耕司の背中を叩く。

凍てつくような冷気。さらに口の中に流れ込んでくる汚水。溺れかかった耕司は遮二無二両腕を振り回し、井戸の側壁に指がかかったところで、ようやく上下の感覚を取り戻して姿勢を立て直した。

泥の中で四つん這いになったまま、飲みかかった泥水を何度も咽せて吐き出す。この泥のおかげで落下の衝撃から守られたことを思えば、井戸の底の有様は耕司にとって僥倖(ぎょうこう)だったのだが、今の彼にそんなことを感謝するだけの余裕などあるわけもなかった。

「ふ、郁紀——」

丸く切り取られた空を見上げる。怒鳴ろうにも、掠れた呻き声しか出てこない。それが狭い井戸の底で反響し、なおいっそう意味不明な声に変換される。

かたや、井戸の外で甲高く笑い転げる郁紀の声は、耕司の耳にも明瞭(めいりょう)に届いた。

「通話中に邪魔して悪かったね。——ほら、返すよ」

幾度かガツガツと音がした後、嘲り声とともに、郁紀が井戸の中に耕司の携帯を投げよこす。あわや顔に当たりかかったところで耕司は受け止めたが、掴み取ったそれは井戸の縁石に叩きつけられ液晶が損壊されており、すでに何の用も成さなくなっていた。

「何のつもりだ、一体――」

冗談事では済まされない。いま耕司が何の怪我もしていないのは奇跡に等しかった。打ち所が悪ければ命を落としていただろう。

いや、打ち所がどうあろうと、この状況は――

手がかりを探して、耕司は井戸の内壁を手で探った。だが泥にぬめる石壁には指をかけられる場所などひとつもない。独力でここから出る術がないのは、明白だった。

「落ちた拍子に死んでれば、まだ苦しまずに済んだだろうに。耕司、君って本当に運がないんだね」

「お前、おい……まさか」

本気なのか？　問いかけようとして、耕司はその質問の愚かさに思い至る。

今日になっての郁紀の態度。どこか信用のおけない形ばかりの笑み。あの微笑みは耕司に向けたものでなく、親友の死相を思い描いての――すべてに合点がいく。

「……どうしてだ」

理屈は思考の中で繋がっても、それでも耕司は納得できなかった。

なぜ郁紀に殺されなきゃならない？　親友だったはずの男に？　たしかに彼は余計な詮索を望んでいなかった。だがそれは、相手の命を奪う理由になるのか？
「べつだん、今すぐ殺す必要なんてなかったんだけどね。もしかしたら、お前は僕の邪魔をするようになる奴かもしれないし。せっかく人目につかない所まで出かけるんなら、ついでに……と、思ってさ」
「ついでに、って、お前……そんな理由で……!?」
「お前、死ぬのに理由が欲しいのか？」
冷ややかに郁紀が混ぜかえす。耕司の言葉に、呆れた様子ですらあった。
「何様のつもりだ？　耕司。人は何の理由もなくたって死ぬんだよ。僕の両親がそうだったし、僕だってそうなりかけた」
「む――無茶苦茶だ！」
「そんなに理由が欲しいなら、一人でじっくり考えなよ。そこでなら、時間はたっぷりあるだろうから」
井戸を覗き込んでいた郁紀の顔が――消えた。闇の中の耕司と外界とを結ぶ、ただひとつの接点が。
「郁紀ッ！　おい！　郁紀ッ!!」

声の限りに耕司は叫んだ。郁紀が立ち去ってしまえば、もはや助かる望みなどないのは火を見るより明らかだった。こんな山中の井戸の底に取り残されたら最後、いくら助けを呼んだところで誰の耳にも届くわけがない。

「津久葉が！　津久葉が大変なんだ！　おい郁紀！　頼む、出してくれ……‼」

今の郁紀に慈悲を乞うのであれば、神や悪魔に祈ったほうがまだ空(むな)しさに関しては分があったかもしれない。耕司はとにかく必死に叫び続けた。山間の天気、気温の変化、狩猟者などが通る確率、すべてが生存可能性に難を叫んでいる。

やがて空の闇色が井戸の底と同じ深さになるにつれ、西日を受け頭上で薄く光る輪のように見えていた井戸の縁も、周囲と徐々に同化して見分けられなくなった。一体、何時間叫び続けたのだろうか、耕司自身にも判らなくなってきた。

それでも耕司は叫び続けた。まだ郁紀は近くにいるかもしれない。まだ山荘の捜索を続けているかもしれない。そして、声が届けば変心するかもしれない。だが、黙ってしまえばそれらの可能性が否定されてしまう。

周囲の静寂が耳に沁(し)みた時、絶望が自分を殺すであろうということを、彼ははっきりと理解していた。

たまらなく爽快だった。
難関とも思えた課題を、これ以上ないほどに抜かりなく、完璧にやり遂げたという達成感。パズルの最後の一ピースが、緩くもなくきつくもなく、吸い込まれるようにぴたりと定位置に収まった充実感。
僕は人を殺した。誰にも見つからない場所で、誰にも知られることもなく。
浅く雪の積もった山道を一人、徒歩で市中まで下りる道程は肉体的には過酷なものがあったが、そうした寒さや疲労もまったく苦にはならなかった。
耕司の車に乗って帰る誘惑も抗いがたいものがあったが、それでは画竜点睛（がりょうてんせい）を欠く。あいつにはこのまま、自動車もろとも行方不明になってもらうのが望ましい。下手に事件性を帯び、市街や高速道路の監視カメラを調べられると面倒なことになる。
その所番地から周辺の状況が判った時点で、頭の中にはあった計画だった。
もし奥涯教授の足取りが摑めなかったとしても、それならそれでこの物件は、もう誰が訪れることもない忘却の地だという保証になる。邪魔者を始末するには絶好の場所ではないか。わざわざ栃木まで出向いた手数を、無駄にすることはない。
いざという時のために肉切り包丁も隠し持って行ったのだが、わざわざ刃傷に及ぶまでもなかった。涸れ井戸とは――何とまた好都合な舞台装置があったものか。運命が僕に味方してくれて

いるとしか思えない。しかもあの馬鹿は立ち位置の危険性を気にもせず、通話に夢中になっていた。回り込んで近づく僕に気付きもしなかった。

ともかく、僕と沙耶との生活に余計な詮索を入れてきそうな人間が、これで一人、完璧に地上から姿を消した。あと一人始末すれば、今度こそ完成だ。

津久葉瑶。耕司ほど積極的に行動を起こしそうな人間ではないが、だからといって油断はできない。戸尾耕司と高畠青海が消えたことを結びつけて考える程度の知恵は、あの女にもあるだろう。

井戸の横で耕司が電話していた相手が瑶だというのも、考えようによっては好都合だった。他の人間であれば、その人物もチェックする必要が出てしまう。

二人の会話の内容がよく解らなかったのは多少の気がかりだが、何事かを怒鳴りつけていたあの様子からして、またぞろ瑶が厄介な泣き言でも繰り始めていたのだろう。さほど密な情報のやり取りがあったとは思えない。

いずれにせよ、彼女の始末も急ぐに越したことはないだろうが。

日暮れからほぼ夜通し歩き続けて、ようやく最寄り駅に着く頃にはもう始発電車が動き始めていた。帰宅の途につき、電車の中で身体を休めながら、穏当に瑶を殺す算段があるかどうかを考える。

再度あの別荘を使うのは危険だし、難しそうだ。特に、瑶に対しては先日、つい我慢しきれず癇癪を爆発させてしまったばかりだ。彼女は耕司のように簡単に僕を信じることはないだろうし、二人きりになれる状況を作るのも簡単ではないだろう。

いっそ僕一人で悩むより、沙耶の知恵を借りるのも手かもしれない。とはいえ、僕にだってそれなりにプライドというものがある。できることなら彼女には、男として頼りがいのあるところを見せてやりたいのだが――

さしたる妙案も浮かばないまま家の前までたどり着いたところで、僕はそれらの思考を放棄し、後日に送ることにした。結局、奥涯教授があの別荘に立ち寄った形跡は見つけられず、彼の捜索そのものは空振りに終わったが、まずは当面の懸念だった耕司を僕一人で始末できただけでも、胸を張っていい成果だ。

どのみち沙耶は、もうさほど教授の行方を気にかけてはいない。捜索を続けているのはひとえに僕が、自分の好奇心を満たすためだ。焦る必要はない。

「ただいま」

いつもとは半日、時間のずれた朝帰り。小走りに階段を下る軽快な足音が廊下の奥から聞こえる。沙耶はそんなに僕の帰りが待ち遠しかったのだろうか。そう思うと何だかこそばゆい。

「おかえり、郁紀！」

いつもより二割増の明るい笑顔とはしゃぎようで、沙耶は僕の首根に抱きついた。
「遅くなってごめんな。色々、予定が変わったもんで……」
「ううん。私の方も、もうちょっとで準備が終わるとこ」
「準備？」
怪訝に思って僕が聞き返すと、沙耶が悪戯っぽく含みのある笑みを浮かべる。
「郁紀をね、びっくりさせる準備」
「……どういうこと？」
「まだナイショ。それより郁紀、疲れてるでしょ？　お腹空いてる？　それとも——」
沙耶に言われるまで僕は、自分の空腹をろくに意識もしなかった。まる一晩、何も口に入れないで歩き続けたことを思い出した途端、胃袋が痛いほどに主張を始める。だが雪道の泥と汗で汚れきった身体のまま、くつろいで食事する気にもなれない。
「軽く何か口に入れて、それから風呂に入りたいな。暖まるまでゆっくり」
「ふふっ。そう言うと思って沸かしてあるんだ、お風呂。一晩中外にいたんだもんね。寒かったでしょ」
「ああ、そりゃあもう」
——沙耶は本当に手回しがいい。僕の望むことをすべて先回りして叶えてくれる。

「ふぅん、大変だったんだぁ……」
二人で湯船に浸りながら、僕は昨日の冒険譚を沙耶に語り聞かせた。
「殺すのは思った以上に楽だったんだよ。ただ、帰り道がね」
ほどよい湯の温度はもちろん、僕の腹に乗った沙耶の背中の感触も心地よい。沙耶は僕にその身体を預けながらも、夜通し歩いて強張った僕の脚の筋肉を揉みほぐしてくれていた。彼女が両腕に力を込めるたび、可愛らしい鎖骨が浮き上がり、そこから浅く柔らかい曲線を描く乳房が湯の中を泳ぐのが見える。
ああ、我が家に帰ってきたんだなと、しみじみ満ち足りた気分を満喫する。積もり積もったすべての疲労が、ベッドで眠るまでもなく癒されていく。
居間や寝室と同様に、この風呂場も僕と沙耶の色に塗り込めた安らぎの空間だ。玄関や廊下は万が一のとき人目に触れても問題ないよう、元の色彩のまま残してある。
自分の家でありながら、僕が心の底からリラックスできるような場所はこの三カ所しかなかった。
「この季節でも、山の寒さは尋常じゃないね。薄着で行ったのはつくづく失敗だった。歩いて身体を動かしていても、凍死するんじゃないかってヒヤヒヤしたよ」
「その耕司って人の服も取り上げて、重ね着してくればよかったのに」
「おいおい、耕司は井戸に落としたんだってば。着てた服も井戸の底だよ」

「あ、そうか」
照れ隠しに舌を出してから、笑い転げる沙耶。
「――で、あと心配なのが、津久葉瑶って人？」
「耕司の失踪と僕を結びつけて考えそうなのは、そいつ一人だけだからね。彼女の始末ができてやっと、僕らは枕を高くして眠れるってところだね」
「ふぅん」
沙耶は、何やらいわくありげな目つきで肩越しに僕を一瞥する。
「その人の殺し方、もう郁紀は考えてあるの？」
「それが……まだなんだ。色々と考えたんだけどね。だから沙耶の知恵も借りようかと思ってさ」
「まっかせといて。沙耶はね、郁紀が想像もつかないような方法を知ってるんだから。ていうか、もう解決したも同然だよ」
いつになく自信ありげな様子で、沙耶はニッコリと頷いた。
「さぁてと、もういい加減、仕上がってる頃だし――」
何かを期待しているかのように、うきうきと声を弾ませながら、沙耶は湯船から立ち上がって湯気の中に裸身を晒す。
「出よ、郁紀。見てほしいものがあるんだ」

「目を瞑(つむ)って、私がいいって言うまで開いちゃ駄目。わかった？」
「あ、ああ……」
そう言い含め、沙耶は目を閉じた僕の手を引いて二階への階段を上がっていく。
普通ならサプライズが用意されている場面なのだろうが、なにせ病人を脅かして回っていた彼女のことだ。悪戯かもしれない。そう訝っていたところで、僕は上階から聞こえてくる呻き声のようなものを聞き咎め、驚くのを通り越して警戒に身を硬くした。
「さ、沙耶、上に何かいるんじゃ――」
「駄目！　目を開けちゃ」
ぴしりと言い放ってから、沙耶は僕を落ち着かせようとしてか、そっと腕を撫でる。
「危ないものじゃないから、安心して。大丈夫」
「あ、ああ……」
どうやら寝室のようだ。その呻きは、沙耶に先導され階段を上がる傍から段々とヴォリュームを増していた。もう、ここまでくると間違えようがない。苦しげな啜り泣きだ。沙耶は誰かを僕らの家に上げたのだ。
一昨日あんな危険な目に遭ったばかりだというのに、何とまた不用心な――そう呆れかけたところで、ふと僕は気がついた。

それは『人間の』啜り泣きだったのだ。
そんな風に、感情の表現として僕にも伝わる音声を出せるのは、沙耶一人だけではなかったのか？
僕は目を閉じたまま沙耶に導かれ、寝室に踏み込んだ。瞑目（めいもく）してなお、はっきりと僕の目の前で呻吟に身を震わせている何者かの存在が感じられる。
だが奇妙なことに、今の僕には耐え難い臭気となって感じられるはずの……人間の体臭が、ない。
「さぁ、ご対面！　郁紀、目を開けて」
促されて目蓋を上げた僕は——しばし呆然と言葉を失った。
津久葉瑶。彼女が、一糸まとわぬ裸体のまま、胎児の姿勢で床にうずくまり、小さく身をわななかせている。
その露わになった肢体は、想像を超えて豊満で蠱惑（こわく）的だった。普段の彼女が見せる純潔そうな風貌の、その対局にあるようなプロポーションに、僕は目を奪われる。
なぜ彼女がここにいる？　こんな格好で何をしている？
いや、そんなことよりも——
「どう？　郁紀。この子の軀、どんな風に見える？」
「……綺麗だ。でも、なんで僕にもちゃんと……」

そうだ。
いま僕の目の前で肌を晒している女性は、間違いなく、僕が事故に遭う前の彼女だ。その後、僕につきまとい閉口させられた、あの腐肉の化け物ではない。なぜか、僕の知覚にも正しくヒトの姿として捉えられる容姿をしている。
「この子ね、郁紀のことが好きだったんだって」
瑶とのことを、沙耶に話したことはない。どうして知っているんだろう。
「だから私、この子の軀を造り替えてあげたの。ちゃんと郁紀にも可愛がってもらえるような姿に――」
そこで沙耶は言葉を切って、僕の反応を窺い、満足げに頷いてから続けた。
「私の眷族(けんぞく)にしてあげたの」
「なぜ……どうやって？」
瑶と接触した経緯も不可解だったが、それ以上に不可解なのは、沙耶の言葉――彼女が瑶に対して行ったという言葉の内容だった。
「軀を――造り替える？」
「言ったでしょ、郁紀。私は他の生き物の身体に細工ができるんだって」
〝ほかの生き物の身体を組み替えたり、調整したり……〟
たしかに言っていた。その力を以(もっ)てすれば、僕のこの障害すら修復できるのだと。

それを疑ったことはない。実際にあの売れない中年画家は、彼女に脳を弄（いじ）られ、世界を僕と同じように認識するに至り——発狂したのだ。

だがそうした例をサンプルとして、沙耶の能力は僕のなかで、脳外科手術のような技としてイメージが定着していた。けれど、この瑶は——

「今回は、隣のおじさんにしたような微調整じゃなく、大がかりな『変換』。でも、これが私の能力の本来的な使い方なの。ま、実際にやってみたのは、これが初めてなんだけど……」

「本当に……瑶なのか？」

ようやく僕の存在に気が付いたのか、瑶は顔を上げてこちらを向いた。

どんよりと曇った目の中に、ほんの微かな理解の色がほのかに点る。僕を見る時、彼女がいつも浮かべていた、遠慮がちな笑み。間違いない。

僕の目に、本来の津久葉瑶は、醜い肉の塊に見えるはずなのだ。では、こうして僕の目に本来的な姿で見えている彼女の、今の本当の姿形は一体……。しかも、僕の脳を外科的にどうにかした訳ではなく、彼女の方を『変換』したことで、これを実現したのだというのだから、つまり——

沙耶は言っていた……自分の眷族にしたのだ、と。

それは、整形手術なんていう次元のものじゃない。おそらく、今こうして人間のように見えている目の前の彼女は、人間だった頃の瑶とはまったく別の生き物なのだろう。

「ヒト科ヒト目の生体構造についてはね、この星でいちばんのエキスパートなの。いっぱい勉強したからね」
瑶という初めての作品を前にして語る沙耶の口調は、いかにも誇らしげだった。
「勉強って……何を、誰から学んだんだ？　いつ、どうやって？」
奥涯教授であるわけがない。こんな芸当をしでかし、その方法を沙耶に伝授できるような教師などいるはずがない。これは人智を超えた所行だ。
「だって……毎日、郁紀のを注ぎ込んでもらったじゃない。私の中に」
言ってから、沙耶はちょっと照れたように頬を赤らめる。
「あれって、要は人間っていう生命体の設計図みたいなものだから。私にはそれを読み解くことができるの。好きなように弄ることもね」
「……」
本当に、この子は——いったい何者なんだろう？
人間じゃない。それはわかっていた。だがそれだけではない。沙耶は、人間を超越した何かなのだ。
「でもねー、やっぱり最初だったもんだから、手際よくはできなくって」
沙耶が近づくと、瑶は恐れおののくように身震いして、逃れようと床を這う。だが手足の動かし方がまるで出鱈目（でたらめ）で、思ったように動けないでいる。まるで——新しい身体の動かし方がわか

っていないかのように。
怯えたような呻り声も、まるで言葉にはなっていない。
「――喋れないのか？」
「うん。精神の方は壊れちゃったみたい。凄く残念だけど」
溜息をついて、沙耶はちょっと悔しげに首を捻る。
「そっちは、ただの電気信号では済まされない部分があって、まだ完璧じゃないの。何だかんだで肉体の組み替えが終わるまでに時間もかかっちゃったし。かなり苦しかったはずだから、すっかり怯えてるみたい」
「……」
瑶が床に這いつくばり、縋りつくような眼差しで僕を見る。理性や知性は失われたかもしれないが、僕のことはうっすらと覚えているのだろう。
「で、どう？　気に入ってくれた？」
「どう……って？」
「だって郁紀、友達や家族が欲しいって言ってたでしょ？　だからこれは、沙耶からのプレゼント」
沙耶が、目を輝かせて僕を見る。何の邪気もなくそう言われて、僕は返答に詰まる。
「友達や家族、か……」

僕を喜ばせようという彼女の気持ちはとても嬉しかった。だが、どうにも沙耶は根本的なところで常識に欠けるきらいがある。

「けれど、どうしたものかな。人間一人を監禁し続けるっていうのは、かなり難しいんじゃないかな……」

「大丈夫だよぉ。ほら、こうやって鎖で繋いであるし」

瑶の姿の、一糸まとわぬ裸体という表現にはいくらか語弊があった。いったいどこで手に入れてきたものか、彼女の首には大型犬用とおぼしき革製の首輪が巻かれていた。そこから伸びたクロームメタルの鎖が、ベッドの支柱に繋がれている。

沙耶はやおらその鎖を引っ張り、まだ逃げようとしていた瑶を転ばせた。彼女がしゃくり上げるような悲鳴を上げて、無様に床に転がる。

「それにこの子、どっちみち逃げ出して何かしようとか、そういう難しいことはもうできないから。ね？　これでもう郁紀が心配することなんてないでしょ？」

それは——たしかに、そうだ。

なんとか瑶を殺すつもりで、さっきまで知恵を絞っていた僕だが、その難題は思わぬ形で解決がついたことになる。万一、健常な人間が今の彼女を見たところで、在りし日の津久葉瑶とは似ても似つかない姿に見えるだろう。しかも記憶もない、言葉も喋れない、となれば……完璧ではないか。沙耶は命を奪うことなく瑶の社会的生命を抹殺したのだ。

だがそれでも、彼女を友人や家族として受けいれる、というのは――
「……嬉しくない？」
ふと気がつけば、沙耶はさっきまでの自信が嘘のように意気消沈していた。
「私、また何か勘違いしてた？　郁紀のこと困らせちゃった？」
「いや――」
「この子の世話はちゃんと私が一人でやるよ？　郁紀に面倒くさい思いなんてさせないよ？　それでも……駄目？」
違うのだ。僕は沙耶の好意を無下にしようだなんて、これっぽっちも思っていない。
それでも僕が、いま床に転がって悶えている裸身を正視できずにいる理由を、どう沙耶に説明したものか。
「そういうことじゃない……違うんだ」
あの事故以来、三ヶ月ぶりに見る沙耶以外の人の姿。それも――こんなにも豊満な色香を備えた、美しい人間の、雌。嬉しくないわけがない。そう思う一方で、ここで喜んでいいわけがないという理性の声も、無視をするには大きすぎた。
「嬉しいよ。嬉しいんだけど――素直に喜んでいいのかどうか」
「どうして？」
「だって、沙耶のこと思うと、さ……」

「？」
　きょとんと、狐につままれたような面持ちで沙耶は小首を傾げる。
「いやだって、ほら……この子だって女の子だからさ。僕が沙耶の他に、別の女の子と一緒に暮らすっていうのは……嫌じゃ、ないのか？」
　しばらく考えて、沙耶はようやく僕の言わんとするところを理解したようだった。
「アハハッ！　そんなぁ。郁紀って考えすぎだよぉ」
「……」
　だが僕は沙耶に、彼女を愛することを誓ったのだ。そうであることを考えると、当然の心遣いだと思うのだが……。
　それとも沙耶は、女の裸体を前にした男が感情とは別の次元で反応せざるを得なくなるということを、理解してくれていないんだろうか。
「あぁ可笑しい。――ほんとに優しいんだね、郁紀って」
「……そういうことじゃないと思うけど」
「ううん。この子はね、郁紀を喜ばせたくって沙耶が用意したんだから。だから、郁紀がこの子のことを気に入ってくれるんなら、それだけ沙耶も嬉しいんだよ。ぜんぜん、遠慮するようなことじゃないんだってば」
「けど、こう言っちゃ何だが……」

この、嘘偽りのない心境をどうやって表したものか。
しどろもどろに言葉を繋げる。
「男って――その、ものすごく下劣な生き物だから――ほら、瑶の軀って、沙耶のハダカとはまたぜんぜん違う特徴があるだろ？　これって――沙耶のこと好きだって思う気持ちとは全然別のところで――その、かなり気をそそられる、ってのが――」
僕の説明を聞いて沙耶はますます面白がり、ついには腹を抱えて笑い転げていた。
「うんうん、わかるわかる。郁紀は男の子だからそれでいいの。正常な本能だよ？」
おどけた口調で僕の肩を叩きながら、沙耶はもう一方の手で目尻を拭う。どうやら涙が出るほどに可笑しかったらしい。
「じゃあさ、この子を可愛がるときは、沙耶も一緒に交ぜてよ。沙耶の軀だけじゃできないような遊び方、みんなで楽しもうよ。ね？」
「……沙耶はそれでいいのか？」
そう訊ねると沙耶は、その顔に、今まで見たこともないような微笑を浮かべた。静謐と言ってもいい、ぞっとするほどに静かな笑み。普段の彼女が浮かべる明るい笑顔とは似て非なる、どこかひどく妖艶な微笑。
「郁紀と沙耶は愛し合う恋人同士。津久葉瑶はそんな二人のペット。で、この子は私と郁紀に可愛がられるたびに、そのことを思い出すの。生きている限り毎日、ずっと」

ああ、そうか――

僕は、津久葉瑶を受けいれることは、沙耶の嫉妬を煽る、彼女に誓った愛を穢す行為なのではないかと怖れた。だがそれを笑い飛ばされ、彼女には嫉妬する心などないのかと思いかけていた。そうじゃない。彼女の嫉妬心は、そもそもそんな次元にはなかった。

津久葉瑶はおそらく、ただ僕に恋心を懐いていたというその一点のみを嫉視され――こうなったのだ。もし彼女に理性が残っていれば、今の境遇は、ただ殺される以上の地獄に違いない。だからこそ沙耶は、彼女の心が壊れたことを惜しんだのだ。

なんと邪な、おぞましい沙耶。

人は彼女を恐怖するだろう。忌み嫌うことだろう。けれどそんな沙耶の邪悪さが、僕はいま愛おしくてたまらない。

沙耶が瑶にした仕打ちの残酷さ。その邪悪さのなんと人間的なことか。

姿形がどうあろうとも、その魂の形のなんと僕らと近しくあることか。

彼女は僕を想う心とまったく同じ熱量で、瑶という女を火刑に処したのだ。瑶の悲惨な境遇を見れば解る。沙耶がどれほどに激しく熱く、僕のことを愛しているのかが。

「沙耶は、気に入ってるのかい？　この……ペットのことは」

「うん。とっても綺麗で、触り心地もいいんだよ」

「そうか。じゃぁ二人でこいつと遊ぶときも、沙耶は沙耶で楽しめるんだね？　僕が遠慮することはないね？」

「もちろん！」

満面の笑みで頷いて、沙耶は再び鎖を手繰り、倒れていた瑶を床から引き寄せた。

「ぁぅ……」

「ねぇ郁紀、触ってごらんよ。柔らかくて気持ちいいよ？」

「ああ」

哀れを催す潤んだ眼差しで見つめてくる瑶。その瑞々しい肢体を、たわわに実った乳房を、僕は今度こそ何の遠慮もなく嘗めるように鑑賞しながら、詰め寄った。

まず指先で髪に触れる。さらさらと流れるような滑らかな手触り。

その感触を堪能しながら、僕は慰撫するように瑶の頭をそっと撫でてやる。

「……」

追いつめられたような瑶の表情が、ほんのわずかに安堵で和む。僕が誰なのか、心のどこかではまだ記憶しているのかもしれない。こんな風に優しく接してくれる相手だと、今なお思いこんでいるのかもしれない。

――愚かにも。

僕は髪を撫でる手を止めると、不意に両手で左右の乳房を鷲掴みにした。

「ぅッ……！」

いきなりの乱暴な扱いに狼狽(うろた)えて、瑶が痛々しく顔を歪める。だが僕は容赦なく、欲望の赴くままに、指先と掌でその柔肉を貪りつくす。

柔らかい。本当に柔らかい。力を込めて摑めば摑むだけ、まるで指が内側に吸い込まれていくかのようだ。

そう、こういう感触は、沙耶の細く引き締まった軀ではあまり味わうことができない類のものだ。そもそも、彼女の繊細な軀をこうして乱暴に扱おうなんて思ったこともないけれど。だが……。

「ひぐッ、ううぅぅッ！」

たっぷりと手に余る乳房を下から掬い上げ、絞るように揉みながら、指先で乳首にも触れてやるようにすると、瑶はとうとう痛みに耐えかねて細い悲鳴をあげ始めた。

どうやら、過敏な場所への刺激は、ほんの少し優しさを欠いただけでも充分な苦痛になるようだ。むろん今の僕の指使いは、ほんの少し、なんていう程度のものではない。左右とも両手の人差し指と親指の二本で乳首をつまみ上げ、捻り潰すようにして転がしてやると、瑶の悲鳴はますます甲高く、息づかいも激しくなっていく。

これはこれで悪くない。――何かを、圧倒的な力で蹂躙する感覚というやつは。

「郁紀ぃ、もう凄く元気になってるよ？」

横から沙耶に指摘されるまでもなく、自覚していた。スラックスに包まれた下腹の内側では、僕の欲望がすでに有り余る硬度で屹立している。

「こういう立派な雌の軀と、沙耶みたいなのと、郁紀はどっちが興奮するの？」

「そうだな……ただ軀だけが目当てなら、こっちかも」

「うー、なんだか妬けるぅ」

不満げに唇を尖らせる沙耶。そんな表情がまた愛らしい。

「それでもいいって言ったのは、沙耶だろ？　ほら、沙耶も一緒に」

「うん。やらせてやらせて」

沙耶は瑤の背中側にまわり、後背から両手で彼女の乳房を掬い、摑み上げた。僕の指使いに倣うように五指を次々と蠢かせ、その弾力を存分に堪能する。

「あはっ、何度やっても面白い！」

「くぅ……うううぅ……」

啜り泣く瑤の顔と、沙耶の手の上でそれぞれが独立した生き物のように形を変えていく二つの乳房を眺めているうちに、また別の嗜虐（しぎゃく）のアイデアが僕の中に湧いてきた。

「じゃあ、僕はこっちで」

スラックスを脱いで、いきり立った竿（さお）の切っ先を瑤の乳房に圧し当てると、搔き回すようにして左右の胸の谷間に割り込ませていく。

「沙耶、もっと真ん中に寄せてくれ」
「うん、こう？」
僕の意図を察した沙耶が、たっぷりとした左右の脂肪で僕の竿を挟み、圧迫する。たまらない感触だった。
沙耶の両手が外側から瑶の乳房を押し上げ、押し潰すのに合わせて、僕もまたその中央で腰を跳ねさせ、陽物で彼女の胸を苛む。
「うううぅぅ……」
「ねぇ郁紀、それ気持ちいい？」
「ああ、これはこれで……」
沙耶の膣を貪るのとはまた違った、柔らかく温かな質量の感触。僕はさらに腰を密着させ、ペニスの先端を瑶の顔に突きつけた。前後に往復するたびに、泣き声を漏らす瑶の唇や鼻を、赤黒く張りつめた僕の亀頭が威嚇するようにつつきちらす。そのたびに瑶は怯え、慈悲を乞うようにして声にならない呻きをあげる。
「沙耶……もっと強く」
「こう？　こう？」
「あぐうぅッ！」

さらに容赦なく乳房を摑み寄せられ、瑶が苦悶に身震いする。その痙攣と、乳房の圧力を通して伝わる沙耶の手の感触と——僕は二人分の奉仕を一身に受けて、一気に快楽の絶頂まで押し上げられる。

限界だった——次の瞬間、僕の欲望がたっぷりと瑶の顔面にぶちまけられた。

「ひぅッ!?」

何の前触れもなく眼前で炸裂したものが、瞼や鼻筋にべったりとこびりつき、僕の体温の熱気で瑶の顔を覆い尽くす。しなだりを突然に受け狼狽した瑶が、必死になって首を振り、空しい抵抗をする。

「うわぁ、いっぱい出た……」

瑶の肩越しに、彼女の顔を覗き込んだ沙耶が、陶然と羨むように呟いた。それから瑶の頭を摑んで無理矢理に横を向かせ、そうやって汚された彼女の顔と直面すると、たった今僕が吐き出したものを、弄うような舌使いで愛おしげに舐め取っていく。

「これはね、ぜんぶ沙耶のだからね……」

沙耶が舐めとっている間にも、顔を伝い落ちる白濁は瑶の口へと流れ込み、それを飲みかかった瑶が苦しげに噎せ返る。

「あ、駄目駄目駄目！　飲んじゃ駄目！」

慌てた沙耶が、有無を言わさず瑶の唇を奪う。強引に舌を割り込ませ、瑶の口内を蹂躙してから、流れ込んだ僕の精液を周到に吸い上げる。
「瑶になんて、あげないんだから。……ぜーんぶ、沙耶がもらうの」
満足げに呟いてから、沙耶は舌でかき集めた僕の精液を、喉を鳴らして嚥下（えんげ）した。そうやって嫣然（えんぜん）と笑う沙耶を、瑶は何が起こっているのか理解できていない、怯えに曇った胡乱な眼差しで見つめている。
そんな、二人のやり取りを眺めているそばから、僕は早くも欲望で身体の芯が熱くなっていくのを感じた。胸だけでは飽き足りない。せっかくの沙耶からの贈り物だ。もっと存分に堪能しなきゃ罰が当たる。
沙耶と僕の責めで赤く腫れた瑶の乳房。そこから臍へ、下腹へと掌を這わせ、僕は瑶の股間の茂みの中へと指を差し入れてみた。
「ひゃっ！」
またしても過敏に、まるで電撃でも浴びせられたように総身を硬直させる瑶。だが僕の指先は、そのときはっきりと探り当てていた。瑶の花芯（かしん）が、疑う余地もないほどの量で蜜を漏らしていたことを。
あんなことをされたのに。
――そのとき、僕の中にあった津久葉瑶という人間は、完全にその尊厳を失った。

それで心底『可愛い』と思えるようになった。

「ははっ」

僕は瑶の上体を手荒く突き倒し、彼女が悲鳴を上げるのも構わずに、左の足首を摑んで高々と頭上まで吊り上げた。

「あうぅ、あううぅ……ッ！」

片足を床からほぼ直角になるまで拡げられ、大きく晒し出された瑶の秘部。今の彼女から羞恥心などといった情動は失われているが、それでも残された本能で自分の体勢がいかに無防備なものかは理解できるのだろう。まるで狩り立てられる小動物のように呼吸を荒らげて身悶えし、それから逃れようとする。

そんな瑶の抵抗をがっちりと腕力で封じたまま、僕は床に投げ出された右足の腿を跨いで膝立ちになり、屹立の先端を瑶の秘裂へとあてがった。

「ひっ」

粘膜が触れ合った途端、瑶の息遣いは悲鳴の高さにまで音域をあげた。

僕を抵抗なく受け入れるには濡れ具合が足りないが、問題はない。強引に押し入るのに充分なだけ、こちらの欲望は硬く凝っている。

痛みの予感にパニックを起こしかけている瑶の反応を充分に鑑賞し愉しんでから、僕は思いきり腰を進め、彼女を刺し貫いた。

「あぐぁぅぅッ!!」
身構えていただけでは事足りなかったらしく、瑶の押し殺した悲鳴には断末魔の痛ましさがあった。なんとなく僕は、包丁で鈴見を刺し殺した夜のことを思い出す。
「ううう っ！　あうううぅッ!!」
挿入物の責め苦から逃れたい一心でのたうつ瑶。だが右足は僕に跨られ、左足は僕の両手に抱えられ、側位の姿勢で固められた瑶の下肢は、大きく拡げられたまま動かすこともできない。いくら上体だけを捩っても、彼女が僕の腰から解放されることはない。
「ふぅッ！　くふぅぅぅッ!!」
今の瑶にできることは、ただ為す術もなく僕の蹂躙に身を任せることだけ。
「辛そうだね」
涙を滲ませて喘ぐ瑶の顔を、沙耶が興味津々の態で覗き込む。
瑶の内側の感触は、沙耶とはまるきり違っていた。その未成熟な容姿とは裏腹に、驚くほど柔靭(じゅうじん)でしなやかに僕を吸いあげ、包み込むのが沙耶。それに比べて瑶の身体は、明らかに未開発だ。その内側はまだ硬く狭く、蜜のぬめりも充分とは言えない。とはいえ、攻める側からすればこうした抵抗の強さもまた、刺激のひとつではあるのだが。
「気持ちいい？　この子」
「うん、まぁ」

求め合う快楽であれば満足度は当然のように沙耶が上だが、瑶の恵まれた体軀は、それとはまた違う蹂躙の快楽を僕に与えてくれる。

彼女の痙攣にあわせてさざ波のように震える腿の肉。荒波に揉まれるように上下に翻弄され振り乱される二つの乳房。

「ウフッ、じゃあ沙耶も」

沙耶が瑶の脇腹に馬乗りになり、その腰骨のあたりに花芯の蕾を押し当てる。瑶を攻める僕の振動が、沙耶の過敏な部分にも伝播し、彼女から甘く湿った吐息を漏らさせる。

「あ……」

「可愛い……ほんとに可愛い。この子……」

うっとりと夢見るように呟いて、沙耶は空いた左手で瑶の乳房を揉みしだく。

「んううう……ぅぅ……ぅぅ……ぅぅ……」

瑶の喘ぎは次第にリズミカルに、蕩けるように熱くなっていく。彼女も、ようやく僕の動きを快楽として受け止められるようになってきたらしい。

「ねぇ——郁紀——イキそうに、なったら——」

瑶の腰骨で自らを慰め、切なく吐息を上気させながら、沙耶は肩越しに振り向いて僕に訴えかけてきた。皆まで言わせずとも彼女の望みは理解できた。

「ああ、分かってる。大丈夫……」

僕と瑤の間で、淫猥（いんわい）に細い腰を擦り上げる沙耶。その様子から、僕は沙耶の準備もまた充分に整っているのを見届け、己の絶頂へ向けて腰の動きを加速させる。その動きに呼応し、瑤の息遣いも焼き切れそうなほどに切迫していく。

「あああ、ああああっ……」

「沙耶、もう――」

「うん――いいよ、郁紀――」

頭の芯から、背骨を駆け下りていく灼熱の射精感。

いよいよという瞬間、僕はそれまで固く抱きかかえていた瑤の下肢を突き放し、空いた手を沙耶へ伸ばした。

「郁紀……ッ！」

期待に叫ぶ沙耶の尻を掴み、両手で拡げ、精一杯にまで押し開かれた沙耶の濡れ光る中心に、爆発寸前の僕自身を突き入れる。

「あああああッ！」

歓喜と苦痛のない交ぜになった絶叫とともに、沙耶は僕の衝撃を受け止める。そんな仕打ちを受けてでもなお沙耶が求め欲する喜びを、僕の欲望のすべてを――僕は慣れ親しんだ熱く柔らかい緊縛の中で、存分に解き放つ。

「はぁ、あ、熱……い……」

ぶるぶると、胎内にほとばしる飛沫の熱さに忘我の境地で打ち震えながら、満ち足りた表情で僕の体温に浸る沙耶。

瑶はつい寸前まで胎内で荒れ狂っていた暴虐の余韻に肩で息をしながらも、やおら断ち切られたその感触に自失し、霞んだ目で僕と沙耶とを見比べている。

それぞれに折り重なって身を投げ出し、まるで抜け殻になったような空っぽの疲労感にくるまれて、僕は今日から始まるであろう新しい暮らしに思いを馳(は)せた。

腕の中には添い寝する沙耶。少し離れた床には丸く縮こまって眠る瑶。つい昨日までは想像もつかなかった新たな三人の家族。

いつだって変化をもたらすのは沙耶だ。新しい部屋、新しい食事、新しい家族。すべて僕の絶望を癒すためだけに——死にかかっていた僕の運命にふたたび喜びをもたらすためだけに、沙耶が示してくれた道。

そしてまた、僕も変わった。

目障りだった者たちのうち、僕は二人を殺し、さらに廃人になったもう一人を奴隷(どれい)にした。それだけのことをした後で、こうして心安らかに眠りに落ちようとしている僕は間違いなく、かつての匂坂郁紀ではない。

これから先、沙耶はどこまでいくのだろうか。

そして僕は、どう変わっていくのだろう。

未知なる世界への漠然とした不安。決して不快ではないその宙吊りの感覚の中で、僕は沙耶の髪を指先で弄りながら、問う。
「君は――いったい、何者なんだい？」
眠っているなら、答えたくないなら、それでいい。僕は答えを期待するでもなく、ベッドの上の虚空へと問いかけた。
だが沙耶は、身じろぎして僕の方を向いてから、深い瞳の奥底を僕に覗き込ませる。
「うまく、言葉では説明しにくいんだけど――」
しばらく考え込んだ後、沙耶は自らの内側に探りを入れるかのように、ひとつひとつの言葉を探すようにして、語り始めた。
「タンポポって花があるよね。種を風に乗せて飛ばすやつ」
「うん？」
「綿毛の種は風に運ばれて、故郷から遠く遠く離れて。もしかしたら草木なんかひとつも生えてない砂漠に、ひとりぼっちで落ちちゃうかもしれない。そんなとき、たった一粒のその種が何を想うか……それを想像してくれれば、解ってもらえるかもしれない。私のこと」
「……」
僕はしばらく自分の中で、沙耶の答えを吟味（ぎんみ）した。その間にも沙耶は先を続ける。

「種は、もちろん草の種だからね。その気になって頑張れば、砂漠を砂漠じゃなくしてしまえる。ただ一粒きりの種でも、もしかしたら、頑張ろうって思うようになるかもしれない。頑張って育って増えて、いつかこの土地が一面のタンポポ畑になるまでやっていこうって、そう思うかもしれない。そんな風にタンポポの種が心を決めるとしたら、どんなときだと思う？」

「……それは？」

沙耶は優しく微笑んで、僕の頰に手を差し伸べた。

「それはね、その砂漠に——たった一人だけでも——花を愛してくれる人がいるって知ったとき。タンポポの花は綺麗だね、って、種に話しかけてくれたとき」

「……」

沙耶の細い指が慈しむように僕の頰を撫でるのを、僕は安らかな至福の中で感じる。

「あなたのこと、大好き」

囁く沙耶を、僕は胸の中で抱きくるんで、無言のまま頷いた。

「ずっと傍にいて。いつまでも、私の隣に」

「ああ、もちろん」

睦言の優しい甘さを互いに確かめ合いながら、僕らは眠りの底へと沈んでいった。

第四章

別荘　耕司

　それは生きながらの埋葬だった。死のような静寂と、死のような冷気。
　それだけが、世界の全て。
　声が枯れ、叫び続けるだけの力もなくなってからは、耕司の思考能力は完全に麻痺していた。
　ある意味でそれは慈悲深い、本能のなせる麻酔だったのかもしれない。彼は自分が誰なのかを忘れ、どうしてこんな闇の底に囚われているのかも忘れ、そうやって徐々に命を蝕んでいく冷気の感覚から逃避する。
　代わりに彼は夢を見ていた。二十年余りの人生の中身を脈絡なくランダムに拾い上げたラッシュフィルムの上映会。幸せで楽しい場面だけでなく、中には辛く悲しい場面もあったが、それら

でさえ彼がいま死のうとしている場所よりは暖かく快適だった。ただそれだけで夢は充分に慈悲深かった。

たとえば、山の夢。幼い頃に兄と連れだって行った昆虫採集。虫籠に入りきらない蝶をビニール袋に詰めていくうち、気がつけば窒息した蝶の羽が袋いっぱいに詰まっていた時のこと——

たとえば、恋人と過ごした日々。馴れ初めは合コンだった。明るく場を盛り上げる青海が、下戸だと見破ったのは彼だけだった。無理して飲んだ酒を裏路地で吐いている彼女を介抱し、それから二人は缶ジュースで乾杯をやり直して、それから——

たとえば、深い海の夢。真っ暗な夜の海。

彼は水底まで潜ってから頭上を見上げ、水面越しに月を眺めていた。どこか遠くで自動車が走っている。その音をぼんやりと聞きながら、彼は海の底から、丸い、明るい、月の輪の光を——

彼の中に残っていた何かが、その夢に異を唱えた。

海になんて……夜の海で素潜りなんて……したこと、あったか？

点のような違和感が連鎖して線になる。夢と現とを隔てる境界線。何が、頭に引っかかったのか……そう、自動車だ。自動車の排気音。どこか遠くから聞こえてくる……。

その音がやおら変化する。アイドリングの低音へ、そして馬がいななきを終え、休息につくような空吹かしからの静寂。ドアが開き——閉まる音。

誰かが車でやってきて、いま車外に降り立った。これは夢じゃない。たしかに耳で捉えた本当の――

途端に理解した。ここは海の底じゃない。丸く光っているのは月じゃない。あれは――井戸の縁だ。もうとっくに夜は明けているのだ。そして車でやってきた誰かが、すぐ近くにいる……！

そこまで思考が繋がったところで、彼の中に何かが……戸尾耕司が還ってきた。

「……助けてくれ！」

いざ叫んでみれば、思いの外すんなりと声は出た。あるいは喉の痛みなど無意識に遮断してしまうほどに、ここが分水嶺であることを本能が理解していたのだろう。

夢と現とをではなく、死と生を隔てる天王山を。

「誰か！　ここだ！　井戸の底にいるんだ！　助けてくれぇ‼」

ただひたすらに。相手が、戻ってきた郁紀である可能性も忘れ耕司は叫んだ。

それはほんのわずかな、時間にすれば何分もない間のことだったかもしれない。しかし希望と絶望の端境（はざかい）に立たされた耕司にとっては、無限とも思える時間だった。

やがて頭上で真円（しんえん）を描いていた外光に、虫に食われたような欠損が生じる。満月にさしたその影は――井戸の中を覗き込む人物のシルエットを描いていた。

「戸尾くん？　生きてるのか？」

女性だ。慣れ親しんだ声ではないが、聞き覚えのある声ではあった。誰だろうか——なぜか容易には思い出せない。
「少し待っていろ。すぐに助ける」
影が消え、光が真円に戻る。ふたたび取り残されたのかという不安が膨れあがってパニックになりかかるのを、耕司は取り戻した理性の力で押さえ込んだ。——相手はたしかに言った。助けると。見捨てられたわけじゃない。
待つ間に、耕司はそこに置き忘れていたかのように失念していた自分自身の身体を思い出し、おそるおそる手足を動かしてみた。節々は痛むし、末端はかじかんで感覚が失せている。だがまったく動かせないような場所はない。憔悴(しょうすい)してはいるものの、今のところは五体満足で生きているようだ。
少し、とは言いがたい時間が過ぎてから、ようやく先刻の人影が井戸の縁に現れた。
「君、怪我はないか？　自力でロープを登れるか？」
「いや、ちょっとそれは……」
指先を動かすのがやっとという有様で、そんな芸当を演じる自信はなかった。
「ふむ——まぁ仕方あるまい。では、いったん私がそっちに下りよう」
声の後、結び目の瘤(こぶ)を作ったクライミングロープが井戸の中に投げ入れられる。

撥水加工までされた、妙に本格的なロープの確かな手触りに、耕司は今度こそ安堵を感じながら、ようやく心にできた余裕で疑問を懐くことができるようになった。――いったい誰なんだろう？　この救いの主は。

ロープが揺れ、光が遮られる。点灯したままのマグライトを肩に吊った人物が、慎重に結び目を伝い下りてきた。

やがて耕司と同じ泥の中に立ち、狭い井戸の中で対面した相手は――

「せ、先生？」

「気が付いていなかったのか」

それは耕司が予想だにしなかった人物だった。

T大付属病院の脳神経外科医、丹保涼子医師。病院で見た白衣とタイトスカートからは一変し、厚手の皮コートとデニムジーンズに、踵のない編み上げブーツという選択は、様々な状況を想定した、遊びのない出で立ちだった。ライトも携帯用ではなく、明かりの深度を自由に変えられる強力なLEDタイプのものだ。常用に耐えうる実用品である。

「……ひどい有様だな。ほら、こいつをやるといい」

丹保医師は耕司のなりを頭から爪先まで眺めて苦笑すると、ポケットからフラスクを取り出し、渡してきた。手指がうまく動かず、思わず取り落としそうになる。

「ゆっくり一口ずつ舐めるんだ。水は別にやるから、決して飲み込まないように」

「あ――ありがとう、ございます」
言いようからして、気付けの酒といったところか。何であれ、今はありがたい。フラスクの蓋を開けて一口含み――その途端、舌を焼く液体のあまりの強烈さに噎せかかった。
「な、何ですか、これ？」
「スピリタスウォッカ。気付け薬に良し、消毒に良し、浴びせてから火を点ければ、まあ効くような相手にはそれなりに効く」
淡々と、冗談とも思えない口調で嘯き、涼子は暗い笑みを浮かべた。そんな彼女を眺めて、あらためて耕司は当惑する。
これが――あの丹保涼子と同一人物なのか？
病院の診察室で見せた、理知的で物腰柔らかな若手医師の面影は欠片もない。まるで能面のような硬い表情と、射るように鋭い、それでいて突き放すような眼光。
暗い井戸の底だ。陰影も揺れ、女性を見るのに優れたロケーションではない。表情の違いは、そのせいだと無理に納得することもできる。だとしても、この豹変ぶりは何なのか？
「あの……先生はどうしてここに？」
「電話を寄越したのは君だろうが」
ぎろりと、まるで出来の悪い生徒の失言を咎めるように耕司を一瞥する。

「行方不明者を捜してる二人組のうち一人が妙な留守電を残したと思いきや、折り返してみればどちらも音信不通。何かあったと思うのが普通だろ？」
「……どちらも？」
それでも涼子の素早い行動はいまひとつ納得できなかったが、それよりも彼女の言葉の中に含まれた、もうひとつの情報に耕司は慄然とした。
「——津久葉にも連絡をとってくれたんですか？」
「したよ。だが、君と一緒で繋がらない。正直なところ、私はてっきり君も死体になってるもんだと思ってたんだがね」
「……」
そう、耕司は殺されかけたのだ。それも最後まで親友と信じていた男に。
怒りと悔しさがどっと胸の中に蘇る。許せない裏切りだった。裏切られた自分の愚かしさにも我慢がならなかった。
おまけに津久葉瑶の安否も不明だという。まさか彼女もまた耕司のように、郁紀の手によって
——
「まぁ落ち着け。ここで君がいくら殺気立ってみたところで始まらん」
さも鬱陶しそうな語調で涼子が嘯く。耕司の方を見ようともしていない。
「何かあったと思ったのなら、警察には届けてくれたんですか？」

「警察だと？」
関心ありげに井戸の内壁を眺めながら、涼子が冷ややかに失笑する。
「――そうか、君はまだ、そういう形でケリがつけられるものだと思っているわけか」
「どういう意味です？」
人もなげな涼子の態度に、半ば喧嘩腰で食ってかかろうとする耕司。そんな彼を涼子は手で制し、ライトの光輪で側壁の一角に注意を促す。
「戸尾くん、こいつには気づかなかったのか？」
「は？」
――見れば、明らかに石の質が違う部分があった。
涼子がさっきから耕司を差し置いて調べていたのはこれらしい。
「……？　……気付きませんでした。ずっと真っ暗だったんで」
「ふぅん」
涼子はさらに視線をじりじりと動かし、辺りを調べていたが、やがて石積みにできた亀裂のような隙間に目をとめた。手を平たく伸ばせば、大人が手首を差し込むこともできなくはない……そんな程度の隙間が空いている。
「君、いいところに落ちてくれたよ。瓢箪（ひょうたん）から駒、はたまた棚からぼた餅か」
陰惨な笑みとともに呟き、涼子はためらいもなく片手を石の隙間に押し入れた。

「それとも――藪をつついて蛇を出す、かな」
何か硬いものが噛み合うようなガリ、という音が石の奥で響く。
「……先生?」
隙間から手を抜き、石壁を手のひらで押し込める。さして力を込めないうち、石はゴロゴロと滑車の転がるような音とともに、奥へと滑り込んでいく。
「なるほど、こういう仕掛けか。やられたよ。前に来たときは気付きもしなかった」
「前にも……来た?」
聞き捨てならない言葉だったが、涼子は答えずに開口部を覗き込む。ライトの光が照らし出すコンクリートの通路が、耕司の位置からも見えた。
「私は先に進むが、戸尾くん。君はここに残ることを勧める」
何の温情もなく簡潔に涼子が告げる。耕司は、たったいま彼女が見つけた地下道と、井戸の外から吊られたロープを見比べた。
ほとんど精製アルコールに等しいウォッカの作用で、身体は随分と温まっている。指先も動くようになってきた。だが、まだロープをのぼれるだけの握力は戻っていない。かといって、またこの井戸の底で一人になるなど――考えただけで身震いがする。
「一緒に行きます。連れてってください」
「……忠告はしたぞ」

振り向きもせずに、涼子は開口部へと身を滑り込ませる。耕司もその後を追った。
「先日お会いしたときと、ずいぶん雰囲気が違いますね」
ライトの光を頼りに慎重に歩を進める涼子。耕司がその背に向け、皮肉をこめて言葉を投げる。
「君もずいぶんとくたびれているな。生死の境でもさまよったみたいに」
「……意地悪ですね。こっちが先生の地ですか？」
「さぁ、どうかな。どうだっていいことだろう」
ふいに涼子が足を止め、床に注目する。耕司も後ろから覗き込んだ。埃をかぶったロープの束が丸めてうち捨てられている。
「……何です？」
「先客の小細工さ」
涼子はロープを拾い上げ、確認してから耕司にも渡した。
「長さは私が使ったロープのほぼ二倍。途中に結び目があって、端は両方とも切断されている。この両端は繋がって輪になってたんだろうな」
「……え？」

「適当な場所にこいつを引っかけて、井戸の底まで下りる。その後、ナイフで輪を切って井戸の中に引っ張り込めば――まずこの通路に気が付く者は現れない」
涼子はライトで行く手を照らした。十メートルほど先に、唐突に終点があった。突き当たりに、閉ざされた木製の扉が見える。
「そうして、ここに逃げおおせたわけだ。やられたよ。まんまと騙された」
「先生、さっき、前にも来たっていうのは……」
「ああ。君や匂坂くんだけじゃない。私も以前、奥涯を追ってこの別荘に来た」
乾いた口調で語りながら、涼子はコートの前を開き、その裏地に吊ってあったものをズルリと引っ張り出した。
「ほかに出口がないとしたら――奴はまだ、あの扉の向こう側にいることになる」
はじめ、耕司はそれが棍棒(こんぼう)か何かに見えた。まさか凶器とは思わずに唖然(あぜん)と眺め、その正体が判ると、今度こそ愕然となった。
銃だ。



それも映画で見るようなスマートなものではない。水平二連銃身の猟銃を、銃床を切り落とし、銃身もぎりぎりの長さまで切りつめて隠し持てるサイズに縮小した、おそろしいほどに粗野で暴力的な代物だった。

「な――何ですかそれ！」

「ショットガン。十二番口径」

まるで吸い付けた煙草の銘柄でも問われたかのように、涼子は飄々（ひょうひょう）と答えた。

「もちろん、免状はない。所持も改造も違法だ。他に質問は？」

「そんなものを持ち出して、いったいどうするつもりですか」

涼子は肩越しに耕司を一瞥し、今まで以上に陰惨な微笑を見せた。

「奥涯の正体を初めて知ったとき、私はただの善良な一般市民だった。信号ひとつ、無視したこともなかったくらいさ。愚かなことにね」

女医は刺々しくも自嘲的な口調で、改造猟銃の銃口を剣呑（けんのん）に揺らしてみせた。

「あの時コイツがありさえすれば、私は奥涯をきっちり殺せていただろう。君たちがこんな災難に巻き込まれることもなかったかもしれない。その点は申し訳ないと思ってるよ」

「……」

「これから私がやることは、私がやり残した仕事の仕上げでもあるし、君とそのお友達が足を突っ込んでる有様に終わりをくれてやるための手続きでもある。その辺をよく理解して、余計な口

は突っ込まないようにしてほしい。いいね？」
耕司はただ黙したまま力なく頷くしかなかった。
意味がわからない。事態がどんどんと自分の手、そして意識を離れて転がっていくのに、その理由にまったく理解が及ばない。ただ一つわかるのは、他に手がないということだけだった。
やがて二人は、扉の前に行きついた。
左手でライトを、右手でショットガンを構えたまま、涼子は突き当たりの扉に歩み寄り、大きく深呼吸をする。
それから存分に体重を乗せて勢いをつけた踵の一撃で、そのドアを蹴り開けた。拍子抜けするほど安っぽい音を立ててドアは枠から外れ、奥へと倒れ込む。
舞い上がった埃がライトの光を浴びて、煙のように渦を巻く。
広い。軽く二十畳以上のスペースはあるだろう。中を一目見た耕司の印象は、物置部屋になった手術室、というものだった。
タイル張りの床に排水溝、真ん中にはこの場には不釣り合いな、脳神経外科手術も可能なマイクロサージェリーに対応した手術台が置かれ、一方の壁際にはホーローのキャビネットと薬戸棚、もう一方にはライティングデスクと本棚が並んでいる。
そこまでは耕司にも理解のできるような器物だったが、それらのデスクや戸棚の上に並び、置かれていた異様な品々は完全にその埒外（らちがい）にあり、どれひとつとして正体が知れなかった。

精緻な細工を施した飾り鏡。どこかの未開部族の民芸品のようなグロテスクな小像、仮面。吐き気を催すような色合いで織り上げられたタペストリー。赤ん坊の頭ほどもある水晶球……。
総じてアンティークの類、と見えなくもないが、いずれにも共通するのは、どこか見る者の生理的嫌悪を掻き立てる、悪趣味な意匠である。
どれもこれも、制作者がまるで後世に悪意だけを遺そうとしたかのような、そんな邪な意図を感じさせるものばかりだ。
いつか奥涯邸で見た類の稀覯書めいた書物もあちこちに積まれており、戸棚には羊皮紙なのかパピルスなのか、明らかに現代のものではない巻物のような何かを並べた一角もある。そして
――
そこかしこの壁には、びっしりとチョークか何かで描かれた意味不明な図形の数々が残されていた。二枚ほど並べられた移動式のボードにも、所狭しと奇怪な落書きめいた文様が描き込まれている。どれもこれも、眺めているだけで目眩がしてくるような――
「見るんじゃない」
耕司の隣で、涼子が鋭く断ち切るように言った。
「いいか、ここから動くな。絶対に何かに触ったりするな。目を惹くようなものがあっても見つめるな。まずいと思ったらすぐに目を逸らして自分の靴を見て、できるだけゆっくり数を数えろ。わかったか？」

「は、はぁ……」
涼子はライトの絞りを緩くして、部屋全体を照らせるように手近な台の上に置くと、ショットガンを仕舞い、さらに耕司を当惑させるような道具を取り出した。
高解像度のデジタルハンディカムと、缶入りのスプレー塗料。
左手にスプレー缶、右手にカメラを構える。そうして涼子はカメラの横に開いた液晶モニタを通して、壁や黒板の図形を軽く確認だけしながら撮影し、撮ったはしからそれらを黒のスプレー塗料で塗りつぶしはじめた。
「あの、先生。一体なにを……?」
「レッスン1。妙な図形やテキスト類は、絶対に読むな。見つめるな。直視もするな。調べるにせよデータだけ採って後回しが鉄則だ。現物はその場で塗り潰すか破壊しろ」
言われてみればたしかに、涼子は図形の類を絶対に直視せず、つねにカメラのサブモニタに映る画像をちらちらと確認するだけで動き回っている。言わんとするところは理解できたが、だからといって彼女の行動の真意がまるで摑めないことに変わりはない。
「いったいどういう……」
「ここまで深入りしたなら、後学のために聞いておけ。——水晶球や鏡など、とにかく反射するマテリアルでできたものも注意だ。この類のブツは、下手に壊すと厄介極まりない。とりあえず布でも被せるか、スプレーで封印しろ」

耕司はだんだんと空恐ろしくなってきた。
郁紀も異常だったが、この女医はさらに……常軌を逸しているのではなかろうか。
ウォッカでその場凌ぎの生気を取り戻しているとはいえ、依然、耕司は井戸の底の一夜で疲弊しきったままだった。不安はダイレクトに体調を掻き乱し、耕司は立っていられないほどの目眩と吐き気を催しはじめる。
「……とりあえず、こんなところか」
壁という壁に塗料を塗りたくり、室内に滞積した黴と埃の臭気をシンナー臭でかき乱したところで、ようやく涼子はやや安堵したように呟いてスプレー缶を投げ捨て、ハンディカムを収納した。
「奥涯って人は、どうなったんです？」
間近にあったテーブルの角で体重を支えつつ、耕司は涼子に訊いた。
「ん？　ああ。そこにいたよ」
涼子はライティングテーブルの上の書類に目を通しながら、さもどうでもいいことのように、部屋の片隅にある大陸風の衝立を指さした。
そこにいた——
その無感動な過去形の返答は、直截でこそないが雄弁にある事実を物語っていた。

とはいえ、この目で確かめずにはいられなかった。耕司はふらつく足取りで部屋を横切り、涼子が指さした衝立に――そこに描かれた、鱗に覆われた蛸のような絵柄は極力見ないようにして――近寄ると、その裏側を覗き込む。

「……ッ」

そこには、重厚そうな一脚の安楽椅子が置かれていた。その上に身体をもたれ掛かっている人物こそが、件の奥涯雅彦その人なのだろう。

閉ざされた地下室で人知れず涸らびていくうちに、教授の骸はかなり萎縮してしまったらしい。そのミイラは子供ほどの上背しかなく、在りし日の体格は、蛇の抜け殻のようになっている背広の寸法から察するしかなかった。

落ちくぼんだ眼窩と、だらりと垂れ下がった顎の中に闇が凝っている。その虚ろな空洞に比べれば、右のこめかみに空いた小さな穴は、むしろ慎ましいとさえ言えた。

椅子の手摺に載った右手には、自決の手段となったらしい、小さな回転拳銃が今なお握られている。涼子のショットガンを見た後では、いかにも頼りない銃だ。

さっき部屋中に塗料を撒き散らしている途中で、涼子はこの骸を視界の隅に捉えていたのだろう。それでも眉一つ動かさず平然と作業を続行していた彼女の心胆に、耕司は呆れるのを通り越してむしろ感心していた。つくづく、得体が知れない。

だがそんな彼女が現れなければ——耕司は運命の皮肉を自嘲しながら思った——自分もまた、教授と同じく冥界入りを果たしていたわけだ。ただし冷たい井戸の底で、彼のように座る椅子もなく。ミイラにもなれず。

皮肉らしく口角があがったところで、不意に視界が暗くなった。無理を押して動き回ったものの、スピリタスウォッカの加護もここまでのようだ。

遠退く意識の肩を摑み振り向かせることもできず、耕司は最後まで奥涯雅彦の虚ろな双眸と目を合わせたまま——床に昏倒（こんとう）した。

次に目を覚ましたとき、耕司は乾いた柔らかい感触に身を預けていた。

いくら黴と埃の臭いがしようとベッドはベッドだ。ありがたい。冷たい泥の中で朦朧（もうろう）と一夜を明かした後では、なおさらそう思う。

暖色の柔らかい照明。ランプだった。部屋の天上には電灯が吊られていない。

この殺風景な内装——思い出した。奥涯の別荘の地上階。井戸に落とされる前に調べていた部屋だ。

「お目覚めかい？」

声をかけられて首を巡らすと、涼子が壁際に寄せた椅子とテーブルに着いて何かを読んでいた。

テーブルに載せたランプの明かりを頼りに、彼女が検めているのは、地下室から引き上げてきたらしき資料の山だった。それらの中身に無表情に目を走らせながら、片手に持ったサンドイッチを時折、口に運んでいる。
「食べる元気があるようなら、そこに」
涼子はファイルから目も上げず、手振りだけでコンビニエンスストアの袋を示した。
「……どうやって、ここに？」
いくら彼女でも、女性の細腕で、耕司を担いだまま井戸を登れるとは思えない。
「本棚の裏に開かない扉があってね」
ファイルを調べ、なおかつサンドイッチを食べるのに差し障らないだけの間を開けながら、涼子は独り言のように話した。
「苦労して破ってみたら、別荘のボイラー室に出た。反対側は薄くモルタルを塗って隠してあったんだな。隠し部屋に機材を運び込んでからドアを塞いで、その後は井戸から出入りしていたんだろう。周到なもんだ」
「そこまでして隠さなきゃならないようなものが、あの部屋にあったんですか？」
「さっきまではね」
サンドイッチを食べ終えた手で、涼子はファイリングされていないルーズリーフの束を手に取り、軽く振って見せる。

「マッドサイエンティストは、世間に認められたがるのがフィクションの常だが――もちろん、世界中の研究者の、だれもかれもが学会で演壇に上ってリサイタルをやりたがるわけじゃない。自分一人で秘密に通じて、秘密に興じて、最後には自分の死体もろとも墓穴に持って入り、地獄で愉悦にひたるような……そういう真性の変態も中にはいるのさ」
その奥涯の秘密というのが何なのか、耕司にはいまだに皆目見当もつかない。ただ、地下の隠し通路で涼子が口にした言葉から察するに、それが郁紀に何らかの害を及ぼしたもの、という推論はできる。
「郁紀は――どうなっちまったんですか？」
もうその問いに答えてくれるのが誰であろうと構わなかった。
「地下の死体と、郁紀と、どういう関係があるんです？　先生はいったい何を追いかけているんです？」
「今それを調べてるところだよ」
涼子は冷たく言い放った。
「私が匂坂くんから聞いたところでは、彼は奥涯の親族から調査を頼まれている、という言い方をしていたが」
「……ええ。俺もそう聞きました。人から頼まれて、という言い方でしたが」
「そうか。そこは一貫してるんだな」

呟いて、涼子はまた別のファイルから数枚のルーズリーフを抜き取る。
「だが奥涯に類縁はないんだ。天涯孤独という奴でね。だから私は匂坂くんが嘘をついているものとばかり思っていた。だが——もう一つの可能性を考えるべきだった。彼は奥涯の親族を名乗る何者かに唆されていたのかもしれない」
一息ついてから、涼子は横目に耕司を一瞥した。
「——『沙耶』、という名前に心当たりは？」
「沙耶？　いいえ。誰なんですか」
「さて誰なのか、何なのか……読めば読むほど解らなくなっていく」
忌々しげに溜息をつき、ふたたび書類の束に視線を戻す涼子。
「確からしいことは、そいつが奥涯の研究の核にあるものらしい、ということだけだ。もし匂坂くんがこの沙耶と呼ばれるものとすでに深く関わっているのなら、彼はもう引き返せない所まで踏み込んでいる。そう見て間違いないだろう」
そう嘯く涼子の口調に含まれた断固とした響きに、耕司は背筋に寒いものを感じた。
「だとしたら……どうするつもりなんです？　郁紀を」
半ば答えが見えていた質問だったが、そう問わずにはいられなかった。そんな耕司の張りつめた口調が、また涼子の乾いた笑みを誘う。

「言ったよね。一年前、あの時手元に銃さえあればと。以来、朝も昼も夜も、今この瞬間も後悔し続けているんだ。この上、それを重ねる気はない」
「俺が警察に行けば、済むことでは？」
耕司の言葉に、しかし涼子は何の反応も見せなかった。まるで今の一言が聞こえていなかったかのように。
「郁紀がやったことは殺人未遂です。俺が訴えれば、あいつは犯罪者として——」
「目撃者は？　物証は？　匂坂くんが君を殺す動機は？」
粘り強く耕司が続けた言葉を、涼子が強い語調で断ち切る。
「なあ戸尾くん。君は警察の仕事についてひどく勘違いしてる。彼らの職分は正義を貫くことでも、市民の安全を守ることでもない」
「そ、そんなことは……」
「あるさ。事故や事件や……世間で起こる様々な不条理を、条理の範囲に収め整える。それが警察っていう役所の本質的な役割だ。そうしなければ、怖いからだよ。殺人にはそれが起こるに至った動機がなければいけないし、事故にはそれが起きるに至った原因がなければならない。そうでなければ、恐ろしいからだよ。人々の安心のためにあるというのはそういうことなんだ。事実がどうあろうと彼らには興味がない。特にこんな……絶対に条理に収められない不条理なんてものは」

「……そこまで決めつけることないでしょう。話してみなきゃ判りませんよ」
「そう、判らない。そこが問題だ」
嘯いて、涼子は新しいサンドイッチを包装から取り出した。
こうして話しながらも、彼女の注意は手にした資料にだけ注がれている。
「君が親友の手で井戸に落とされたと主張する。警察も馬鹿ではないから、鵜呑(うの)みにはしない。さらにいくつかの『真実』の候補を用意するだろう。たとえば、君が親友を陥れようとしてるケース。あるいは事件自体が誤解で生じたただの『事故』である場合。奥涯の死体や隠し部屋のことを話したところで、調べれば君が井戸に落ちたこととは別件であるとはっきりするだけだ。となると、いかにも警察が本気を出すような事件ではないね。そんな博打(ばくち)に君は身代を潰すまで賭ける気があるかい？」
「……」
何も言えなかった。果たして自分には、郁紀があんな真似をするに至るまでの経緯を筋道立てて、誰もが納得し得るように説明できるだろうか？　そもそも彼自身がまだ納得できていないというのに？
「そして、一番の問題は……」
耕司が言葉に詰まったところで、涼子が平淡な口調のまま畳みかける。

「その間にも、事態はどんどん悪化していくということだよ。君もわかっていることだろうが、彼は警察以上に馬鹿ではないんだ。身辺で火の手が上がれば手遅れになる前に行動を起こす。斯くして我々は匂坂郁紀を追いつめる機会を逸し、万事が振り出しに戻る」

サンドイッチを嚙む間だけ涼子は口を止めて、それから付け足した。

「私が奥涯を取り逃がしたように、ね」

「……」

固く重苦しい沈黙の中、涼子が資料の頁を捲る紙の囁きだけが、淡々と時を刻む。

「教えてください、先生――」

沈黙の重さに逆らって、耕司は押し殺した声で訊いた。

「あなたが警察を差し置いてまで処刑しようなんて思うほど、そこまで許し難いことって何なんです？　奥涯って人は、あの地下室で何をやってたんですか」

涼子はもはや当然とばかりの沈黙でその問いを無視した。だが耕司も今度は譲らず、黙々とルーズリーフの整理に没頭する涼子を見つめ、視線の圧力を与え続ける。

やがて精査に段落がついたのか、手元のルーズリーフを並べ替えると、涼子は束にしたばかりのそれを脇に置き、ようやく身体ごと耕司の方に向き直った。

「――なあ、戸尾くん」

涼子は静かな口調とは裏腹に、有無を言わさぬ眼差しで耕司を正面から見据える。

「君は、ここいらで降りた方がいい。那須か日光あたりの温泉でゆっくりと羽でも伸ばして、何もかも忘れる気になってから東京に戻ってきなさい」
「忘れる気になってから……？」
呟いた途端、耕司の中に、静かな、だが抑えきれないほどに猛る怒りが湧いてきた。
「青海は俺の恋人で、郁紀は俺の……親友で。津久葉だってどうしてるのか……。それを忘れて、のんびり湯に浸かっていられるとでも⁉」
「勘違いしないでくれ。これは提案じゃない。警告だ」
耕司の怒気を平然と受け流しながら、涼子が言い放った。
「おそらく、君の彼女と、一緒に訪ねて来た女友達が、君の人生と交わりを持つことは二度とあるまい。断言してもいい」
「津久葉は俺と話をしたんだ‼」
すでに耕司の声は叫びに近くなっていた。
「青海は……正直、もうあまり自信がない。でも津久葉は、電話の向こうで俺に助けを求めてたんだ！　だから――」
「もう、生きちゃいないよ」
「……ッ！」

「私が君を助けてからどれだけの時間が経ったと思う？　よしんば東京にとんぼ返りしていたとして間に合ったとでも？　誰もが君ほど幸運だなんて思わない方がいい」
涼子はかぶりを振って、冷然と続けた。
「遅すぎる。彼女もとうに死んでるだろうさ」
「あんたは……」
怒りのあまり、耕司の声は砥石（といし）のようにざらついていた。
「あの井戸で見つけたのが俺の死体だったとしても、何とも思わなかったんだろうな」
涼子は恐れ気もなく肩を竦める。
「山の夜だ。まさか生きてるとは思わなかった」
「……」
耕司は改めて、この丹保涼子という女性とコミュニケーションを取ることの虚しさを思い知らされた。
ここまで良心の基盤が食い違った人物とは語り合うだけ無駄だ。どんなに粘ったところで、耕司の言葉がこの女性の心に届き、揺り動かすことはないだろう。
耕司はベッドから足を下ろし、ふらつく足取りで立ち上がった。
「……どのくらい、俺は寝てたんです？」

「ざっと半日ばかり。消耗したあと速やかに休息が取れるってのは羨ましいね。若いうちだけだよ、そういう無茶が利くのは」
腕時計を見ると、時刻は午前四時。つまり涼子に救出された時点で、既に夕刻だったのだ。あの井戸の底でほぼ一両日を過ごした計算になる。様々な要素と幸運が味方したとはいえ、我ながらよく生きていたものだ。
とにかく、すでに土曜日が終わり今は日曜の早朝、ということか。たしかに瑶と電話口で話してから、かなりの時間が経過してしまっている。
涼子の用意した食料の中から、スポーツドリンクとゼリータイプの栄養食を二つばかり摑み取ると、耕司はドアに向かった。足元がまだ頼りないが、アクセルやブレーキの操作ならなんとかなるだろう。
「念のため訊かせてもらうが、どこに行くつもりだい？」
「東京へ」
涼子に負けず劣らず硬い口調で、耕司は短く返答した。
「まだ間に合うかもしれない。津久葉を助けに行きます」
「人の話を聞かない奴だな、君は」
「お互い様でしょう」

持ち前の嘲るような冷笑で耕司を見送るかと思いきや、涼子は深い溜息をついて、どこか疲れたようにテーブルに頬杖をついた。

「それはいいが、もう少し待ってみる気はないか？　こいつのどこかに――」

テーブルに積み上がった書類の山を顎で指して見せる。

「奥涯が『沙耶』と名付けたものが何だったのか、答えが隠されてるはずだ。少なくともそいつを突き止めて、対策を講じてから動くべきだと私は思う」

「津久葉が死んでると決めてかかってるあんたなら、当然そう思うでしょうね」

耕司とて、無策で事に当たるのが無謀なことはわかっている。だが一縷の望みに賭けるしかない。

それこそ――これ以上、後悔するわけにはいかないのだ。

「戸尾くん」

部屋のドアを開けて廊下に出かかった耕司の背中を、再度、涼子が呼び止める。

「拾いものだ。ついでがあったら、最寄りの交番にでも届けてくれるかい」

そう言って、涼子は書類の山の傍らに置いてあったものを無造作に投げよこした。

「これは――」

耕司の手の中に、ずしりとした金属塊の質量がかかる。

拳銃だった。地下で奥涯の死体が手にしていたものだ。

「あと四発入ってる。安全装置はない。引き金をひくだけで弾が出る。ただし、あまりあてにしすぎないことだ。残念だが奥涯は運が良かった」

「……？」

「こめかみを撃っても、楽に死ねないことがままあるそうだよ。もしこの先、自分を撃つ必要が出たときは覚えておくといい。確実なのは――こうだ」

涼子が人差し指を立て、銃口に見立てたそれをゆっくりと咥(くわ)えてみせた。

「忠告のつもりなら――」

「提案だよ。私のショットガンなら、頭ごと吹き飛ぶだろうから安心なんだがね」

もし耕司に普段の慎重な思考力があったなら、こんな手に余る代物は迷わず突き返していただろう。銃が決め手になるような結末など、破滅以外に有り得ない。そんな負け戦のつもりで彼は東京に戻るわけではないのだ。

だがすでに耕司もまた、涼子の属する領域――薄暮の闇へと、一歩。我知らずと踏み込んでいたのだろう。彼は理性より本能の呟きに従って、その小さくも致命的な凶器を何も言わずにポケットへと納めた。

たしかに耕司は瑶を救うつもりだった。その上で郁紀にも生きたまま罪を償わせるつもりだった。

だがそんな決意とは裏腹に、耕司の中の直感は——はっきりと迫り来る破滅の足音を聞いていた。

独り、別荘の玄関から外へと踏み出した耕司は、明け方の森の冷気を改めて痛感した。前庭の気温は刺すほどに冷たい。あんなにも冷たく思えた地中の泥も、吹きさらしの外気と比べればいくらかましであったという事実を、今さらながらに悟る。

どうやら狭い井戸の底にこもって流れのなかった空気は、夜の冷気を幾分か和らげていたようだ。もし外気が吹き込むようなロケーションで閉じ込められていたのなら、一夜を待たず、間違いなく耕司は凍死していただろう。

私道から前庭に乗り入れる形で、停車している車が今は二台。耕司のアコードの隣に停められた軽自動車は、丹保涼子のものだろう。

愛車の運転席に座っただけで、僅かながらも自分の縄張りに戻ったという安堵を耕司にもたらした。渇ききってかさついた喉に、まずスポーツドリンクを少量ずつ、それからゼリー少量を流し込んだ。丸一日半余を放置された胃袋が突然の補給を受けて痙攣し、あやうくえずいて吐き出しかかるのを、意志の力で抑え込む。エネルギーが要る。どんなに苦しかろうと、これから立ち向かう困難を乗り越えられるだけの体力だけは、どうあっても取り戻さなければならない。

必要量として自分に課しただけの食料を嚥下し、しばらくシートに凭れて人心地ついたところで、耕司はリアシートに投げ出してあった鞄のポケットから、古い予備の携帯電話を取り出した。
たまたま二つの電話を持ち歩いている時期だったという偶然が、まさかこんな形で幸運に転じるとは。
匂坂郁紀の登録番号を呼び出し、通話ボタンを押そうという段階になって、耕司の胸中を荒波のように入り乱れた感情が過ぎる。怒りと、絶望と、痛みと、哀切。いま親友にどういう感情を持って接すればいいのか、心が定まらない。
いずれにせよ、悠長に悩んでいる時間などはない。青海と瑶を救う望みがあるとするなら、すでに一刻を争う状況のはずだ。そうでない場合の可能性などは、いま考えるべきことじゃない。
意を決してボタンを押し、耕司はいつもより数倍長く、数倍大きく反響する呼び出し音に耳を押し当てた。
いま、郁紀のスマートフォンの画面は着信者の名前を表示していることだろう。それを目にした持ち主は、いったい何を思って電話を手に取るだろうか。
『……』
繋がった。
沈黙の向こう側から、驚きと、畏怖と、暗い怒りの情念がひしひしと伝わってくる。

「よぉ。そんなに意外か？　死人からの電話は」
わずかに溜飲（りゅういん）の下がる思いで、まず耕司は先手のジャブを放った。
『……驚いたね。どうやったんだい？』
返答する前に、耕司の脳裏に咄嗟の思いつきが閃いた。
「井戸の底に隠し通路があったのさ。まさか……知らなかったのか？」
言葉を切り、充分に効果的と思われる間を置いてから、言い放つ。
「逢えたぜ。奥涯雅彦教授と」
『……』
二百キロ余の彼方で、郁紀が息を呑む気配がした。これで主導権は完全に握った。さらに耕司は語調の不敵さをそのままに、真実を虚構で粉飾する。
「何もかも解った。お前たちは終わりだよ、郁紀。『沙耶』も含めてだ。何もかもバラしてやる。所構わずにぶちまけてやる。証拠はちゃんと揃ってるからな」
『貴様は……』
郁紀は怒りに我を忘れていた。声だけでもそれが解った。耕司にとっては伸るか反るかのハッタリだったが、まんまと功を奏したようだ。
だが一方で、郁紀が『沙耶』という言葉にこれほどの反応を見せたことに、耕司の中にまだ残っている友誼（ゆうぎ）の残滓が、心の深い場所で傷みに呻く。

〝匂坂くんがこの沙耶と呼ばれるものとすでに深く関わっているのなら――〟
凉子の言葉が、それを耳にした時よりなお酷薄に耳の中で蘇る。
〝彼はもう引き返せない所まで踏み込んでいる〟
余計な感慨に囚われている場合ではない。
「郁紀、青海と津久葉はどこだ」
相手に思考する暇を与えずに、耕司は会話の矛先を転じた。ここからが正念場だ。
「いいか、よく聞け。お前の出方次第では、譲るところは譲ってやる。これ以上誰も傷つけないというのなら、お前が俺にしたことは忘れることにする」
『……』
「この別荘で見つけたことも含め、全部だ。俺だってこれ以上、お前たちと関わり合いは持ちたくない。とにかく、青海と津久葉さえ無事に戻ればそれでいい」
『青海と、瑶ね……』
言葉尻を引きずりながらも、郁紀が懸命に思考を巡らせているのが判った。耕司のハッタリが効いているということは、彼にとってもここが正念場のはずだ。今度は彼が手札を見せる番だろう。
『けど、青海のことは本当に知らないんだ。彼女は僕の家まで来ていない。瑶は――』
郁紀は、どういうつもりか、そこでぞっとするような含み笑いを漏らした。

『瑶は……どうだかなぁ。彼女自身が戻りたがるかどうか』
「ということは、津久葉はそこにいるんだな？　無事なのか？」
所在と、ともあれ生きてはいるという言質を得たことの安堵にため息が洩れる。
だがそれは同時に、瑶のあのただ事ではない苦悶の様子が、郁紀と無関係ではないことをも意味していた。
あのとき、瑶もまた郁紀の罠に落ちていたんだろうか。そして一体、どんな仕打ちをされたのか。今はどういった状態でいるのか――
『彼女はね、念願叶ってようやく僕の持ち物になったんだよ。お前と青海がこそこそやっていたお膳立ても、ようやく実を結んだわけだな』
悪意を込めた郁紀の皮肉に、耕司の胸を暗澹（あんたん）たる感情が覆い尽くしていく。
自分はどこまで、この男に絶望すればいいんだろうか。かつての友の記憶は、どこまで貶められていくんだろうか。
知らずと涙が滲んでいた。だがそんな弱気を声に出さないよう努めながら、耕司は端的に要求を切り出す。
「とにかく津久葉を解放しろ。彼女の安全を確認したら、お前らについての証拠を破棄してやる」
『信用できるか。そっちが先に――』

「お前に選択の余地を与えるつもりはないよ。郁紀」
耕司は直感で引け際の感触を得ていた。これ以上手の内を見せればブラフを見破られる危険がある。
「あとでまた連絡する。それまでによく考えておけ」
返答は待たず、耕司は電話を切った。
郁紀はまだ耕司が栃木の別荘にいることを知らない。実際に耕司が彼の前に現れるのが何時間後なのか、何分後なのか、判断できずに混乱するだろう。その混乱が耕司に付け入る隙を与えてくれるかもしれない。
現実には——三時間。今から車を飛ばして東京に戻るには、それだけの時間が要る。
果たして今の耕司の体力で、それだけの時間の運転に耐え得るだけの集中力を維持できるかどうか、甚だしく不安ではあった。意識は鮮明になってきたものの、身体はまだどこか眠りから醒めきっていないのか、動作がワンテンポずれるような気怠い重さが両肩にのしかかっている。
弱気は禁物だと解ってはいたが、それでも耕司は、まだ数日前までの日常を振り切れないままでいた。
まだ殺すの殺されるのといった話題とは無縁の地平にあった頃。自分が他人の命を背負って奔走するような羽目になるなどと、想像もしなかった頃。そんな頃の自分が一刻ごとに遠ざかっていく気がする。

すべてが終わった後で、ふたたび元に戻れるのだろうか？　それともこの変化は、耕司と、耕司の生きる世界を不可逆に蝕み続けていくのだろうか。
すでに時間は味方ではない。今は一分一秒すら惜しい。
そうと解っていながらも、五分だけ、そう心に誓って、耕司はハンドルに凭れかかって静かに泣いた。
そしてきっかり五分後――アコードは、東京へ向け走り始めた。

匂坂邸　郁紀

暗転したスマートフォンの液晶画面を、僕はしばらくのあいだ眺めていた。
怒りはある。だがそれに勝るほどの冷たく重い感慨が、どこか頭上の彼方から僕の感情を圧迫して縛り上げていた。危機感――我ながら意外なほどに、僕はごく冷静に状況を受け止めていた。
「ご――しゅじん――さま？」
電話の最中もずっと股間で奉仕を続けていた瑶が、怯えたように顔色を窺ってくる。黙り込んだ僕が機嫌を損ねたものと勘違いしたのか、さっきまでよりなお一層、懸命に乳房を竿に擦り寄せ、献身的な舌遣いで僕の亀頭を包み込む。

瑶はなけなしの記憶を繋ぎ合わせるように、若干ながらも言葉を取り戻していた。そうと解って沙耶はペットに芸を仕込むような楽しみを見出し、昨夜から彼女に言語を教え直していた。
「おこら――ないで――ヨウ――がん、ば――る、から――」
許しを請う目で、瑶は息継ぎをする間も惜しんで、口での奉仕に身を入れる。
そもそも興奮はすでに僕の中から失せていた。中断させようかとも考えたが、瑶のすがりつくような眼差しと視線を合わせたところで、僕の中に別の思惑が形になる。
沙耶の計らいで、こうして僕は家族を得た。そのことが僕に、今まで意識もしなかった責任感のようなものを自覚させはじめていた。
僕は今、新たな匂坂家における家長であり、唯一の男でもある。僕は同じ屋根の下に棲まう家族を保護し、安心させ、幸福に生活させる義務がある。それを考えたら、こんなところで徒に焦りや狼狽を表に出していいわけがない。
「続けろ、瑶」
「は、い――」
瑶の豊満な胸に股間を預けたまま、僕は快楽を享受するのとは別の部分の脳を使い、置かれた状況を吟味した。
一昨日、あそこで耕司を確実に仕留められなかったという時点で、すでに僕はどう転んでも清算しようのない失点を負っている。悔しいとか、腹立たしいとか、そういう感情論はとりあえず

棚に上げておこう。
　つまりは、引け時なのだ。
　耕司がどの段階で井戸を出て、その後どれだけの情報を得て、どれだけの人間と接触したのか、もう僕には確認のしようがない。すでに問題がどこまで拡大しているか判らない以上、今からもう一度耕司を処理しても、安全を確保したことにはならないだろう。
　喩えるなら耕司とは、用水池に投げ込まれた毒瓶のようなものだった。今さら水から毒だけを濾し取るわけにはいかない。そういう事態になったらどうするか——
　考えるまでもない。そこの水を飲むのを諦める。
　これしかあるまい。新しい生活を始めるためには、他に飲める水のある新天地を探すしかない。
「ねー郁紀、誰と話してたの？」
　口寂しくなって階下の冷蔵庫まで行っていた沙耶が、好物の肋肉を頬張りながら戻ってきた。僕は不安や焦りといった感情を自分の中から追い出し、さも何でもない風を装って肩をすくめる。
「ちょっと厄介なことになりそうだ。耕司のやつが生きててさ」
「あらま」

緊張は一切交えずに切り出したおかげで、沙耶は怯えたり警戒したりするより先にまず呆気に取られて目を丸くした。
「なぁ沙耶、僕たち、この家を引き払った方がいいかもな」
「うーん、そうかぁ……」
顎に手を当てて視線を落とし、沙耶も考え込む。
「まぁどのみち、隣の一家が消えたのがバレれば、この辺りも騒がしくなってただろうしね。遅かれ早かれ、こういう日は来てたと思うんだ」
「……うん」
名残惜しそうではあったが、それでも頷く沙耶の顔に悲愴なものはなかった。
これでいい。そう僕は内心で満足した。今は、必要以上に彼女を怖がらせたくない。
「そんなことより、沙耶、もう――そろそろ」
「え？　あっ、駄目駄目！」
僕が促すと、沙耶は慌てて肋肉を放り出し、口淫に没頭していた瑶を押しのける。
「あうっ……」
「もぅっ！　郁紀ったら、瑶のおっぱいだと沙耶のときより硬くなる！」
「いや、それは……」
責める言葉とは裏腹に、沙耶は優しく情熱的に僕を口腔に迎え入れた。

「んぐ……ちゅ……ぱぁふ」
すでに瑶によって存分に高められていた僕の絶頂は、貪るような沙耶の舌と喉であっというまに臨界を越える。
「沙耶、もう――」
「……いいよ、たくさん――」
沙耶が言い終わるより先に、僕は彼女の喉の奥にまで突き入れて、息詰まるその表情を眺めながら欲望を解き放った。
「ぐっ、んぐっ……ッ！」
苦しげに呻きながらも、沙耶は僕の腰を放すまいと両腕を精一杯にひろげて抱え、喉の奥で逆流する精子を、噎せることなく上手に飲み下す。
「……ぷはぁ、ごちそうさま」
「絶対に独り占めなんだな。それ」
僕は苦笑しながらも、傍らに放置されて所在なげにしている瑶を見やった。
「当然でしょ。ほかの女にあげたりしたら承知しないんだから」
沙耶はむくれたようにイーッと歯を剝いてから、僕の下腹に頬ずりを始める。
「……本当に、嫌だよ？」

一転して弱気に訴える沙耶は、つくづく可愛らしい。僕は思わず彼女の髪に指を差し入れ、くしゃくしゃと掻き混ぜてしまう。

「大丈夫。……さ、じゃあ急いで支度しようか」

「うん！」

旅の荷物は少なくていい。車はとりあえず、鈴見家のものを拝借しよう。

口座の類も、できるだけ現金化してしまったほうが良さそうだ。それに武器。包丁よりは頼りになる得物が欲しい。

耕司は追ってくるだろう。奴はまだ瑶を救い出せると思い込んでいる。だが僕だって逃げ出すためだけにこの家を離れるわけじゃない。

相手の出方が判らない以上、一カ所に留まっていては防戦一方に立たされることになる。そんな愚を冒す気はないだけだ。

耕司。次に会うときこそ、この手で殺そう。

きちんと最後まで、あいつの息の根が止まるように。そう決意したところで総身に武者震いが走る。

殺意の味は射精感に似て、ひどく甘美だった。

別荘　涼子

ふと目を上げれば、窓からは既に朝日が射し込んでいいた。
涼子は眼鏡を外し、文字との格闘に凝り固まった目頭を揉んでほぐす。
夜ごとの悪夢よりもなお悪夢的な一夜だった。しかもだ、終わったわけではない。むしろ、ようやくとば口に立ったばかりだ。
案の定、奥涯雅彦が書き残した資料は素直に読み通せるような代物ではなかった。
奥涯が磁気媒体に信頼を置かない、古いタイプの記録者だったのは幸いだった。プログラミングによる暗号化が施されていたら、ハッカーの伝手を当たるしかなかっただろう。
さすがに肉筆の記録の全文を暗号化するほどの手間は厭(いと)ったようで、結果として奥涯が選択した手段は、じつに簡素なものだった。
地下室で見つけた膨大なファイルの内容は、学生時代のノートや論文の草稿といった紙屑が主体である。その中に散在する形で紛れ込んでいるルーズリーフが、本命の日記と研究記録だった。
初めのうちは涼子にも、ファイルの各所に挟まっているその記述が何なのか理解できなかった。
片面にだけ書き込まれ、裏が白紙のままのそのルーズリーフは、記述が行ごとに断絶していて繋がらず、全体としてまったく意味を成さない内容だったからだ。

だが意味不明の頁だけを選り分けていくうちに、自ずとカラクリは判明した。各行の続きは別のルーズリーフの同じ行へと続いていたのだ。

たとえば日記の場合、一日の記述をまず一行目から始めたら、行末まで書いた文章の続きは次行ではなく、次ページの一行目へと書き連ねていく。こうして二日目は二行目、三日目は三行目……という案配に記録を進め、頁の全行が埋まったところでそのルーズリーフを解体し、数冊のファイルの各所へとランダムに挿入して隠匿(いんとく)していったのである。

当然、ルーズリーフのノンブルに規則性はない。おそらくは対応する乱数表があるのだろうが、それが見つからない以上、ばらばらのルーズリーフを手探りで解き明かしていくしかなかった。

気が遠くなるようなその作業に、涼子は果敢に挑戦した。まず有象無象のファイルからルーズリーフだけを回収し、その一行目の文章に対応する前後の頁を逐一、探して並べていく。

日記は行数分の日数を書き溜めたところで、また研究レポートの方はおそらく三十枚を一区切りとして、奥涯は元本を解体したらしい。

復元が比較的容易なのは日記の方だった。日ごとの記述量が一定でないために、後半のページには空行ばかりが増えていくことになる。つまり、どこか一行にしか記述のないルーズリーフは日記の綴りの最終頁。あとは空行の多いページほど、末尾に近いものとして選別できる。

忍耐強い作業の甲斐あって、すでに日記の方は数冊分まで復元が終わっていた。

改めて通し読みしたその内容に、涼子はこれまでにも何度か経験してきたのと同じ絶望的な脱力感を覚える。

この諦観、秘められた事実を知った後に来る忌々しい無力感を、一度でも味わった者は以後の人生で繰り返し、同じ衝撃に打ちのめされ続けることになる。

なぜなら秘密とは連鎖するからだ。

おぞましい世界の真相をほんの片鱗（へんりん）でも垣間見てしまったら最後、後はゆっくりと捲れていくヴェールの裏側を、目を逸らすことも叶わず、ただ凝視し無力さを感じ続けるしかない。

いつか積み重なった狂気の重さに、理性が屈服する日が訪れるまで。

――生物とのコミュニケーションに成功。きわめて貪欲な好奇心。あきらかな知性体であることを確認。確認された発声パターンと反応動作については別途資料を参照。

――『彼』の知識欲はきわめて貪欲である。学習効率は驚くほど高い。反面、彼自身の自己顕示の欲求は皆無である。どうやら自我という意識そのものが希薄なもよう。人類とは明らかに異なる精神構造である。

——驚異的な帰納、演繹能力。偶々、彼の発音間違いに私が失笑しただけで、すぐさま彼は『駄洒落』という概念を発見してしまった。以来、私を『笑わせようと』学習済みの語彙を総動員し、ひっきりなしに『駄洒落』を連発している。

——人類言語による質疑応答を開始。彼は私を質問攻めにする一方で、私からの質問にはまったく回答できない。返答から察するに、どうやら彼が精神活動を開始したのは彼がこちら側の宇宙に実体化した後のことらしい。彼の故郷についての情報は一切なし。落胆する一方で、知性の発現からわずか一週間あまりの間にこれほどの知能を獲得した、彼という生物への興味は尽きない。

仮説：彼は自然発生的な生物ではなく、より高次の知性体によって設計された、いわゆる人工知能ではないか。だとすれば自我を持たないまま知識欲だけを発揮する彼の精神構造に納得がいく。彼は、異世界から送り込まれた探査ロボット的な存在かもしれない。

ざっと目で追ったそれらの記述に、涼子は何度目かの引きつった笑みを浮かべる。

これを狂人の妄想として、ただの空想の産物にすぎない戯言として笑い飛ばせるほどに自分が無知であったなら、どんなに救いとなるだろうか。

だが涼子は不幸にも、あまりにも多くを知りすぎていた。かつて奥涯が彼女の日常へと持ち込んだ怪異の数々を思い起こせば、彼がここに綴った内容のすべてが、鳥肌が立つほどの信憑性(しんぴょうせい)を持ち始める。

——彼の思考能力が人類を遥かに凌駕(りょうが)していることを確信する。

午前中、素数について解説し、ルーカスによるメルセンヌ素数の判定について説明したところ、彼はつらつらと暗算で結果を列挙しはじめた。私の知識で追いつく限り十番目の『八十九』までは正解だったが、彼はその先の値を苦もなく列挙していく。その後も彼は暗算を続け、私が目を離していた数時間のうちに、ふと見れば七十個あまりの値がメモ書きに残されていた。現在も、世界中のコンピューターを動員して探し求められているメルセンヌ素数だが、二〇一七年に五十番目が確認されて以来、新たな発見はないはずだ。

試しに値のうち幾つかを選出して私のノートPCに入力し、ルーカステストを行ったところ、そのすべてが正解だった。おそらく残りは確認するまでもないだろう。どのみち彼はこれまでに『嘘をついて虚勢を張る』という心理的活動を行ったためしがない。その点でも彼の回答は信用に値する。

これで発見のプロセスさえ公開できるなら、私は富と名声とを同時に得ることができるだろう。……むろん彼についての研究の秘匿性(ひとく)は、つまらぬ金銭などよりも遥かに重要なことだ。

彼は数学においてはコンピューターさえ凌駕する、まったく人智を超えた認識力を備えている、としか言えない。

——彼の希望により、新たな学習内容へと移行する。

あれほどの数学的適性を示しておきながら、彼の興味は社会学と自然科学に集中している（あるいは彼にとって、人類の理数系学問など退屈すぎるのだろうか）。

特に、生物の生殖と繁殖のプロセスについて彼が示した興味はこれまでになく意欲的なものだった。感情表現と言うべきものを持ち合わせない彼について適切な表現ではないかもしれないが、遺伝子という概念について理解するにあたり、彼は『興奮を覚えて』いたようだ。

もっとも、その感覚は彼自身にとっても当惑すべきものだったらしい。彼は彼自身にも説明できないその衝動を『本能』だと言い表していた。これはきわめて興味深い。彼はこの世界に来てから獲得した知性だけでなく、より深いレベルでの精神活動を行っていることになる。これを端緒にルーツを探ることが可能なら、彼という存在の正体を摑めるのではなかろうか。

備考：彼の発生地として候補に挙げられる位相および世界については別途資料『銀の鍵に関する考察』を参照。

――彼の部屋に書物を運び込むだけで一日を費やす。

すでに彼は私を介して獲得できる知識だけでは飽き足らなくなったらしい。これまでに彼が習得した語学力を鑑みれば驚くほどのことでもないが、それでも読破のスピードは尋常ならざるペースである。

その後も奥涯と『彼』との蜜月の記録は続く。涼子は脳裏に思い描いた。夜ごと井戸の底へと下り立ち、あの奇怪な実験室で、人ならざる何かと交渉を続ける老教授の姿を。

その光景は、かつて幾度となく涼子の眠りを苛み、悲鳴とともに夜の静寂を破らせた悪夢の光景と、示し合わせたように合致していた。

だが――そこから先の記述は、涼子の最悪の悪夢さえをも超越していく。

――彼がきわめて奇態な要求をした。食物と書物以外のものを彼が欲するのは、これが初めてのことだ。

あろうことか――生物の精子、である。

食物とは別にそれを胎内に吸収したい、というのだ。またしてもその欲求について『本能的衝動』という表現を使っている。

彼は自らを『精子を取り込む存在』であると規定し、それゆえに自分が『雌』であると主張しはじめた。今日からはあの生物を『彼女』と呼ぶ必要がありそうだ。

――『彼女』の演ずる人格模写、あれは果たして遊技としての模倣なのか？

人文関係の文献に傾倒しはじめた彼女の挙措は、近頃、驚くほど人間味を帯び始めている。

雌という自己認識。そして既に充分すぎるほどに蓄えた知識量。これらを基盤に彼女は人間としてのアイデンティティを模倣し、獲得しようというのだろうか？

彼女の笑い。怒り。そして今日私に見せた――涙。あれはあくまで我々の行動模写なのだろうか。あるいは、彼女はすでに……。

果たして『魂』とは、あらゆる知性が獲得しうるものなのだろうか。

私は今、生命の神秘よりなお深遠なる瞬間に立ち会っているのかもしれない。

――今日は彼女の誕生日。一年遅ればせながら、真心より贈り物を捧げたいと思う。

沙耶。

私の母親が飼っていた雌猫の名前だ。

幼少期の私にとってあの猫は唯一の友であり、また恋人でもあった。もし将来に子宝を授かるようなことがあるのなら、女の子には是非ともその名を与えようと、私は心に決めていたものの

だ。
誕生日おめでとう、沙耶。その魂を語り示すべく、君はそう名乗る資格がある。

——沙耶が自ら発見した『能力』は、日々驚くべき成果をあげている。

彼女が一種のアーティストであることは間違いない。果たして彼女がその体内で、ラットの精子を素材として創出したものはいったい何なのか？　現段階ではレトロウイルスの一種という解釈しかできない。しかもその逆転写酵素は、彼女の意図を余すところなく忠実に再現している。

沙耶の『作品』によって変身を遂げたラットたちの——いや、かつてラットだったものたちの——なんと美しく愛くるしいことか。

ともあれ、沙耶の体器官は多種族の肉体へと生化学的な干渉を行うべく特化しているのではないか、という仮説はますます強固なものとなった。

備考：彼女が分泌する数多の酵素と各作業肢の機能については、『生物学的所見』として別途に記載した。

涼子は昏い眼差しで、まだ未整理のままのレポートの山を見遣った。おそらくこの紙束が遠心分離された暁には、この日記で言及されている数々の『別途資料』が姿を現すのだろう。

生物学的所見——この『沙耶』なる存在と対峙する前に、是非ともその記述くらいは目を通しておきたいものだ。何の準備もないまま対決に臨むのは、どうあっても願い下げだった。

涼子は腕時計の針を確認する。午前七時。戸尾耕司がどこにも寄り道せずに車を駆ったのだとしたら、そろそろ東京に着く頃合いだろう。

あの青年。足の一本ばかりを撃ち抜いてでも、制止するべきだったのかもしれない。

今となっては、心底そう思う。

匂坂邸　耕司

目指す匂坂邸から二ブロックほど離れた位置にアコードを停め、耕司は静まりかえったその家を見据えていた。

燦々（さんさん）と降り注ぐ朝の光の中で、匂坂の家だけはまるで景色から切り抜いた穴のように暗い瘴気を漂わせているような——そう感じるのは、耕司の先入観のせいだろうか。

窓という窓は閉ざされ、中の様子は窺えない。いま郁紀が在宅かどうか、外から確かめる術はない。

おそらくは近隣の住人だろう。朝の散歩中らしい通行人がアコードの傍らを通り過ぎざま、ちらりと車内の耕司を一瞥していく。車の中に乗っていてもなお目を惹く有様なのだろう。無理もない——井戸の底で泥にまみれて一夜を過ごしたまま、風呂にも入らず着替えもせず、ホームレスと見紛うような格好である。

バックミラーを覗き込めば、見返してくるのは憔悴に窶(やつ)れた亡者の顔だ。無精髭も目元の隈も、これが自分のものとは信じがたい。

ここであまり人目を惹くと、不審者として通報されかねない。さっさと決断を下して行動するべきかもしれない。

アコードを徐行させて郁紀宅の前まで乗りつけると、素早く周囲を見回して人通りがないのを確認し、車外に降りる。もし邸内に誰かいるなら車の音は聞き咎められているだろうが、気にしたところでどうなるものでもない。耕司は足早に門を潜って庭を抜け、玄関のドアノブに手をかけた。呼び鈴も鳴らさなければノックもしない。そんな訪問の礼節を弁えるような段階ではない。

ノブは何の抵抗もなく滑らかに廻った。鍵はかかっていない。

耕司はドアに耳を押し当て、しばらく屋内の物音に耳を澄ませた。まるきり空き巣の行動だな、と我ながら情けなくなる。

――屋内に動きのある様子はない。改めて耕司は門の外を振り向き、誰も見ていないのを確かめてから、素早くドアを開けて屋内に身を滑り込ませた。
鼻を突く異臭。
だがすでに何が起ころうと驚かないだけの覚悟を固めている耕司は、さほど狼狽えることもなく、ただ警戒心だけを尖らせる。
かつてこの家には何度も訪れている。何度この敷居を跨いだか知れない。血の通った想い出はいくらでもある。それが――なぜ、奥涯の本宅や別荘に踏み込んだときと同じ不吉さを漂わせ、こうまで耕司の神経を逆撫でするのか。
まるで親しい故人の遺影を穢されたような怒りと哀しみが、耕司の胸を締めつける。
靴は脱がず、足音を忍ばせながら廊下を行く。
雨戸という雨戸を閉め切った屋内は暗く、各部屋の開きかけのドアの隙間から覗き見られる室内は闇に塗り潰されている。
車からライトを持ってくればよかった――そう後悔しかけたところで思い出す。ライトは井戸の外で郁紀に襲われたとき落としたままだ。今は栃木の別荘の裏庭に置き去りにされている。
胡乱な闇のどこかに、彼を脅かすものがあるのだろうか。井戸で果たせなかった目的を今度こそ果たすべく、郁紀が不意打ちの機会を狙っている可能性は充分にあり得る。慎重に前へ進む。

一階の廊下を一巡し、階段を上がって二階へ、そしてまた廊下だけを巡り歩く。ゆっくり慎重な歩調で注意深く。

だが誰かが背後に忍び寄る気配も、物陰から隙を窺う視線も感じない。何事もなく二巡したところで、耕司はこの家が無人であることを確信した。

気がつけば耕司の右手は、忍ばせた拳銃の冷たさに慰撫されている。危険なことはわかっていても、手を離しがたい。もしも郁紀と顔を合わせていたなら、自分はこれを抜く気でいたんだろうか。改めて、郁紀と再会したとき自分が一体どうするつもりなのかがわからなくなる。口汚く罵るだけか？　自首でも促すのか？　それとも――

やめよう。今考えることじゃない。

考えれば立ち止まってしまう。止まって考え始めたら、恐ろしさのあまり二度と再び歩き出せないほどに竦んでしまう。今はただ進むべき時だ。

ともかく、郁紀はいなかった。そして、『沙耶』も。彼との再会の形は、出会したときに自ずと決まるだろう。その瞬間にさえ迷わなければいい。

それにしても――この汚水溜めのような臭気は何なのか。郁紀が、耕司たちを日常から閉め出していた三ヶ月間の生活……彼がこの家で営んでいた暮らしとは、いったいどういうものだったのか。

居間に踏み込み、壁を手探りし明かりのスイッチを入れた瞬間に、その答えが耕司の眼前に晒された。
「……ッ」
彼は、どこまで行ってしまったんだろうか。
そこには、色彩の地獄が拡がっていた。耕司が、郁紀の内部に巣喰う狂気を目に見える形で見届けたのは、これが初めてだ。息を呑むのも忘れ、文字通り絶句する。
この塗装が昨日や今日のにわか作りでないことは、表面の乾燥の度合いから見ても明らかだった。これほどに錯乱した色彩に囲まれて、郁紀は幾夜を過ごしたのだろう。
そして、こんなにも明らかな徴（しるし）がありながら――なぜ、ここまで逸脱してしまうより前に自分は気付いてやれなかったのか。
壊れていく郁紀の正気のその軋みを、断末魔を、どうして聞き咎めて掬い上げてやれなかったのか。二人の友情はそんなにも益体のないものだったのか。
かつて友と過ごしたこともある部屋の、そのなれの果てに立ちつくす耕司の中で、この瞬間、怒りの矛先はすべて己の無力さへと向いていた。できることなら在りし日の郁紀に対して、独り内なる狂気と闘っていた友に詫びたかった。
自分には郁紀を救えたかもしれない――傲慢な思い上がりかもしれないが、ひとえに友愛の強さ故に――耕司はそう思った。

居間を通り抜け、引き戸の向こう側の台所に向かう。
さっきから耕司を苛む汚臭の中で、とりわけ気にかかっていたある種の臭気が、ここではよりいっそう強まっていた。
鉄気の混じったような……時間をかけて幾重にも重ね塗りされた、饐えた血の臭い。
きちんと手入れして使われているシンクを覗き込む。水を流しただけでは落ちきらない赤茶けた澱みが、うっすらとシンクの縁に残っている。
よりいっそう見誤りようのないものは、食器洗いの布巾の染みだ。汚しては洗い、洗っては汚しを繰り返し、生活の色を帯びる箇所。
だがいったい、毎日どんなものを拭き取るのに使っていたら、あんな色に染まるのだろうか。
おぞましい悪夢を覗く心地で、耕司はすぐ脇にある冷蔵庫を眺めた。それに触れる勇気を奮い起こすまでに、秒針が幾度かトラックの周回を重ねる。
意を決し、分厚い扉に手をかけて開けた。まず冷凍庫。それから冷蔵庫。
ファミリーサイズの広い冷凍庫にぎっちりと詰まっていたのは、形も大きさもまちまちな冷凍の肉だった。きちんとラップにくるまれて、霜を被っているそれらの塊は、何の肉かまでは判断がつかない。
だが冷蔵庫の方にあった肉は解凍済みで、すぐにも食べられるよう準備されていた。

チルドルームの奥から手招きするように差し伸べられた五本の指を、耕司は長いあいだ凝視していた。細くたおやかな女性の指。青白く変色した肌が蠟細工を思わせる。

どろどろと思考が凝る。ひどく寒かった。井戸の底よりも、意識の水底よりも。青海の手について考えていた。

何度もキスしたあの指の形が、今は思い出せない。

郁紀との電話の後に泣いて以来、耕司はもう泣くまいとは思っていたし、実際に涙は出なかった。だが耕司はそれを後悔した。あのときはまだ早かったのだ。涙で自分を鎮める必要があったのはここだった。

〝彼はもう引き返せない所まで踏み込んでいる〟

涼子の言葉が、再度脳裏に甦る。彼女は正しかった。

だが、引き返せないのは果たして郁紀だけなのか。丹保涼子はもう、引き返せないのだろう。奥涯雅彦は、引き返せなかったのだろう。では——自分は？

耕司は奥涯の拳銃を取り出し、その銃握を両手で祈るようにして包み込んだ。いま耕司の正気の在処を保証する、形ある確かな輪郭。もっとも慈悲深い破局の形。

彼はこれで匂坂郁紀を殺すだろう。

憎悪のためでなく——

断罪のためでなく——

この世が理性によって照らし出せる場所であることを確かめ、保証するためだけに、耕司はあの異物を抹消しなければならない。

深く息を吸い、それから吐いた。片手の五指を拡げ、目の前に翳して確かめる。大丈夫だ、震えてはいない。少なくとも、銃を撃つに支障がない程度には。

拡げた五指を、ゆっくりと握りしめる。

拳銃を再びポケットに仕舞うと、耕司は携帯電話を手に取った。

選択肢

・郁紀に電話する

・涼子に電話する

〈選択：涼子に電話する〉

携帯電話の着信が、作業を進める涼子の手を止めさせる。

着信者名義の『戸尾耕司』という画面の表示に、涼子はそれと気付かず安堵の吐息を漏らしていた。

「どうした」

『郁紀の家を調べました』
携帯の通話音質越しにもはっきりと、涼子は耕司の語調の変化に気が付いていた。打ちのめされ、疲弊しきった者ならではの、無味乾燥でざらついた声。
『郁紀は――人を殺してます。もう何人かも判らないほど殺して……。喰ってます』
「……」
初心者にしては、のっけから厳しい事態に直面したわけだ。
涼子は耕司の受けた衝撃の程を察して、その点に対してのコメントは差し控えた。
『青海も、それにおそらく津久葉も、もう生きてはいないと思います。先生……俺が間違ってました』
「だが君はまだ生きている。私は、君とも二度と話ができないかと思っていたがね」
慰めにはならないかもしれないが、それは涼子にしては上等な評価の言葉だった。
「ともかく、今度こそ間違うな。私が戻るまで動くんじゃない。君が相手にしているそいつは――一筋縄でいくような相手じゃない」
沙耶についての理解を深めつつある今、涼子は昨夜にはなかった確信を込めてそう断言できた。
『ですが……郁紀はもう、俺が生きてることを知ってます。隠し部屋のこともハッタリに使いました。どう助かったかは教えてませんが、ともかく奴は警戒してるはずです』

「そうか――」
耕司の行動は軽率だったが、いまさらどうなるものでもない。むしろその情報が郁紀に与えたであろうプレッシャーを、どう利用するか――それを考えた方が前向きだ。
まだ涼子の存在が露見していない点もワイルドカードと考えていい。使い方次第では切り札にもなる。
『先生の方は、何か手がかりは摑めましたか？』
「まだ充分とはいえない」
涼子は依然としてテーブルを占拠している、多量のルーズリーフを横目に答えた。
「そうだな――夜までには目処をつけて、夜半には東京に戻る。それまで君は余計なことをせず、どこかに潜伏していろ。いいね？」
『……はい』
生気のない耕司の声は、むしろ涼子を安心させた。
こうなった人間はそうそう、我を張ったり意地を通したりはしない。耕司は匂坂郁紀を葬ると決め、それを完遂するためなら、主義の異なる涼子の助力を得ることも辞さないことにしたのだ。評価に値する変化だった。
電話を切り、涼子はいまだ復元待ちのルーズリーフの束を暗鬱な気分で数えた。

時間はない。とても全貌を摑むまでには至るまい。だがせめて、『沙耶』と呼ばれる生物が持つ、直接的な能力や弱点については把握しておきたい。
ここから先は運にも恵まれる必要があった。久しぶりに祈るような気持ちで、涼子はまた紙束との格闘を再開した。

廃墟　郁紀

夏の事故からこのかたハンドルを握っていなかったこともあり、僕にとって自動車の運転はかなり危険な試みだった。
なにせ今の僕には、道が道に、車が車に見えていない。だがこの三ヶ月、それなりにこの知覚と折り合いをつけて生活してきた僕は、目に見える諸々の物体のうちどれが自動車でどれが歩行者か、そういった程度の判別はできるようになっていた。信号も灯る色はわからないが、色に対応した変化の傾向を覚え、周囲の車や歩行者の挙動からの類推を交えれば、ある程度の確からしさが保証できるまでにはなっている。
いずれも、安全運転を心がければ大事には至るまい。事実、いざ発進してしまえばそれほどの支障もなく、僕は後部座席に隠れ潜んだ沙耶と瑶を、無事に目的地まで運ぶことができた。

自宅を破棄した僕たちの逃亡先に、名案を出したのは沙耶だった。
病院に移動するよりも以前、奥涯教授の自宅で暮らしていた頃、深夜の散歩で見つけた廃墟があるという。
まだ宅地開発の途中にあるような郊外丘陵地の住宅街では、ほんの少し奥に分け入っただけで、ろくに人も通わないような辺鄙な森林と出くわすことが珍しくない。
沙耶がかつて『遊び場』にしていたのも、そういう日常のすぐ裏側に隔離された結界のような場所だった。在りし日には閑静な森の中で開業されていた、ある個人経営の療養所だ。閉鎖された後、そのまま地所の買い手もつかぬまま放置され、忘れ去られてしまったのだろう。
いったん沙耶たちをここに待避させたあと、すぐさま街へと引き返して諸処の準備を済ませ、僕はようやく戻ったところだった。
一目見た外観だけでこの廃墟は気に入っていた。さして広くない前庭には不法投棄された建材や粗大ゴミが山になり、体のいいバリケードになっている。ここならば自宅にいた頃よりもさらに他人の干渉はなさそうだ。あらゆる人間をおぞましい怪物として認知してしまう僕は、人間の生活感にもまた薄汚いヘドロの染みや汚臭を見てしまう。むしろこういった廃墟のように人間性の欠落した景観の方が、質素で飾りのない、心安らぐ空間に感じられた。

「ただいま」

沙耶たちが他人と勘違いして警戒しないよう声をかけてから、僕は彼女らが潜んでいる地下室へと下りていく。
「おかえりなさい。車、平気だった？」
「全然問題ない。一方通行の標識だけ注意して、スピードさえ出さなければもうどこを走っても大丈夫そうだ。で、そっちは？」
「ひととおり調べたけど、やっぱり、あれからずっと人が来た様子はないみたい。ここは安全だよ」
「そうか。ならいいんだけど」
こういった廃墟は暴走族の溜まり場になったり、ホームレスが居着いたりしてないものかと不安ではあったが、沙耶が言うのであれば間違いあるまい。
「たぶん、表に積み上げてあるゴミのせい？　あれ、普通の人間にはちょっと耐えられないんじゃないかな」
「ふぅん……」
僕には一向に気にならない、というよりむしろ快適に感じるほどだった。
「で、郁紀の買い物は？　いいの見つかった？」
「ああ、もちろん」

僕はちょっと自慢したい気分で、キャンプ用品店で購入した新しい得物から包装を解いていった。長さ一メートル近い、柄のついた薪割り用の斧だ。いちばん大きくて頑丈そうなのを買ってきた。
「刃渡り十五センチ以上のナイフは銃刀法違反だなんて張り紙してあるのに、その隣でこんなもの売ってるんだよ？　お笑いだよね」
頼もしい重さを両手で確かめ、バッタースイングで一振りしてみる。鋼鉄の斧頭が危険きわまりない威力で、ちょうど人間の首の高さを薙ぎ払う。
空を切る刃の荒々しい唸りを聞いて、床にうずくまっていた瑶が怯えたように小さく身を竦める。
「切れ味とか、どう？　瑶で試してみたら？」
「いや、それはちょっと……」
いきなり物騒なことを言い出す沙耶に、僕はさすがに面食らった。
「心配いらないよ？　今の瑶の身体なら、刃物とかの傷はわりと簡単に治っちゃうはずだから」
「だとしても、痛いだろ」
「ああ、そっか。うん、そうだね」
そこをきれいに忘れていたらしく、沙耶は瑶に向けて照れ隠しの笑いを向けた。瑶は何も解っていないようで、笑顔を向けられたことに単純に喜んでいる。

「でもさぁ、痛くされたときの瑶の声って、それはそれで可愛いよね？」
「いや……それでもやっぱり、人に斧で斬りかかる、ってのは気が退けるよ」
「そうなの？　じゃあ耕司サンは？」
「そりゃ、だって――」
問われるまでもないことなんだが、まだ沙耶には解らないらしい。
「――奴は人間に見えないからね。斬ろうが潰そうが平気なもんさ」
「ふぅん、そんなに違うんだ？」
「そうさ。人間には良心があるからね。どんなに憎い人間だろうと、人を殺すとなるとブレーキがかかるもんだ。そこが僕の勝算でもある」
「……本当に？」
そう確認する沙耶の表情はやけに神妙だった。どうにも彼女は、僕が耕司と直接対決することに不安があるらしい。
「体格じゃあいつが上だし、普通に喧嘩したんじゃ勝ち目は薄いかもしれないけどね。でも僕にとっての『化け物退治』が、あいつにとっては『人殺し』なんだ。こいつは大きいよ。あいつはきっと、最後の瞬間で隙を見せる」
「なんだか……不安なんだよね。そういう心理戦みたいなのは。確実じゃない、っていうか……」

いつになく真顔で床を見つめていた沙耶は、そう呟いてから、視線を上げてまっすぐに僕を見る。
「ねぇ、やっぱり私が狩った方が良くない？」
沙耶の気持ちは嬉しい。たとえそれが意味合いの上で僕を信じていないということになるとしても、彼女は我が身の危険より僕の身を案じてくれているのだ。
だが、その気持ちは僕だって引けを取らない。
「沙耶の腕力だとさ、瑶みたいな女の子なら楽にねじ伏せられるだろうけど、男を相手には厳しいと思うんだ」
僕の頭には、沙耶を鈴見に強姦（ごうかん）されたときの苦い記憶があった。
沙耶も僕の考えていることは察しがついたらしく一瞬だけむっつりと押し黙るが、すぐに食い下がる。
「でもね、あのおじさんも、最初の不意打ちは上手くいったの。大抵の人間はね、沙耶を見たら力が抜けて動けなくなっちゃうんだよ。病院でだってそうだった。平気で話しかけてきたのは、郁紀だけなんだから」
「……まぁ、一理はあるかもな」
いまいち僕には説得力がないが、沙耶の容姿がショッキングで、それに驚いた相手が戦意を喪失する、というのはあり得る話だ。鈴見が沙耶より優位に立ったのも、僕と同じ知覚障害を植え

付けられて、沙耶のことを可愛い女の子として認識するようになってからのことだ。
　だが、恐怖が人を弱くするばかりとは限らない。場合によっては凶暴化させて余計に手がつけられなくなるかもしれない。だからそういう威嚇も結局のところ、沙耶が言うような『確実ではない心理戦』と変わらないはずなのだ。
「じゃあさ、沙耶、こういうのはどうだろうか――」
　ふいに思いついた新しい作戦を、僕は沙耶に話して聞かせた。すると沙耶はそれまでの暗い表情を一転させて破顔した。
「それ名案！　うん、郁紀って頭いい！」
「大げさだよ。沙耶は」
　策略としての善し悪しではなく、沙耶にとっては僕の請け負う危険の度合いが減ったという点が評価対象であるらしかった。まったく現金なものだ。そこがまた可愛いが。
「で、いつごろ来るの、耕司サン」
「どうかな。向こうは向こうでなにか企んでるんだろうな。いずれ、奴の方から連絡があれば、ここに誘い出して仕留めるだけさ」
　耕司は必ず追ってくる。僕には解る。あいつが僕と沙耶を放っておくわけがない。
　逃げると決めたらただ逃げに徹してもよかったのだが、やはり、なるべく早い段階で耕司の存在は抹消しておくに越したことはない。だから奴からの接触があれば、それが明らかな不利でな

い限り、進んで対決に応じるつもりだ。
「せっかく人間一人分の肉が仕入れられるのに、ここだと腐らせちゃうね。冷蔵庫がないから」
「他の動物を誘う餌にできないか？　野良猫とかカラスをおびき寄せてさ――」
「それ危ないよぉ。万が一取り逃がしたとき、余所に持って行かれて人に見つかったら大騒ぎになっちゃうもん」
「そうか。それもそうだ」
人間というやつはとことん危険で、おまけに近寄るだけでも臭くて汚くて辟易するというのに……皮肉にも、食用としては最高に美味なのだ。家に残してきた分は、つくづく残念でならない。
「まぁ、この辺りまでくると森にも色々と棲んでるから、そんなに食事には困らないんじゃないかな」
「三人分だよ？　大丈夫かい？」
「まっかせて。これでも沙耶、狩りは得意なんだからね。郁紀と瑶のために、頑張っていっぱい捕まえてくるよ！」
「そうか。じゃあ今日からは沙耶が一家の大黒柱だな」
「うふふ」

僕におだてられて、片腕を小さく上げて得意げに笑う沙耶。こういうところは本当に子供っぽくて可愛らしい。

「……今度はどのくらい、のんびりできるかなぁ」

沙耶の声はごく普通にさりげなく、だから僕は危うく、その問いが行き着く先にある虚ろの響きを聞き流してしまうところだった。

「どのくらい――かな」

そうなのだ。いつまでも、ずっとじゃない。

どんなに安全な隠れ家と思えても、いずれは引き払う時がくる。僕が耕司の口を封じ損ねたように、ほんの些細な手違いで、僕らの生活は脅かされる。

この廃墟にも、そのうち肝試しに来るような馬鹿が現れるだろう。新しい宅地開発の対象になることだってあるかもしれない。

僕は沙耶とともに生きていくために、人と違う生き方を選択した。そんな僕らが安住の地を見つけることは――この人間ばかりが犇めく世界では、たぶん有り得ない。

それこそ世界の外側にでも逃げ延びない限り。

「――長い旅だと、思えばいいさ」

僕は沙耶を抱き寄せ、その細い両肩を両手でそっと包み込みながら、囁きかけた。

「どうせ人生なんて旅みたいなものなんだ。永遠に変わらない場所なんてない。時の流れを見送るか、自分自身が流れていくか、それだけの違いだよ」
「そうだね」
沙耶は笑った。
力のない、静かな笑い。
それは諦観かもしれないし、僕の言葉に対する妥協かもしれなかったが、だとしても安らかに満ち足りてはいた。
「それでも、ひとりぼっちじゃないし、だから沙耶は寂しくなんかないよ。郁紀も、そうだよね？」
「ああ」
後悔はない。
この腕の中に沙耶を抱き続ける――そのために代価が要るとしても、惜しいものは何ひとつない。
「それにね――」
沙耶は僕を励ますように、やや弾んだ口調で付け加える。
「いつかは、私たちが人目を忍んで暮らさなくてもよくなる日が、きっと来るよ。それは約束してあげるから」

その夢想のような言葉に、なぜか彼女は確信に近い自信を込めていた。
「それは、明日かもしれないし、ずっとずっと先の未来かもしれない。いつ、黴が来るのかは私にも分からないの。初めてのことだから。――ほんのちょっぴり、怖いけど」
僕には理解も及ばない、沙耶の謎めいた予言。
初めてのことじゃない。彼女は僕の想像を絶した奇跡を、これまでに何度も起こしてきたんだ。
「僕らにも……希望があるのかい？」
「うん」
晴れやかに頷く沙耶。
「きっとそれが、沙耶が郁紀に贈ってあげられる最後のプレゼント。――沙耶の、最初で最後の務め」

耕司

その日の時計の針は、まるで世界の終わりの日のようにゆっくりと、気を持たせて時を刻んだ。

持て余すほどに長い時間を使って、耕司は自分のアパートに戻り、シャワーを浴びて服を替え、久しぶりに満足な食事を摂(と)った。
この機を利用し、仮眠を取るべきなのは重々承知していたが、しかしどんなにリラックスしようとしても眠りだけは訪れなかった。心を鎮めれば鎮めるほどに、ただ神経が鋭く冴え渡っていくばかりだ。それに、長く自宅にいる危険を冒すわけにもいかない。
仕方なく、夕方から夜にかけての街を独り、そぞろ歩いた。
休日の繁華街は平和な賑わいに満ちていた。道行く人々の笑顔は眩しく、街灯はどこまでも明るく、一足早いクリスマス模様のショウウィンドウは、まるで世界中の幸せを寄せ集めて詰め込んだように華やかだった。
世界がこんなにも美しいのは、その背後に潜む狂気のおぞましさ故だろうか。
この輝きを享受することは、もう二度と耕司には叶うまい。そう思うからこそ、今、目に映るすべてがいつになく懐かしいのかもしれない。
長い長い時間をかけて、耕司は更けていく街の夜を眺め続けた。
すべてを、まるで今生最後に見る景色のように脳裏に焼き付けながら、初恋の人の弔報(ちょうほう)を遠い未来で聞くかのような、その取り返しのつかない彼我(ひが)の距離を嚙み締めた。
午後八時——耕司の古い携帯が鳴った。

丹保涼子からの着信だった。応答は短く、二人は落ち合う場所だけを申し合わせて通話を切った。

こうして、戸尾耕司にとって最後の、心安らぐ夜が終わりを告げた。

午前一時。待ち合わせた深夜営業のファミリーレストランに、涼子は予定よりも一時間ほど遅れて現れた。

「済まんね。色々と準備に手間取った」

小脇には何やら重そうなダッフルバッグを抱えている。その輪郭が崩れるほどにゴツゴツと突起を浮き出させている内容物について、耕司も問い質す気にはなれなかった。

謝辞とは裏腹に、まるで恐縮した風もなく涼子が席に着く。時刻が時刻だけに、広い店内はぽつりぽつりと卓が埋まっているばかりである。気怠げに注文を取りに来た店員をドリンクバーの注文で追い払った後は、誰も二人を顧みる者もない。

「――で、調べ物は終わりましたか？」

耕司はこれで三杯目になる、気付けの足しにと淹れたエスプレッソを半ば義務感で啜りながら、言葉短く涼子に問う。

「待たせた時間に見合う程度には、と思いたいね。なにぶん、確証を得るまでには至ってないんだが」

こちらはコーヒーを手にして戻り、涼子が答えた。

「郁紀も相当、焦れてると思います。こちらから連絡すると言ったきり、まる一日放置してますからね」

「そんなにも彼は君との接触を意識してるのか？」

「わかりませんが、『沙耶』の名を出してみたら、露骨なほど反応してました」

耕司は渇きの治まらない喉にもう一口、デミタスを運んで沈黙をやり過ごす。

「そうか。やはり、『沙耶』なのか……」

呟く涼子が浮かべた渋面は、明らかにコーヒーの不味さのせいだけではなかった。

「今なら丹保先生は、もう答えを知ってるんですね？　沙耶というのが何なのか」

「……」

半ば詰問に近い耕司の問いを、涼子はしばらくコーヒーに没頭するふりをして放置していたが、それもカップが空になるまでしか持たない韜晦だった。

「君は私の『警告』を無視してここに至る愚か者なわけだが——」

茶色い染みだけが残ったマグカップの底を凝視したまま、涼子は硬く乾いた口調で切り出した。

「それでももう一度だけ、性懲りもなく言わせてほしい。戸尾くん、君はここで手を引いてすべてを忘れるべきだ」

「性懲りもないですね」
かつて同じ忠告に怒りを向けた耕司は、今度は冷ややかな失笑で返答した。
「俺がまだ、先生や郁紀とは境界線を挟んだ反対側にいるとでも？」
「君はまだ、いちばん致命的なものまでは見ていない」
涼子がコーヒーカップから、視線だけを耕司に向ける。
「君にとってこの事件は、無二の親友が突然正気を失い、得体のしれない女と一緒に、どうやらソニー・ビーンの真似事を始めたという、言ってしまえばただそれだけの話でしかない」
ただ、それだけ……それは耕司がここに来て、やっとの思いで、ついには殺意を以てしか整理のつけられなかった事象に対し、あまりにも軽んじた言いざまだった。涼子の口振りではまるで、この恐ろしい悪夢がまだ、ほんのとば口にしか過ぎないかのようだ。
「それだけで充分でしょう。人が、何人も死んでるんです」
「そう思えるなら、やはりまだ君はそっち側に立っているってことさ」
そしてまた涼子は、相手に共感や理解を求めない捨て鉢な口調で、ぞんざいに結びをつけた。
「今ならまだ、時間が君の傷を癒す。君はまだ最後の一線を越えていない。だから、そっちにいるといい」
以前のように感情的になったりせず、耕司は涼子の言葉を噛みしめた。
最後の一線――たしかに郁紀はその向こう側にいる。

耕司はいま、自分の殺意を肯定できるほどに逸脱してしまったが、それでも郁紀を殺した後でその肉を食いたいとまでは思わない。そういう点で耕司はまだ、郁紀には及びもつかない。

ならば、涼子はどうなのか？　井戸で耕司を救ってからこのかた、さも知った風な口で耕司を揶揄し続けている彼女は、どれほど郁紀に近い場所にいるというのだろうか。

「……先生の傷は、俺よりも深いと？」

耕司が皮肉めかしてそう問う。涼子は問いには答えず、無言で肩をすくめてみせた。

そして機嫌が良いと言ってもよさそうな、静かな笑みを浮かべる。

「この銃はね、実家の父のものなんだ」

そう言って涼子は、ダッフルバッグの内容物が硬い輪郭を浮き立たせている箇所をコツコツと叩いた。

「こいつがガンロッカーから消えたせいで、父は書類送検の憂き目にあい、生きがいだった地元の猟友会からも除名させられた。申し訳ないと思ってるよ。私は両親にとっては自慢の娘なんだ。それがこっそり銃を盗み出すなんて想像もしてないだろう」

「そうするだけの必要が、先生にはあったと？」

「いいや」

ごくあっさりと涼子は首を振った。

「その頃にはもう、奥涯の件は一段落していた――少なくとも、私はそう思っていた。奴は姿を消したきり、もう二度と私の前には現れないだろうとね。この銃で何かを撃とうとか、殺そうとか、そういう差し迫った必要があったわけじゃない」

「じゃあ、なぜ――」

「眠れなかったんだよ。ただ、それだけなんだ」

それ以上に説明を続けるには、涼子としては言葉を選ぶ必要があったらしい。ぽつぽつと間を置きながら、話を重ねる。

「それまではベッドサイドに鉈を隠して寝ていた。夜、一人で部屋にいるのが耐えられなくてね。どんなに世界が底抜けに滅茶苦茶になっていこうと、悲鳴を上げて逃げ回る以外の選択肢が自分にはあるんだって――そう納得させるためにはね、部屋の中に何かひとつ頼りになる武器を置いておきたかった」

耕司には言葉もなかった。こんなにも重度の妄想性障害を抱えた人間が、天下に名だたるT医大で最先端の医師として通用しているという現実に、呆れるのを通り越して感嘆すら覚えていた。

「でも、それじゃ大した効き目はなかった。悪夢は日毎にひどくなっていく一方で。安眠するには鉈じゃ足りなかったんだ。それで父の銃を盗んだ。こんな風に銃身を詰めるとね、散弾がもっと広範囲に飛び散るようになって殺傷力が増すんだそうだよ。海の向こうではとびきりの重罪に

なるような改造さ。私はそれをクローゼットの奥に突っ込んで、それでようやく眠れるようになったよ。――そうだな、三日に一晩ぐらいはね」
そう言って、涼子はもう一度だけポンとダッフルバッグを叩いて見せた。
「銃はいいよ。本当に。相手に向かってぶっ放すも良し、いよいよ駄目ともなればヘミングウェイに倣えば良しだ」
猟銃で自死した文豪の名を出し、ニコリと笑う。
「先生は――専門家の治療を受けるべきです」
「端的な感想ありがとう。でもね、君だって他人事じゃなくなるよ。これ以上先に進むんならね。一線を越えるってのは、そういうことなんだ」
郁紀と対決する前に涼子と接触したことが、果たして正解だったのかどうか、すでに耕司にはわからなくなっていた。
郁紀を司直の手に委ねるつもりがないという点においては、彼も涼子も一緒だった。恋人とその親友を殺したのみならず、さらに遺骸まで辱めた郁紀には、裁判という形で情状酌量の機会が与えられることさえ許し難い。
どんな罪を背負い込むことになろうと郁紀はこの手で始末する。そうしなければ二度と自分に夜の眠りが訪れないであろうことを、耕司は理解していた。

共犯者がいるのは心強い。が、それは足を引っ張らない人物に限った話だ。謎を暴くと息巻いていた涼子が、その実、愚にもつかない妄想ばかりを頭に詰め込んでいたのだとしたら、いかにも背中を任せるわけにはいかない。

「――先生のことを、信用させてください」

決然とした意志を込めて、耕司は涼子に言い放った。

「先生をそこまで追いつめるほどのものが、奥涯っていう男にあったという証拠を。彼が何をしでかしたのか、すべて俺に見せてください」

「……やれやれ。本当に言うことを聞かないな、君は」

呆れ果てたと言わんばかりに涼子は苦笑してかぶりを振ると、ボストンバックの中から一冊の紙束を取り出した。表紙のない剝き出しのルーズリーフを、紐だけで綴ったものだ。

「一行読んだら、続きは次の頁の同じ行だ。まぁ、さわりだけでも読んでみるといい」

促されるままに、耕司は肉筆の記述に目を通し――三分足らずで読むのをやめた。

「怪奇ＳＦの草稿か何かですか？　罪のない悪ふざけですね。彼にはこんな子供っぽい趣味があったわけだ」

努めて言葉に失笑を交え、耕司はたったいま目にしたものを貶めることに腐心する。奥涯の本宅で見た骨の山や、郁紀の家で嗅いだ正体不明の悪臭については、意図して思い出すことを避けた。

「一年前、奥涯がうちの大学に持ってきた試料……サンプルも、その文章程度には突拍子のないものだったよ」

耕司の嘲りを完全に無視して、涼子は淡々と語りはじめた。

「奴は大学の機材を無断で使って、こっそり検査をしようとしたんだ。だがドジを踏んで露見した。そこから先はもう大騒ぎでね……」

「奥涯が使おうとした機材から察するに、奴はそいつをP３レベルのバイオハザードとして取り扱うつもりだったらしい。その程度の用心で充分だったのかどうかも知れたもんじゃないんだが……最低でも近隣住民を退去させるべき案件だったのは確かだ」

「まぁ、そこは偉い人たちが偉い人なりに頑張って、全部なかったことにしてくれたんだがね。その代わり、関係職員はキャンパスじゅうのネズミを一匹残らず駆除する羽目になった。ネズミと、かつてネズミだった何かをね」

かつて耕司と初対面の時に言葉を濁した奥涯雅彦の真相を、涼子は、合成音声のように淀みのない無感情で語り続けた。

「事の究明には、けっきょく皆が匙を投げた。奥涯が持ち込んだ試料が一体どういう起源のものなのか、誰にも突き止めることはできなかった。――まぁ結局、みんな賢明だったわけだ。理性は理性、戯言は戯言、そういう線引きを危うくしないで済む程度ってもんを心得ていた。でも生憎、当時の私はそこまで賢明じゃなかった。真実、ってものが知りたかったんだ」

そこでいったん言葉を切って、涼子はどこか躁めいた自嘲の笑みを浮かべる。
「あれこれ探って、暴き出して、私は奥涯が何をしていたのか知った。その程度で充分だったよ。鉈と添い寝するようになったのはその頃からだったかな。この世の理性ってものがどんなタガの弛んだ、穴だらけの、頼りない代物なのか理解するようになったのは、ね」
「……」
涼子が垣間見せる静かな狂気の迫力に気圧されてしまう。
耕司は逃げ場を求めるような心地で手元のルーズリーフを漫ろに捲り、適当な一文を目で追った。
『――この生物の体表を覆う筋組織は、繊維状ではなく網状、つまり一定方向ではなく全方向に向けて伸縮する強靭な組織である。このため刃物による裂傷や穿孔といった外傷はほとんど意味を成さない。いかなる方向にも自在に収縮する筋組織が、たちどころに傷を塞いでしまう――』
戯言だ。戯言でなければ何だというのか？　こんな内容を真に受けるなら、その他のすべて――世界の法則を統べる理屈のすべてが絵空事になりかねない。
「……じゃあ先生は、信じるんですね？　この内容を」
「疑う理由なんて、とっくの昔に見失ったからね」
涼子はふたたびダッフルバッグに手を入れた。今度彼女が取り出したのは、携帯するには大ぶりな、ステンレス製の魔法瓶だった。

「こいつが沙耶を倒す切り札だ。調達に手間取ったが、おそらく覿面（てきめん）に効く」
「……ついていけません」
限界だった。耕司は包み隠さずに吐き捨てた。
「沙耶が何だろうと、もうどうでもいいです。俺は郁紀を終わらせることができれば、それでいい。――あなたには、任せておけません」
「……そうか」
説得不能とみるや涼子は食い下がることもせず、至極あっさりとそう答えた。今この瞬間にも彼女は、彼女なりの良心から耕司を切り捨てたのだろう。
「いいだろう。君は匂坂郁紀を仕留めるために全力を尽くすといい。私もその機に乗じさせてもらうとする。君の邪魔はしないし、君が仕損じたときにはきっちりと私が帳尻を合わせてやる」
決然とした口調。だがそれでも耕司は、このパラノイアを患った女医を信じ切ることができない。
「あなたの持ち合わせている理由で、郁紀を殺せるんですか？」
「潔癖性なんだよ。私は。ああやって人の世界の埒外に隠れ棲んでいるような奴らが我慢ならない。奴らは寝室のゴキブリだ。枕元や、天井裏でかさこそ這い回る音を無視して眠れるか？　見つけ次第、殺して駆逐する。そうせずにはいられない。こいつは私の精神衛生上の問題だ」
そういう心情は分からないでもない。耕司の理由だって似たようなものだ。

殺人を正義で裁きたい、というのではない。青海と瑶の復讐がしたい、というのでもない。そういった理由ならば、耕司は一切合切を警察に委ねても納得できた。

それで決着とできないのは、相手があの郁紀だからだ。

友と信じた男に世界を覆されてしまったからだ。耕司はこの憤りを、裏切られた自分諸共にすべて破壊したかった。そんな想いが、いまの彼を突き動かす原動力になっているのは間違いない。

「さあ、それじゃあチェックメイトに駒を進めよう。匂坂くんを呼びだすといい」

耕司は頷いて、携帯電話を取り出すと、これが最後になるであろう親友へのリダイヤルを入力した。

すぐに通話は繋がった。

「待たせたな、郁紀。こっちの準備は整った」

『……耕司。今どこにいる？』

「お前のすぐ背後、とでも言っておこうか」

よほど耕司からの連絡を待ちわびていたのだろう。郁紀の声は何の抑揚もなくなるほどに乾ききり、固まっていた。

そんな憮然とした郁紀を、耕司は嗤うだけの余裕さえあった。ことによると涼子の躁的な嗜虐心が伝染したのかもしれなかった。

「で？　津久葉を解放する決心はついたのか？」

『ああ。背に腹は代えられない』

白々しい――郁紀の家の冷蔵庫を思い出し、耕司は胸の内でそう吐き捨てる。

郁紀、貴様は瑶のどこを喰ったんだ？　何の咎もなかった彼女を、貴様は牛か豚のように解体したのか？

『耕司、お前は集めた資料のすべてを証拠ともども持ってこい。その内容を見て納得できたら、僕らは瑶を引き渡す』

「いいだろう。場所は？」

『まずはＯ線のＹ駅まで来い。そこでお前が一人なのを確認してから、次に進む』

「念の入ったことだな」

『妙な細工はなしだ。四十五分以内に来い』

そう言い捨て、郁紀は一方的に通話を切った。

「……俺が単独なのを確認するまで、居場所は教えないつもりみたいです」

「ただの医大生にしちゃ心得てるな。感心だ」

まるで本気で誉めているかのような涼子を、耕司は視線だけで諫（いさ）める。

「私の車はここに置いていこう。戸尾くん、君の車のトランクに人一人が入る隙間はあるかい？」
「あると思いますが……正気ですか？　映画の見過ぎですよ」
「そんじょそこいらの映画よりは余程危険な冒険なんだよ。これは」
涼子は嘯いて、ダッフルバッグを抱えて席を立つ。
「……で、この店を待ち合わせに選んだのは君だったな」
「そうですが、何です？」
「コーヒーの責任を取ってもらおう」
そう言って涼子は、ウェイトレスが置き去りにしていった伝票を耕司の前に置いた。

指示された通りＹ駅に到着した後も、耕司はその都度郁紀からの電話を受け、二度、三度と目的地を変更させられた。
耕司が単独なのを確認するという郁紀の口上を、次第に自分は疑いはじめていた。郁紀は指示した場所に耕司が到着するのを時間だけで見計らって連絡を寄こしているのではないか。
そうは思っても、油断はできない。ここで下手を打って郁紀を警戒させたら、奇襲を企む涼子の思惑も水泡に帰すのだ。もうしばらく、涼子には狭いトランクの中で我慢してもらうしかなかった。

緑地公園、河原の河川敷、そして四度目の誘導は、まだ麓までしか開発の進んでいない丘陵地の、森に覆われた頂（いただき）だった。カーナビの地図では行き止まりの隘路（あいろ）しかないが、郁紀の話によれば、その突き当たりに古い療養所の廃墟があるという。

耕司の直感に、何か囁くものがあった。それまで引き回された深夜の緑地公園や河川敷も、たしかに人通りのない場所ではあったが、今度の目的地はあきらかに人が寄りつかない場所だ。

いよいよこれが、本命か。

勾配のきつい坂を上り、民家の姿が消え失せたあたりから、予感は確信に変わっていった。すぐ足元まで開発の手が迫っていながらも、まだ切り開かれていない森の闇は予想以上に深い。

密かに隠れ棲むには絶好のロケーションだ。あるいは、密かに誰かを抹殺するにも。

アコードのヘッドライトの中に、ふいに朽ち果てた門柱が幽霊のように立ち現れた。

どうやら終点のようだ。徐行で門柱の側まで車を寄せてから停車し、耕司はエンジンを切って森の静寂に身を任せた。

ほとんど間を置かず、携帯電話が着信を告げる。確かめるまでもなく、通話にする。

「着いたぞ」

『聞こえてたよ。ようこそ、僕らの新居へ』

ブラフでなければ、耕司の到着を感知できる範囲内に郁紀がいることになる。武者震いが耕司の背筋から肩までを駆け抜けた。

『入って来いよ。瑶も待ってる』

それだけ言って、通話が切れる。

ダッシュボードから昼のうちに新しく調達したマグライトを取り出し、ポケットの銃の重みを確認してから、耕司はドアを開け——タイミングを合わせてトランクのロックも解除する。涼子なら、いちいち状況を説明せずとも察しはつくだろう。

室内灯が点きっぱなしだと、ドアやトランクを閉めていないのが気取られる可能性があった。それに気付き、耕司は素早く室内灯のレンズカバーを外すと、マグライトの固い背で基盤を殴ってライトを潰した。

それからおもむろに車外に降り立つと、ことさらに大きな音を立てて運転席のドアを閉めてみせた。

さして広くない前庭には不法投棄された粗大ゴミが山になり、体のいいバリケードになっている。冷蔵庫や原付バイクなどは可愛いもので、コンクリートの瓦礫や石膏ボードの切れ端といった、明らかに業者が遺棄した産廃も堆(うずたか)く積み上がっている。ここまで人目を気にせずに好き放題できるというだけで、どれだけ人が立ち寄らない場所なのかは察しがついた。

横目に車の尾部を窺う。

薄く開いたトランクルームは何の動きもない。おそらく郁紀の注意が耕司だけに向いた頃合いを見計らって出てくる腹積りだろう。
思いのほか月は明るく、戸外にいる限り明かりがなくても足元に不自由はない。耕司は警戒を怠ることなく、ゴミの山を迂回しながら奥の建物を目指す。
傍らの廃棄物の中にはいったい何が埋まっているのか、辺り一面には薬品めいた不快な刺激臭が立ちこめていた。こんな場所には浮浪者でも近寄らないだろう。およそ人が居着くような場所ではない。雨風だけを凌ごうというのでも、他にいくらでも快適な場所が見つけられるだろう。
扉のない、虚ろな空洞だけになった玄関口に立ったところで、耕司はちらりと背後を顧みる。門柱のところに停めてきたアコードは、ちょうど粗大ゴミの山に遮られて建物から死角になる位置だった。
もしこの廃屋の中から郁紀が見張っていたとしても、トランクルームから這い出す涼子の姿は認められまい。ひとつ、荷が軽くなった気持ちで歩みを進める。
こうして日常から切り離された不吉な静寂の中に、ただ一人佇むというのは、いったい何度目の経験だろうか。奥涯雅彦の本宅も、別荘も、郁紀の家ですら。これまで踏み込んできた家屋は、それでも家としての体裁だけは整っていた。禍々しくとも、どこかに生っぽい、精気のようなものがあった。

だが今度は違う。いま夜の森の中に幽鬼（ゆうき）のように浮かび上がる壁と柱の構造物は、かつて人の営みがあった痕跡さえも削げ落ちた、完全な廃墟だった。
骸として喩えるのであれば、白骨だ。往年の面影など見る影もないほどに風化した、死そのものしかない場所。
行き着くところまで行き着いたのだ。きっと、ここが終着だ。
郁紀はどういう挙動に出るだろうか。耕司のことを亡き者にせんと企んでいるのは間違いない。
だが、どうやって？
マグライトを点灯しようとして、耕司は思い留まった。ここで手明かりを持ってうろつけば、歴然と位置を知らせて廻ることになる。
左手に、すぐ点灯できるよう構えたままのマグライトを掲げ持ち、同じように右手には拳銃を構えた。ここぞと思った瞬間には照らし出した場所に銃口を向けられるよう、常に銃とライトが同じ方向を向くように心がけながら、暗い廃墟の中へと踏み込んでいく。
目が慣れるまでしばらくかかったが、がらんどうの窓から差し込んでくる月光だけが頼みだった。あらゆる輪郭が薄ぼんやりと滲み、世界が濃淡でしか判別できない。
それでも、中に潜んでいる郁紀と条件は同じはずだった。

どちらが先に物音を立て、どちらが先に気配を察知するか。そういう気が遠くなるほど隠微（いんび）で危険な神経戦になる。

行く手の廊下の左右には、扉が開け放たれたままの、あるいは扉そのものが消え失せた部屋が並んでいる。それらの一室ごとに、耕司は戸口に身を寄せて気配を探り、無人であることを確かめながら、慎重に先へと進んでいった。

気が付けば、廃墟に入る前から鼻を苛んでいた悪臭がいつの間にか変質していた。より獣臭に近いような、生々しく有機的な汚臭。

これはまぎれもなく、郁紀の自宅に立ちこめていたあの——

〝——この生物の体表を覆う筋組織は網状つまり伸縮する強靱な全方向に裂傷や刃物に自在に外傷は筋組織がたちどころにほとんど意味を成さないないないないないない——〟

耕司は歯を食いしばり、狂人の手記を頭から振り払う。

あんなものを真に受けてどうする？　余計なことを考えるんじゃない……。

ぐじっ。

物音に、耕司は総身を硬くして廊下の奥を凝視した。

今の音は——誰かが、泥のぬかるみで足を滑らしたかのような、湿った音は——ずっと奥の部屋から聞こえた。

何かがいる。生きて、物音を立てるような何かが。

足音を殺したまま、左右の銃とライトをいつでも使えるように身構えて、耕司は音のした方角へとにじり寄っていった。

ぐじっ、ぐじっ、と——泥を捏ねるような奇妙な異音。近付くにつれてさらに、今度はひゅうひゅうと、歔めいた苦しげな息遣いが聞こえてくる。

郁紀だろうか。いや、有り得ない。奴は今も息を殺して待ち伏せをしているはずだ。こんなにも不用心に物音を立てるわけがない。

進むにつれて、コンクリートと建材の隙間から漏れ聞こえてくるだけだった異音が、いつしか直に耕司の耳に届くようになっていた。

『……ゥ……ゥ……ゥ……』

耕司はとある部屋の前に立っていた。それまで通り過ぎてきた部屋と同様、ねっとりとした液状の闇に満たされた一室。だがその部屋の住人は闇だけではなかった。明らかに何かが、いる。

まるで手負いのように、息をするだけでも苦しげな、どこか啜り泣きにも似た声を——

啜り泣き？
「……誰だ？」
押し殺した秘め声で、耕司は闇の奥に問いかけた。声を出して居場所を明かすくらいなら、いっそライトを点けても同じことだったが、なぜか耕司は、そこまで不可逆的な行動を取ることに躊躇いがあった。
啜り泣き――そうだ。
最後に聞いた『彼女』の声は――電話口の向こうの――啜り泣きで……。
ぴたりと、まるで息を詰めるように、喘息めいた呼吸音が沈黙する。そして――
『――コゥジ、グン？』
声ではない、断じて人間の声ではない異音が、冒瀆的なほど言葉めいたイントネーションで闇の中に囁いた。
悪夢の中の妄想でしか為し得ない連想で、その異音と、直感とが結び合う。
「……津久葉？」
そんなわけがない。
あの津久葉瑶が、こんな声を出すわけがない。こんな臭いを放つわけがない。
こんな音を立てるわけがないのだ。
『――コゥジ、グン――ォネ、ガィ――コ、ロ、シテ――』

瑶でないとしたら、なぜ耕司の名を知っている？　なぜ耕司に向けて訴えかける？
だがそれでも、断じて瑶であるはずがない。彼女は人だ。今この闇の奥にいる何かのように砂利を巻き込んだ泥のような音を立て、這い回ったりするわけがない。
『――イタ、イノ――クルシ、ィノ――ゴノ、ガラダ、ズッド――ダズゲ、デ――ゴォジグン――』
蠢くそれは耕司の方へと近寄ってきた。
手遅れになる前に、取り返しがつかなくなる前に、左手のライトを点けるべきだと耕司の理性は主張していた。さもなければ踵を返して逃げるべきだと。
だが耕司はそのどちらを受け入れることもできず、コンフリクトを起こしエラーコードを吐き続けていた。
ただ闇の中の不定型な輪郭へと、空しく問いかけることしか――
「津久葉なのか？　なぁ、おい……まさか、津久葉なのか？」
『――ジナゼデ――モゥ――ィヤ――ォネガイ――ゴロジデェェ――』
ぬめり粘つく熱く柔らかな質量が、耕司の爪先の上に乗る。
意志とはまったく別系統の反射的な動作で、耕司はライトを点灯し、足元の『それ』を照らし出した。
白い光が、総てを暴く呵責（かしゃく）ない真実が、最後の一撃となって耕司の理性を破砕した。

恐怖にショートした思考が、『銃』と『引き金』という二単語の間で永久ループに陥り凝結する。

もっとも従順に反応したのは右腕とその五指だった。

親指が握り、残り三指が支え、最後の人差し指が引き金を絞る。

予想を上回る閃光と轟音。ただ一瞬だけひらめいた圧倒的な破壊力は、だがその一瞬後にはもう再びぬばたまの闇に呑まれて消える。

そして銃声の残響に痺れかかった耕司の耳に――ふたたび闇の底から届くか細い声。

『……ィ……タ……ィ……』

「うわぁっ、わあああぁッ!!」

耕司は本能のままに悲鳴をあげながら、ただただ引き金にかかった指を屈伸させた。

さらに三発、闇と閃光と沈黙と爆音が交錯して入れ替わる。当然、狙いもへったくれもないが、どのみち狙わずとも対象は耕司のすぐ足元、外しようのない至近距離である。

残弾数についての涼子の忠告は、とうに思考の外側へと吹き飛んでいた。再び辺りに闇が戻った後も、耕司は取り憑かれたようにトリガーを引き、とうに使い勝手の悪い鈍器でしかなくなった空の銃を、ガチガチと空しく作動させ続けていた。

パニックのあまり凍りついていた下肢が、今になって二本足で自立することの難易度の高さを思い出したかのように、もつれて後方へとバランスを崩し、耕司の尻をざらついた床に叩きつけ

る。
　それでもまだ、耕司は銃の空撃ちを続けていた。それ以外に一瞬前にライトが捉え、この目が捉えてしまったものを消し去る方法が思い浮かばなかった。取り落としたマグライトは床に転がり、あらぬ方向を照らしている。
　四発の弾丸は、たしかに標的を捉えていた。それが人であれば、四回死ぬだけの破壊をその身体にもたらしているはずだが、しかし四発きりという話でもある。
　つまり今、闇の底に一人座り込んでいる自分は、すでにもう丸腰なのだと――そう耕司が理解したその時だった。
　重く冷たい腐肉の塊が、津波のように耕司の上にのしかかってきた。
『イタイイタイイイタイイタイイタイイタイイイタイイタイイイタイイタイイタイイタイイタイイタイィィィィィィッ!!』
　もはや悲鳴さえ形にならなかった。耕司は仰向けに床に押し倒され、恐怖に喉を詰まらせたまま、自分に覆い被さってくる『それ』に必死で抵抗した。
「ひ……ひ……ひぃ……ッ!!」
　左手一本で顔を庇い、右手はありもしない救いを求めるように出鱈目にあたりを掻きむしる。その手に、もったりとした、大質量の熱く柔らかな肉が触れる。

すでに耕司の思考力は、原始的恐怖だけを残した野生動物のそれと同程度にまで退行していた。

あるいは、だからこそ——いよいよ最後という瞬間に右手が掴んだ硬い感触を、直感で武器と認識できたのかもしれない。

腕にありったけの力を注ぎ込み、耕司は自分の上に乗っているそれを、右手に掴み取った質量で振り払う。

グシャリと水枕を叩くような音をたてて、襲撃者は耕司の上から転がり落ちた。

身体の自由を取り戻すやいなや耕司は膝立ちになり、新たな得物を救いの護符のように両手で掴む。掴んでから初めて、それが錆の浮いた鉄パイプの断片だと気が付いた。

『……ィ……ィ……ィ……』

まだ呻く。まだ啜り泣きの声が。

「おああああぁぁッ‼」

悲鳴と怒号のない交ぜになった絶叫を上げながら、耕司は鉄パイプを振り上げ、床に蹲(うずくま)っているそいつに叩き下ろした。

分厚く柔らかい肉が衝撃を吸う、身の毛もよだつような感触が両腕に伝播し、湿った音が耕司の耳にまで届く。その音が、感触が、耕司の脳裏を生理的嫌悪で塗りつぶし、ただ一色の破壊衝動で染め上げる。

「くそぉォ！　畜生ォォォ!!」

銃の空撃ちと同じく取り憑かれたような反復で、耕司は鉄パイプを振りかざし、滅多打ちにそいつを叩きのめす。

十回目の打撃で声が止み、二十回目で蠕動が止まり、三十回目からは肉を打つ手応えがビシャビシャとより水っぽい音に変質しはじめていた。

耕司がようやく打擲（ちょうちゃく）の手を止めたのは、彼が打ちのめしていたものが何であれ、すでに生命のない骸に成り果てていると――そう理解できるだけの思考力が彼の中に戻ってきてからだった。

手の中で、血なのか体液なのか判然としない汚物にまみれた鉄パイプが、ずっしりと重くなる。

〝君はまだ、いちばん致命的なものまでは見ていない〟

脳裏に蘇る涼子の声。今はじめて、耕司は彼女の慈悲深い配慮を理解できた。彼女と同じ醒めた視点で、かつての自分の愚かしさを嘲笑うことができた。

戸尾耕司として積み重ねてきた二十年間の人生の記憶――それが尊いと、愛おしいと思うなら、こんな場所まで来てしまってはならなかったのだ。

活性を失い、今やずた襤褸（ぼろ）の巨大な粘菌のように床に拡がったそれを見る。

絶望の黒い炎が、耕司の中のすべての感情を焼き尽くし、焼き尽くしてもなお燃えさかり、やり場のない熱量となって沸々と血を滾らせる。耕司はその熱を怒りとして認識することにした。

——そう、いま彼はまぎれもなく怒っていた。憎んでいた。彼に真実という名の毒を盛り、彼の魂の無垢なる部分を根こそぎ鏖殺した者を。そして憎悪の虜となった耕司は、すぐ背後まで忍び寄っている何者かの気配と息遣いを感じ取った。

振り向きざまに、ありったけの殺意を込め、右手の鉄パイプを横薙ぎに一閃させる。

不意打ちを狙っていた相手は反撃を予期していなかったらしく、たじろいで大きく後ろに跳び退いた。床に落ちたマグライトの光の中で、いびつに歪められた影絵が踊る。

惜しくも空を切った鉄パイプを構えなおして、耕司は襲撃者と対峙した。

「郁紀……」

これほどの怨嗟の声で、かつての親友の名を呼ばわる日が来るとは、耕司自身も思ってもみなかった。

「おいおい、今の一振り……まるっきり手加減なしかよ」

この期に及んでなお、郁紀は笑っていた。その手に構えた大振りな斧さえも、何かの冗談だと言わんばかりに。

「参ったなぁ。正直なとこ、お前はもう少し迷うもんだと思ってたんだけど」

「迷う、だと？　俺が？」

耕司もまた、嗤った。嗤わずにはいられなかった。

「貴様、青海をどうした？　津久葉にいったい何をした？　それを考えてもまだ俺が、貴様を殺すのに迷うだと？」

「……そいつは言いがかりのつけ方が逆だよ、耕司」

郁紀は声のトーンを落とし、暗鬱とした眼差しで耕司が撲殺した肉塊を見遣った。

「耕司の分際で、僕の瑶をひどい目に遭わせやがって……瑶の十倍は痛めつけてから殺してやる。覚悟しろ」

郁紀が力任せに振り下ろしてきた斧を、耕司は鉄パイプで受け止めた。手首から肩にかけてを重く硬い衝撃が駆け抜ける。

「ぐぅ……ッ‼」

怒りの余勢を駆ることで、耕司はその斧を押し返した。だが歴とした打ち物である郁紀の薪割り斧と、たまたま手にしただけの耕司の鉄の端材とでは、その威力と操作性とに数段の差が否めない。

攻撃を受け止め、あるいは受け流すたび、腕が痺れる。鉄パイプの表面に浮いた赤錆が削り取られて宙に散る。

「このォッ！」

上段から振り下ろされた斧を受け止めたところで、耕司は相手が斧を引き戻すより先に鉄パイプで押し返し、郁紀の姿勢を後ろに崩すことに成功した。
郁紀が仰け反りながらもバランスを取ろうと踏みとどまったところで、耕司はそこを狙い、ローキックで外腿を強烈に蹴りつける。
「ぐっ！」
呻いて後退しながらも、追い討ちを防ごうと出鱈目に斧を振り回す郁紀。だが戦いのペースを奪還した耕司はあえて深追いせず、打ち込みで痛む手と握力の回復に努めた。
「うおぉッ！」
体勢を立て直し、郁紀が怒声とともに反撃に出る。だが蹴られた右足の傷みは俄には引かず、その影響で振り下ろす斧のスピードは鈍っている。耕司は落ち着いて鉄パイプで刃先を逸らし、避けることに専念した。確かに彼我の武器でいかんともしがたい性能差があるが、当たれば致命的なのはどちらも変わらない。ならば、郁紀の薪割り斧の持つ重さそれ自体を利用すれば良いのだ。
「死ねッ！　死ねぇッ‼」
裏返った雄叫びとともに刃を振りかざす郁紀。だが勝負はすでに冷静さが勝機を掴む段に入っている。郁紀が何度目かに大きく振りかぶったところで、耕司はその動きが充分に衰えているのを見計らい、左腕を伸ばし、一気に踏み込むと斧の柄を摑んで止めた。

「……ッ!?」
そのまま、がら空きになった郁紀の左脇に鉄パイプを叩き込む。
「がふッ……」
メキリ、と肋の折れる手応えがあった。
たまらず膝をつき、うずくまる郁紀。その無防備な後頭部を見下ろしながら、耕司は自分でも驚くほど醒めた心境で、鉄パイプに左手を添え両手で高々と掲げた。
左足首に何かが巻きついたのは、そのときだった。
「な……!?」
予期せぬ感触に狼狽えた瞬間、柔らかくも強靱なそれは右足にも絡みつき、耕司は抵抗する暇もなく床へと引きずり倒された。
咄嗟に身体を振り、背後の見えざる敵に鉄パイプを振り下ろそうとするが、その右手もまた軟体の圧力に搦め捕られてしまう。ズボンの生地越しには判らなかった、冷たい粘膜の感触を剝き出しの手首に感じて耕司は総毛立つ。
さっきの化け物が、まだ……!?
「……いいぞ……沙耶」
郁紀が、痛みに眉を寄せながらも、勝利を確信した残虐な笑みを浮かべて呟いた。
沙耶――これが――!?

耕司は死に物狂いでのたうち、四肢に絡まる不気味なそれを振り解こうとした。
だがその軟体の緊縛は次から次へと数を増し、まるで群体の蛇のように耕司の自由を奪っていく。
「うあぁ――ぐぁ――うわぁぁぁッ⁉」
もはや耕司は半狂乱だった。
津久葉らしきもの、どころではない。自分を引きずり倒した生物がどういう容姿をしているのか、想像しただけで正気が削ぎ切りにされていく。
絶叫する耕司の喉が、粘液の圧迫に屈して沈黙した。
首に巻きついた致命的な緊縛が、呼吸や血流のみならず頸椎ごと耕司を断絶すべく、じわじわと圧力を増していく……。

分岐

・郁紀に電話した？

・涼子に電話した？

〈選択：涼子に電話した〉

殺される――そんな思考を最後に途絶えかかった耕司の意識が、連続した二発の銃声によって引き戻された。

『ギャァァァ!!』

おぞましい異形の悲鳴。

全身を縛めていた何かが解け、萎縮して戻って行く。

最初に身体の自由を取り戻した耕司の目に留まったのは、硝煙たなびく連銃身の改造ショットガンを片手に廊下の奥から駆け込んでくる涼子の姿だった。

「先生！」

返答の代わりに、涼子はもう一方の手に持っていた銀色の筒を、床に倒れた耕司へと投げ寄こした。

鈍く光るステンレスのボトル。涼子が語ったところの『切り札』――

「そいつの中身を！　ヤツにぶちまけろ！」

そう叫びながら排莢(はいきょう)を済ませ、新しい実包を取り出して再装填を完了する。

薬室を閉じ、涼子は五歩ほど離れたところで、額(ぬか)ずくようにして膝をついている郁紀にショットガンの狙いをつける。

怪物は――沙耶は、まだ銃で受けたダメージから立ち直れないらしく、ビチャビチャと体軀をのたうたせながら苦悶の様子を顕(あらわ)している。だがこれが先刻の化け物と同様の存在であるのなら、おそらく銃弾は決め手にならない。
チャンスは、今しかない。
「貴様ら……。よくも……沙耶を……！」
肋骨の痛みに歯を食いしばりながら、郁紀が耕司と涼子とを睨む。
逸(はや)る気持ちを鎮めつつ、耕司は立ち上がって慎重に魔法瓶の蓋を開けた。
開封と同時に白い霧が濛々(もうもう)と立ち上り、ふいに周囲が冷気に満たされる。
そうか、こいつは……！
「今だ！　やれ！」
内容物に見当がついた耕司は、その効果の程を天に祈りつつ、床でのたうち回っている肉塊めがけ魔法瓶ごと中身を投げつけた。
煙幕弾のように白く濃密な霧をたなびかせながら、ステンレスボトルは虚空に放物線を描き――そして、爆散した。液化した内容物のすべてが、余すところなくその下で蠢く存在に降り注ぐ。
見れば、郁紀を牽制していたはずの涼子が持つ銃の先端で、またも硝煙が揺れ動いて見えた。
『ヒィギャァァァァァァッ!!』

先刻のそれとは比較にならない、断末魔の絶叫が爆ぜる。
『ヒィッ！　ヒィッ！　ヒィッ！　ヒギギギィッ……!!』
涼子が、白煙に包まれて暴れ狂う怪物の苦悶の叫びに、負けじとばかり放笑する。
「アハハハッ！　どうよ？　マイナス百九十七度だよ！　ねぇ冷たい？　熱い？　アッハハハァ!!　ザマぁないわねぇ!!」
けたたましく笑う彼女の顔は、しかし明らかに正気を踏み外し癲狂の域にあった。
「さあ、後は冷却部分に攻撃を加えて、網状細胞を破壊し再結合を阻害する！　ついでに界面活性剤も加えてみようか!?　さすがに死ぬだろ！　これはさすがに死ぬだろ！　アハハハハハハハハ!!」
「キ、サ、マ……貴様らァ!!」
叫びにドス黒い呪詛を乗せ、郁紀がよろめきながら立ち上がる。怒りのあまり痛みさえ麻痺したらしい。
だが彼と、彼が手にした薪割り斧を、もちろん涼子は見くびるほどに弛緩してはいなかった。口元に哄笑の残滓を残したまま冷酷にそれを引き結ぶと、ショットガンの銃口が蛇の鎌首のごとく頭をもたげる。
「郁紀……！」
しかし今度は、微かに暗い炎が銃口から漏れ出ただけで、その銃身は吼えなかった。

「……チッ⁉」
怒りと狼狽に舌を打ちながら、涼子はショットガンの薬室を開け、不慣れな手つきで不発弾をつまみ出す。その間にも郁紀は、斧頭を床に引きずりながら幽鬼のような足取りで涼子に詰め寄っていく。
危ない――二人のもとに駆け寄ろうと一歩を踏みだしかかったところで、耕司はバランスを崩してつんのめった。
片足が床から離れない。見ると、靴底のゴムが貼りついている。さっき沙耶に浴びせた液体窒素の仕業だった。飛散した極低温が、そこかしこを凍結させていたのだ。
涼子が懐から新しい実包を取り出した。同時に、郁紀が間合いを詰めながら斧を両手に持ち振りかぶる。
「畜生！」
悪態とともに、耕司は靴底を強引に床から引き剝がした。だが二人の間に駆け寄るにはもう遅い。
再装塡を終えた涼子は、ショットガンの薬室を勢い込んで閉め、ようやく照準をつけようと顔を上げた。が――
目を上げたすぐその眼前に、郁紀が現れた。相当に無理を押したのだろう。顔が蒼白になっている。

だが、近い。そして、速い。腕を振り上げるが、狙いをつける動作が間に合わない。一方、すでに両手で振りかぶっていた郁紀の斧は、涼子の頭上から、風巻く唸りとともに振り下ろされるまさにその途中だった。

「やあ、匂坂くん」

涼子が不敵に微笑んだ。

「どうも先生。あなたでしたか。――さようなら」

応えて郁紀の口角があがる。

「やめろぉッ！」

耕司の声は、どちらにも届かなかった。

骨の折れ砕ける音と、腱の断ち切られる音。肉の潰れひしゃげる音とが混然となって飛沫を散らす。

「ぁぐ……ッ」

分厚い刃は涼子の左肩から、鎖骨と肩胛骨、さらに数本の肋までを砕いて肺を潰し、胸の半ばまで達していた。衝撃に凝然と目を見開いた顔のまま、涼子の唇から間欠泉のように血の筋がほとばしる。

即死――で当然の傷だったが、涼子はいかなる意志の力を振り絞ってか、走馬燈と引き替えに幾許かのアディショナルタイムを勝ち取った。血に濡れた唇をニヤリと笑みの形に浮かべると、

天頂に向けてあげたままだったショットガンを、ゆっくりと下ろす。
　その銃口は郁紀にではなく。――横に、向けられていた。
　狙う先には、体表の半分に絶対温度七十七ケルビンの白い霜を屍衣のように纏い、それでもまだ弱々しく蠢いている沙耶がいた。
「……そして。改めて、はじめまして。『沙耶』」
「やッ……やめろぉぉぉお!!」
　郁紀が叫び、涼子の銃から怪物を護ろうと身体ごと飛び出す。
　十二番ゲージの銃声が重なる。
　耕司が撃った拳銃弾とは比較にならない轟音と閃光が、廃墟の空気を振動させる。
　その腹に響く音と共に、郁紀が後ろへ吹き飛んだ。刹那、その脇から下腹にかけボツボツとグロテスクで小さな黒い花が咲き、肉が刮げ飛び、たちまちドロリとした血が溢れ出すのを耕司は見た。
『グガアァァァア……ァァア……ッ!　フミ……ノ……リ……ィィ……ィ……!!』
　破壊は徹底的だった。
　元より切りつめた銃身であることから絞りが極端に甘く、ペレットの数発を郁紀が引き受けたところで、狙いにも威力の大勢にも影響はない。
　それぞれが死を呼ぶ九粒のペレットのうち三発が郁紀に、六発が、最も憎き標的に着弾した。

その衝撃だけで、沙耶が液体窒素に冒されていた部分は、軟性を取り戻すまでもなく跡形もなく消し飛んだ。氷結したまま粉微塵に砕け散った体組織が、文字通り粉雪のように部屋一面に降り注ぐ。

また、氷結せずに原形質流動を保っていた部位も、体液が集中し高潮していたため衝撃波が伝播しやすい状態となっていた。数カ所が内部より爆発するように出血する。

それは、沙耶の特性をもってしても塞ぎ得るレベルの傷ではなかった。

体表の半ば近くを引き剝がされたその身体から、中身が——およそ生物の組成とは思えないような毒々しい色の液体や粘液や脂を噴き出し、周囲を侵していく。

『……ァ……ァ……ァァ……ブ……ノィ……』

細く、悲しげなほどに弱々しい声で啼きながら、怪物が死の痙攣に身を震わせる。

「沙耶、沙耶……ああ、沙耶……！」

郁紀

僕は床の冷気を舐めるようにして、前のめりに倒れていた。

銃で撃たれ、一瞬だけ気を失っていたらしい。

それよりも今は……いったい何トンあるのかわからないような、果てしなく重たい頭をじりじりと持ち上げる。

いた。

沙耶が……沙耶が視線の先で倒れ、弱々しく震えている。

「……ァ……ァ……ァァァ……郁……紀ィ……」

「沙耶、沙耶……ああ、沙耶……！」

這いずって、這いずって。懸命に沙耶の下へ向かう。

「ッグ、ガァァァァ……ッ!!　ウアァァッァ!!」

床から飛び出した何かが腹の空いた穴に引っかかり、腹部に灼熱のような痛みの炎が灯る。だが、今の僕にはそれを避ける余力も、身体を持ち上げる力すらない。そのまま進むしかない。

長い、時が過ぎた。

永遠にも感じられる五十センチを這いずって、ようやく沙耶の手に僕の指が届いた。

「……郁紀。来てくれたんだね……」

手を重ねる。ピクリと沙耶の指先が動くが、冷たい。

もっとも、僕も血を失いすぎている。彼女のことをとやかく言えるほど、温かくはないだろう。

それでいて血の気の引いた彼女の顔はびっしょりと汗に濡れ、まるで熱病にうかされるかのように、浅く閉じた瞼と唇を震わせている。

「当たり前だろ……」

もっと彼女の近くへ……。

両肘をつき、力の限りに上体を持ち上げる。

ブツリと音がして、銃弾でズタズタに裂けた腹腔から腸がまろび出た。

血に塗れ、濡れ色に光る、それは健康的な肉色の腸だった。自分の身体ならば正常に見えるものらしい。他人事のようにそう思う。僕はもう、健康とは言いがたいのだが。

「さ、沙耶……」

僕の声に反応し、沙耶がゆっくりと目を開く。ぼんやりと夢見るような眼差しで、怯えきった僕の顔を見返す。

「郁紀……ごめん。大丈夫……大丈夫だよ。ただちょっと……痛いだけ……」

「ほ、本当に……？　沙耶……だ、大丈夫なのかい……」

大丈夫なわけがない。にもかかわらず、狼狽しているのは僕だけだった。

沙耶自身はまるで、すべてを承知しているかのように落ち着いている。

それどころか、僕を安心させようと穏やかな笑みさえ浮かべていた。

「郁紀こそ。そんなになって……。もう……」

「ごめん」
「だい……じょうぶ。いったでしょ。私は……他の生き物の身体に細工が……できるんだって。郁紀だってなんとか……してあげるよ。ぜったい……」
　他の生き物の、身体。
「それは……沙耶。自分には……自分の身体には使えないのか？」
　沙耶が、小さく頭を振る。
「わたしは……もう、いいの」
「よくないよ！」
　沙耶を失う――想像さえもしたくない最悪の可能性。僕は、自分がまるで何もできない赤子に逆行したかのような不安と絶望に押しつぶされそうになる。
「……ッ、さ、沙耶……！　なんなら僕を……食べてくれたっていい！」
「郁紀……？」
「だ、だから。死ぬなんて言わないでくれ。君だけでも生きて……」
　沙耶はああ言ったが、自分の状態はよくわかっている。もう、僕の内臓はぐちゃぐちゃだ。下手な切腹のようなもので、むしろ長く苦しんでゆっくりと死ぬだけだ。
　だったら、いっそ……。
「フフ……。ちがうよ、郁紀ったら、ヒドいよ。カン違い。そうじゃゃ……なくて」

ゆっくりと、沙耶が上体を起こす。ボロボロの身体で僕の頭をふわりと優しく抱き、膝の上に乗せ床に座る。
「……びっくりしちゃった。まさか、今。こんな……タイミングで、来るなんて……」
「なんのことだい、沙耶。一体……なにが……」
頭を抱かれたまま、仰向けで沙耶を見あげる。今にも腐れ落ちそうな肉色の天井が見えた。つまり、現実においてもこの廃墟は崩れかけているのだろう。
そんな落莫（らくばく）とした光景を背にしてさえ、僕の顔をのぞき込み、優しく微笑む血塗れの沙耶は美しかった。
「怖がらないで……昼間、言ったよね。徴が……来たの、郁紀。あなたと、私の、たったひとつの、希望（シルシ）……」
シルシ……？
「どういうことだよ？　わけがわからないよ。沙耶、しっかりしてくれよ……！」
身体の痛みと、沙耶を失う恐怖とで泣きじゃくる僕に、沙耶が笑いかける。
それは、まるで子供をあやす母親の笑顔だった。
「沙耶はね……頑張るって決めたの。だって、郁紀は……沙耶のこと、可愛いって……綺麗だって……そう言って、くれたから……」
「頑張らなくったっていいよ！　……沙耶。僕は、沙耶、君さえいれば……！」

「……あはは。でもね、郁紀。お願いだから、頑張らせて。だって――」
呆れたような苦笑いの表情を見せてから、沙耶は僕に顔を寄せ、囁き声で秘め事を打ち明けた。
「君さえ、じゃなくなるんだから。郁紀」
「え……？」
「産まれるんだよ……沙耶と、郁紀の、子供たちが……」
僕の頭の中は、しばらく完全な空白になった。
「そんな――いつの間に？」
「……私もね、びっくり。……ねぇ、郁紀」
その細い身体で今どんな苦痛を受け止めているのか、沙耶は息も絶え絶えに、それでも両腕を差し伸べて僕の頭を掻き抱く。
「私のこと、ぎゅって抱いていて」
「……うん」
僕は頷いた。頷くしか他になかった。溢れ出そうになる涙をこらえるために、声を出す余裕はなかった。いま勇気を振り絞って痛みに立ち向かっている沙耶に、涙なんて見せられるわけがない。
最期の力を振り絞り、両手を天に高く差し上げる。

僕の腕の中で、いつになく沙耶の身体は熱かった。ときどき背筋から四肢へと駆け抜ける痙攣は、痛ましいほどに激しく、ともすれば彼女の脆い身体をバラバラに壊してしまいそうなほどだった。

祈るような想いで彼女の背を抱き、その熱を精一杯引き受けようと力を込める。

どれくらい、二人でそうしていただろう。沙耶が、ゆっくりと瞼をあげた。

焦点もなく曇った眼差し。その目にもう何も映っていないのは明らかだった。

それでも沙耶は僕を見ていた。僕の顔のあるあたりに、僕の表情を想い描いているのがわかった。

「約束した……これが……最後の、プレゼント」

「うん」

「……喜んで、くれると、いいな……」

「嬉しいよ。当たり前だろ」

僕は精一杯の意志の力で、明るく弾んだ声を出した。

沙耶はきっと、笑顔を思い浮かべてくれたと思う。僕の泣き濡れて滅茶苦茶になった顔は見られずに済んだと思う。唇から溢れた血は、見落としてくれたと思う。

「郁紀……私を愛してくれた、あなたに……この惑星を、あげます……」

沙耶の囁きは苦痛に枯れて、力なく、だがそれでもなお恍惚と酔いしれるような響きがあった。――喜びに。

もぞり、と、沙耶の背中が蠢いた。

そして膨らんだ。

「この世界は、きっと……きれいな、場所に……なるから。沙耶と……郁紀の……ためだけの、世界に……」

謳うようにそう呟いて、それから――

彼女は、咲いた。

そうとしか僕には形容できなかった。突然、室内を覆っていた闇がすべて払われ、一面が月明かりの下に光る、美しい満天の肉の天蓋へと変わる。

「沙耶……」

「時間は、もう少し……かかるかもしれないけれど」

沙耶の背中から、まるで羽化した蝶の羽のように、大きく伸びやかに拡げられた無数の何かが……花弁が、ゆっくりと咲いて開いた。

それらを彩るまばゆい輝きは……花びらの一枚一枚の表面をびっしりと覆う、光の粒子のような鱗粉だった。

その沙耶の花びらに触れ、廃屋の天井と壁の大部分が塵と化し音もなく崩れ去る。

「約束、だから」

「沙耶」

僕は首を振る。時間なんて、いくらかかかったって構わない。



それよりも……。
「……さよなら、なのか？」
涙を悟られないよう感情を隠し、僕はごく短く沙耶に問うた。
「——ううん。これはね。——始まり」
今度は、沙耶がその首を振る。
苦しみは、すでに越えたらしい。沙耶の表情は今、安らかに満ち足りていた。
「私と——郁紀の——世界の、始まり——」
風に乗って、光の粒が運び去られていく。輝きの流れになって、冬の夜空へと舞い上がり、凍てついた夜を染めていく。
美しかった。圧倒的に、絶望的なほどに美しかった。
新しい世界の幕開けの、古い世界の滅びの唄。輝く生命はいま自由を謳歌し、勝ち鬨（どき）の声を上げて、この広く肥沃（ひよく）な大地へと解き放たれていく。
かくも広遠なる癒し——
かくも悠久なる至福——
僕たちは、僕たちの歓喜の色でこの世界を染め上げる。
「……これからは、ずっと一緒だね」



エピローグ

自宅　耕司

「ねぇねぇ、今度のスキーだけどさ。今年は、どっかスケートも遊べる所にしない？」
隣に座っている青海が、剝き出しの頬骨をカタカタと鳴らしながら提案した。
身体中を虫食いのように嚙み千切られて、彼女は随分痩せたように見える。以前には、少し腰回りに肉がついてきたのだと気にかけていたが、どうやらもうダイエットは必要なさそうだ。
「ハハ、そういえば青海って、このあいだ初めてスケートやったんだって？」
青海の突拍子もない提案を、テーブルを挟んだ向こうの郁紀が笑って受けた。たしかに笑ってはいるのだが、その声はゴボゴボと不吉な音を伴っている。見れば、その脇腹から下半身にか

け、三つの黒い穴が蓮の花托（かたく）のように空き、黒い血を流しながら蠢いているのだった。郁紀の声はその穴から発せられており、表情と口は笑顔を形作ったままで固まったまま動かない。

「二十歳になって初体験ってのは、今日日そうそういないんじゃないかな？」

「子供の頃は何となく怖かったのよ。あの靴、なんだか刃物みたいでさ」

「うん解る。あの靴で頭を思い切り蹴られたら、きっと薪割り斧でたたき割ったみたいになっちゃうよね。僕が、耕司をそうしようとしたみたいにさ」

郁紀のぞっとしないジョークに、その隣の瑶が声を立てて笑う。

その表情からは陰のようなものが消え、すっかり明るくなっていた。こんな風に朗らかに笑うなんて、昔の彼女からは想像もつかないことだった。

「でも、いきなり蹴って殺せたの？　青海ちゃん、凄くない？」

「要領はステーキとそう変わるもんじゃないからな。血抜きを素早くして、肉の鮮度をコントロールする感覚とか」

「郁紀にそう言われたもんだからさ、騙されたと思って殺られてみたワケよ。そしたらもう楽しくって」

この、そこはかとない違和感はなんだろう？

何かがおかしい。

それと指摘はできないが、何かが……。

「ふぅん……私も食べてみたいな。青海ちゃんのお肉のステーキ」
ああ、そうだ。三人をみて、耕司はやっと気がついた。
瑶だけがあの時、あの場所で、皆と談笑していた彼女の姿のままなのだ。
「なぁ津久葉……」
「うん？　どうしたの耕司くん？」
「お前だけ、なんで……普通なんだ？」
質問の意味が解らないのか、瑶はきょとんとして小首をかしげる。
「普通って？　私はいつも普通だけど？」
「でもお前、たしか、あのとき――」
「ああ、うんうん」
耕司の言わんとするところを察したらしく、納得顔で頷く瑶。
「なんだ、私が耕司くんと違う姿になってた頃のこと？　ずいぶん昔の話じゃない」
「昔……なのか？」
「そうだよぉ」
瑶はふたたび、瑶らしからぬ朗らかな表情で、耕司の当惑を笑い飛ばす。
「耕司くんが私を殴り殺した時のことだよね？」
「……ッ」

「えー、耕司。瑶にそんな酷いことをしたの？」
青海がケタケタと嗤った。
「そうさ。耕司はそういうヤツなんだよ青海。だから僕は、瑶の仇をとろうと――」
郁紀は言いかけるが、瑶がたまらずに吹き出す。
「ふふ。そもそも、私をけしかけたのは匂坂さんですけどね」
「しかも、あたしを食べておいてその言いぐさ」
「いや、それを言われると弱いな。僕が悪かったよ。謝る。ほら、この通り」
「よし、許す！」
三人が仲良く談笑している様子をみて、思わず耕司もつられて微笑んでしまう。
何かがおかしい。でも、まるで昔に戻ったようで――
「……あ、話が脱線しちゃったね」
「いや、いいんだ」
「とにかく、ぜんぶ済んだことだよ。だから、耕司くんも気にする必要なんてないよ」
「そうか……。だったら、いいんだが」
瑶が楽しそうに嗤う。
青海も嗤っている。

包丁で切り出された肋骨の間から、ヒューヒューと鞴のような音が漏れている。身体に空いた散弾銃の穴から、タールのような黒くドロドロとした何かを流し、そして郁紀も嗤っている。

「うん。だって耕司くんも、今じゃ私たちと同じじゃない。ほら」

「――ああ」

ああ、そうか。

耕司は自分の手足を見下ろし、そこにブヨブヨとした幾本もの触腕が蠢いているのを眺めて、すべてを理解した。

俺は――

目が覚めると、枕もマットレスも寝汗でぐっしょりと濡れていた。

いつもの、悪夢。もう何度目になるのかも判らない。何かが麻痺しつつあるのか、近頃では叫んで跳び起きるようなこともあまりなくなった。

ズキズキと偏頭痛に疼く頭を抱えて、耕司はベッドから上体を起こす。

午前四時。

休息にはまだ全然足りてない。だが、今夜はこれ以上眠れないだろう。

今はとりあえず、煙草だ。一箱あれば朝までは保つ。昨日の買い置きはどこに仕舞ったんだったか。

ぼんやりと居間まで彷徨(さまよ)い出て、そこでまた耕司は馴染みの客人と出くわした。

「ひどい有様だね。まったく」

「——ああ、先生。いたんですか」

ダイニングテーブルに座っている丹保涼子医師は、今日もいつものように土気色の顔でマグカップのコーヒーを啜っていた。見覚えのある、ファミレスのマークが入ったマグカップを握っている触手を含め、その右半身は溶け落ちたように崩れ、異形化している。

「辛そうじゃないか。もう、ずいぶんとまともに眠れてないんだろう？」

「そうでもないですよ。薬を飲めば、わりと何とかなります。まだ」

気さくに受け答えながら、耕司はテーブルの差し向かいに腰を下ろす。

さっきのような凝った演出の悪夢よりは、まだこういう幻覚の方が与(くみ)しやすい。症状としては、よりクリティカルなのかもしれないが。

「まだ？」

「ええ。まだ」

「だから何度も忠告したんだ。あのとき聞き入れていれば、君もここまで追いつめられることはなかったろうにね」

「もう止めましょうよ、それは。過ぎたことじゃないですか」

「へぇ」

涼子は生前と同じ、冷たく躁的に歪んだ含み笑いで身体を揺する。半ばやつらと化した身体の一部が、湿った音をたててミジミジと揺れ動く。

「そう……折り合いをつけてるんだ」

「先生だって、そうだったんでしょう？　普段は優秀な医者で通用してたんだから」

「君ももう判っているだろう？　上辺を取り繕うだけなら　そこまで難しくはない」

死体は肩を竦めて——といっても動くのは無事な左肩だけだが——さも不味そうな顔でまた一口コーヒーを啜る。

その際、口中に人間の舌とはおよそ異なる口器構造が見えた気がしたが、耕司は気にしないことにした。

「でもね、たぶんこの先はもっと悪くなるよ。なにせ君は一線を越えてしまったんだ。一度火の通ったゆで卵が、生卵に戻る道理がない。そうだろう？」

耕司の言葉を待たず、死人はマグカップをコトリと置いた。

「恐怖に茹（ゆ）だった脳も同じことだ。不可逆なんだ。秒針みたいにね。確実に進むのさ」

そうなのだろう。

人は夜が巡り来るたびに夢を見る。記憶がいくら遠ざかろうと、悪夢は夜毎に新しく生え代わった牙を、耕司の心に突き立てる。

そうやって心の狂気は、じわじわと種から芽吹き、深く根を張り、やがて耕司に残されたすべてを覆い尽くしていくのだろう。

「へぇ？」

「ですが、俺は、先生っていう前例を見て学んでますからね。抜かりはありませんよ」

耕司は自信の笑みで頷き、席を立って洗面台まで移動すると、鏡の裏の薬棚に隠してある凶器を取り出した。

奥涯の拳銃。耕司があの夜から持ち帰った、異界の、唯一の忘れ形見。

「随分と苦労しましたが、ようやくその筋の人間と渡りがつきましてね。弾も買ってあります。驚きましたよ。銃そのものより値段が張るなんて」

「おやおや」

薬棚の扉を閉める。表面の鏡にはテーブルについたままで上体を反らし、喝采（かっさい）するかのようにマグカップを掲げている涼子が映っていた。

「で、何発買ったわけ？　弾は」

「一発だけです」

銃口を、ゆっくりと咥え、離す。

「いざという時には、今度こそ先生の『ご提案』に従いますよ。それ以上、必要になるような状況は――俺は願い下げなんで」

「ふぅん……」
鏡の中の死者は、どこか神妙な表情で頷いた。
「ほんと、弁えてるんだね。戸尾くん」
しばしの沈黙。
耕司としては、幻覚を相手に湿っぽい雰囲気になるのは遠慮したいところだった。
「ねぇ先生、いい加減ファミレスのコーヒーは止めましょうよ。何なら俺が、多少はまともなやつを淹れましょうか――」
言いさして耕司が振り向く。そこには無人のダイニングテーブルがあるのみだった。
「……」
首を振る。
一本目の煙草に火を点け、深々と紫煙を吸って吐き出しながら、耕司は一人居間にくつろぎ、掌中の拳銃に見入った。
いま自分が危うい均衡の上に立っていることは、耕司も自覚している。
涼子が『最後の一線』と言っていた場所は、すでに耕司の遙か後方にある。
もはや戻ることは叶わない帰還不能点を越え、奥涯雅彦の妄想も、丹保涼子のパラノイアも、今やすべてが現実に実在する脅威として彼に狂気と絶望の何たるかを叩き込んでいた。
世間では、匂坂郁紀は連続猟奇殺人犯として指名手配されている。

無人となった彼の自宅と隣家の鈴見家から大量の人肉が発見されるまでに、さほどの時間は要さなかった。両家の冷蔵庫の中からは、鈴見洋佑とその妻子、そして高畠青海と総計で四名の遺体が発見された。

遺留品の中には津久葉瑶の衣服もあったが、不可解なことにとうとうその遺体は発見されなかった。

ただある種の粘菌にも似た、しかし人間のそれではないため、詳細な鑑定は行われずに終わった不明生物の組織が匂坂家からは多量に、鈴見家からは幾ばくか発見されたことを、耕司はとあるルートから情報として得ていた。

沙耶の存在は――そもそも認識されていないものらしく、どの報道からも意図的ではなく失われている。

同時期に発覚した、郁紀の主治医だったT医大の丹保涼子医師の失踪についても、警察は関連性を疑い慎重に捜査を進めている。だが、その進捗がはかばかしいものではないこともまた、耕司は摑んでいた。

耕司自身も、警察には郁紀と山荘に行ったところまでを把握され、幾度かの参考人招致を経ていた。ただ、客観的には、郁紀の偽装行動に振り回された被害者候補以上の何者でもなく、ほどなく解放され、世間的には殺人鬼に恋人を殺された元友人K・Tとして報道されるにとどまった。

山荘の隠し部屋は、発見される気配すらない。最後の舞台となった廃墟の敷地に人知れず埋められた二人と二匹……ないしは四体の遺体についても、おそらく見つかることはないだろう。少なくとも、今しばらくの間は。耕司にも、それらを明るみに出す意図など毛頭ない。これまでも、そしてこれからも。

奥涯の手記は戯言ではなかった。涼子の回収したそれを継承し、暗号めいた記述を一貫して読める形に編集し、読み漁り、全容の一端らしきものが垣間見えるに至り、そしてあの――『沙耶』の正体らしきものを知るまでに至り、その時、耕司はとうとう自分が一線を越えたことを知ったのだった。

ならば、最後のあの、輝く夜の翼のような、花びらは。あるいは空に飛び立つ無量の綿毛たちのような、あの光は一体……。

嫌な予感しかしなかった。

――『愛の神託』、『別離』。タンポポの花言葉が、隠喩のように脳裏で囁く。

数ヶ月が過ぎた。

ここのところ、巷間（こうかん）を流れるニュースにも変化が起きている。

世間の情報の消費速度の例に漏れず、すでに食人鬼、匂坂郁紀に関する報道は流れなくなって久しい。置き換わって流れているのは政争にゴシップ、スキャンダルといった相変わらずのものばかりだったが、耕司が興味を持ったのはそれらではなかった。

イレギュラーやユニーク、時にフェイクニュースとされるもの。それに、海外のアンチモラルな事件たち。注意深く見ると、それらを中心にして、明らかに耕司が知る今回の事件の『真実』側に類似した内容の事件が増えていた。

国外における最初のケースは、おそらく中国。とある都市の産院で、一斉に奇形児が生まれたというニュースだった。概要はただそれだけのものだったが、同時に院内で異常体マウスが大量発生し、警察が関連を調べているという記述が耕司の心をざわつかせた。

次いでフィリピン、ロシア、インド、ホノルル、カナダ、オーストラリア。その内容は殺人を始め、変わり種では研究用原子炉の圧力制御プール内に立ち入り、無理心中を遂げた研究者の事件などもあり多種多様だったが、ひとつだけ耕司にしか理解し得ない特徴があった。

どの事件においても『異形』や『肉体の変容』――『少女』が目撃されていること。

全員、死んでいた筈だった。

郁紀も、ひょっとしたら……いや、おそらくは瑶であろう肉塊も、涼子も、そして化け物――沙耶も力尽き、死んだ。

何もかも、誰も彼もが死に絶えていた。
ちゃんと殺したはずだ。
四つの遺体は、大きめの穴を掘ってそこに放り込み、埋めるだけで精一杯だった。半ば意地だけで体力を振り絞り、沙耶のみを離れた場所に埋めた。
ただ、その残った肉体が、まるで風化したミイラのように軽かったことだけが、今でもやけに気にかかっている。あれは——

人をして万物の霊長などと、そんな能天気な戯言を誰が言い出したのだろう。
人類の英知だの、勇気だの、未来だのと、そんな言葉に価値があるものと信じて疑わずにいられるのは——深淵を覗き込んだことのない、幸福な者たちだけだ。
戸尾耕司は思う。
そんな無知にして蒙昧、純真にして無垢なる人々と幸福を分かち合うことは、おそらく自分には二度と叶わないのだろうと。
彼は知ってしまったのだ。——聞きかじった、利いた風な知識としてではなく、体験として、実感として、醒めぬ悪夢として。
決して、時間が癒やせないものもあるということを。

それは、遅効性の毒に似ている。耕司の中の涼子の言葉を借りるのであれば、それは生卵に通る、恐怖という名の熱でもあるのだろう。

あるいは……変質し、変成し、それは真実という通り名で、闇の向こうから不定形に迫り来るのだ。

おそらくは、何かが始まっている。

アメリカ、メキシコ、イラク、スーダン、ポルトガル。耕司は、気になるニュースを片端からスクラップし、発生箇所、時系列順に分類してみた。事件たちは、ゆっくりと放射状に、同心円を描くようにして拡散していた。

その中心は、日本を指している。

板橋の妊婦殺し、朝霞の失踪事件、新宿の連続自殺事件。筑波、諏訪、福島、広島に帯広。諸外国に先んじ、国内で起きた事件も引き比べれば、始まりの地がどこであったかは容易に特定できる。同心円の中心──始まりの地は、言うまでもなく、郁紀らが眠るあの終わりの地だった。

戸尾耕司は思い出す。

驚くほどに軽くなっていた、沙耶の遺体を。それはまるで、全霊を賭して産卵を終え、痩せさらばえた……。

あの光は、あの綿毛たちが。ひょっとすると、郁紀と、沙耶の――

純粋な酸素は、実は猛毒なのだと言う。

酸素は五倍の窒素で包まれてはじめて、大気として許容される。同じことだ。戯れ言で希釈された片鱗だけの真実を呼吸することで、人は健やかなる心を維持できる。

〝どんなに世界が底抜けに滅茶苦茶になっていこうと――〟

耕司の脳裏を過ぎるのは、生前の、本物の丹保涼子が口にした言葉だった。

〝悲鳴を上げて逃げ回る以外の選択肢が、自分にはあるんだって――〟

それは紛れもなく、彼女が胸に秘めていた慰めそのものなのだろう。それは、夜毎に襲い来る悪夢に立ち向かうための、懐中に握りしめた大いなる護符であったに違いない。

先人の教訓を胸に刻んだ耕司には、もちろん、準備に抜かりはない。

ただ一発の弾丸は、いつでも洗面所の鏡の裏で、耕司に救済を保証してくれている。

了

あとがき

まずは読了いただきありがとうございました。お疲れ様でした。
大槻涼樹と申します。基本的には原作厨です。
いわゆるファンダメンタリスト、原作原理主義者という一番面倒臭いタイプのアレであり、本来であれば本書のように原作者とは別の人間が神聖なるテキストに手をかけ、小説化といった段階でマイナス二十五ポイント、コミック化やアニメ化の段階でさらにマイナス二十五ポイント、あげく実写化の話が音に聞こえてきた段階でマイナス五十ポイントが仮確定、おもむろに有罪ボタンに手をかけ鬼連打のためアップを始める——といった類の人間ではありますが、しかし今回ばかりは助けてください。こうして当事者になってみると、ましてや元よりファンの多い本作となると圧が半端ない。まだ死にたくない。
とまれ合縁奇縁の果て、原作である『沙耶の唄』——今回も素晴らしい挿画を描いてくださった中央東口氏を原画担当、いまや押しも押されもせぬヒットメイカーとなった虚淵玄氏をシナリオ担当として、ニトロプラスさんが二〇〇三年十二月二十六日に送りだした名作ＰＣゲーム——の発売から実に十五年の時を経て、このような形で皆様にお目にかかることとなりました。

格闘ゲームに出てみたりアメコミになってみたりと、いままで一筋縄ではいかない謎の展開をしてきた沙耶ですが、そう、なんと――数えて十五年目のノベライズ。

ある面においては虚淵氏の代表作ともいわれるタイトルですから、ここまで手つかずだったのは不思議としか云いようがないのですが、もちろん水面下では様々に検討が重ねられてはいたようで、大槻の元に縁が繋がったのもそこそこ以前でありました。

が、その後は順調に大人の事情で停滞してみたり頓挫してみたり。恋をしてみたり涙してみたり。愛し合ってみたり憎み合ってみたりを繰り返してあっという間に季節は巡り地球は周回を重ね、あげく最終的には逆に時が歩み寄って来ました。十五周年のいま出さんでいつ出すんだよ七十六周年かよハレー彗星かよいいから出せよ、といった神風が。

さて。とにもかくにも――はじめに、ひかりあれ。原作あれかし。

本書の執筆にあたっては、実際に原作で使用されたスクリプトの参照から始め、後発のベスト版では改訂された表現なども確認、さらに書籍での読み心地や時代性を考え、作中での語彙や登場するガジェットに関してはアップデートこそさせていただきましたが、特にセリフなどは極力変えず、耕司はアコードに乗り続け、全体としてはとにかく魂の色が重なるように留意し、そのうえで本来は分岐している三つのエンディングを、如何に小説というまな板にのせるかという点に心を砕きました。

果たして上手くいきましたかどうか。なにとぞご確認のほどよろしくお願い致します。
未読の方に向け告解させていただきますと、最終的には原作の三つのエンディングのいずれとも完全には合致しない形となっています。分岐しない一本の物語として見た時、各エンディングにちりばめられた必要情報を考えた時、気がつくと私は原作厨としての禁忌を犯していました。
ぶっちゃけ楽しかった。描いてて。これが禁断の味か……！
とまれ、少しでも楽しんでいただければ幸いです。お手元に原作があらば、実際に引き比べて見ていただいても興味深いと思いますし、サントラがあれば是非読書中のＢＧＭにしていただきたい。本書を読み終わる数秒前に『ガラスのくつ』を流しつつ、ゆっくりカメラを引いていただきたい。そして末永く、本棚やお手持ちの端末のメモリ、または皆様の記憶のどこかに残していただけたなら、これにまさる喜びはありません。
――が。
たとえば、生き残った『彼』は――これからどうなるのでしょうか。
知ってはならぬ、禁断の知識の探索者となり果てた彼が辿る途（みち）の果ては。そして沙耶と郁紀の――二人の恋に侵された世界は一体どうなってしまうのか。彼女の約束とは、どのような形で結実するものなのか。
実は現在『沙耶の唄　第二歌　ノゾミノセカイ（仮題）』の執筆を進めております。

あろうことか続編です。というか、この終わり方で続けられるの？　お前原作厨って云ったの嘘かよ⁉　との声が聞こえてまいります。大丈夫か。はい。

最低でもマイナス二十五ポイントからのスタートダッシュです。うん、頑張る。そういったわけで、もしよろしければ、このタイトルもどこか、心の片隅にそっと取り置いていただければ。……それほどはお待たせしないはずです。はず……です。

といったわけで、またお目にかかれることができますよう、精進してまいります。

ありがとうございました。

最後に。原作者である虚淵玄氏、そのビジュアルを生み出した中央東口氏、ＩＰ元であるニトロプラスさんは勿論、本書に携わる切っ掛けをくださった森瀬(もりせ)繚(りょう)氏、力強いサポートをいただきましたＴ氏、星海社太田克史(おおたかつし)氏、阿部(あべ)まり花(か)氏のお二方による素敵エディティング、さらにここでは書き切れぬ大勢の皆様と副所長（奥さん）と息子マンの協力と半分のやさしさと血と肉と恋と腐汁により本書はできあがりました。

こちらも重ねて、ありがとうございました。

大槻涼樹


星海社 FICTIONS
オ3-01
沙耶の唄
大槻涼樹・虚淵玄 (Nitroplus)
原作脚本／虚淵玄 (Nitroplus)
星海社
「なぜ——僕なんだ?」
「それはね、あなたがひとりぼっちだから」
不幸な交通事故により家族を失った青年・匂坂郁紀。
奇跡的に一命を取り止めた彼には、目に映るものすべてが形を変え、
醜く歪んでしまう不思議な後遺症だけが残った——
そんな郁紀の世界に突然現れたのは、うつくしい少女。
「沙耶」と名乗る彼女の存在は、郁紀の汚穢に塗れた日常を美しい色に染めていく。
彼にとって、それはただ一筋の光だった……。
発売から15年、今なお霞むことなく高い評価を受け続けてきた
虚淵玄(Nitroplus)原作の伝説的PCゲーム作品『沙耶の唄』を、
ノベルゲーム界の先駆者・大槻涼樹×不変の担当イラストレーター・中央東口が
甦らせた、初のノベライズ作品!
大槻涼樹 OTSUKI SUZUKI
シナリオライター。
担当作に『終末の過ごし方』(アボガドパワーズ)、『蠅声の王』(Lost Script)など。
虚淵玄 GEN UROBUCHI
Nitroplus所属のシナリオライター、小説家。
代表作に『魔法少女まどか☆マギカ』、『Fate/Zero』、『仮面ライダー鎧武/ガイム』、『GODZILLA』など。
日台合同映像企画『Thunderbolt Fantasy 東離劍遊紀』シリーズでは原案・脚本・総監修を担う。
中央東口 CHUO HIGASHIGUCHI
イラストレーター。静岡県出身。
『沙耶の唄』、『鬼哭街』、『吸血殲鬼ヴェドゴニア』など、Nitroplusの代表的PCゲーム作品のキャラクターデザイン・原画を務める。イラストを担当した小説作品に『アイゼンフリューゲル』(小学館)、『魔術師スカンクシリーズ』(星海社)などがある。


song of saya
沙耶の唄
SAYA NO UTA
大槻涼樹・虚淵玄
(Nitroplus)
原作脚本／虚淵玄(Nitroplus)
原作／Nitroplus
Illustration／中央東口
☆星海社FICTIONS
星海社 FICTIONS
オ3-01
沙耶の唄
大槻涼樹・虚淵玄
原作脚本／虚淵玄(Nitroplus)
星海社


星海社FICTIONS
オ3-01
沙耶の唄
「なぜ——僕なんだ?」
「それはね、あなたがひとりぼっちだから」
不幸な交通事故により家族を失った青年・匂坂郁紀。
奇跡的に一命を取り止めた彼には、目に映るものすべてが形を変え、
醜く歪んでしまう不思議な後遺症だけが残った——
そんな郁紀の世界に突然現れたのは、うつくしい少女。
「沙耶」と名乗る彼女の存在は、郁紀の汚穢に塗れた日常を美しい色に染めていく。
彼にとって、それはただ一筋の光だった……。
発売から15年、今なお霞むことなく高い評価を受け続けてきた
虚淵玄(Nitroplus)原作の伝説的PCゲーム作品『沙耶の唄』を、
ノベルゲーム界の先駆者・大槻涼樹×不変の担当イラストレーター・中央東口が
甦らせた、初のノベライズ作品!
大槻涼樹 OTSUKI SUZUKI
シナリオライター。
担当作に『終末の過ごし方』(アボガドパワーズ)、『蠅声の王』(Lost Script)など。
虚淵玄 GEN UROBUCHI
Nitroplus所属のシナリオライター、小説家。
代表作に『魔法少女まどか☆マギカ』、『Fate/Zero』、『仮面ライダー鎧武/ガイム』、『GODZILLA』など。
日台合同映像企画『Thunderbolt Fantasy 東離劍遊紀』シリーズでは原案・脚本・総監修を担う。
中央東口 CHUO HIGASHIGUCHI
イラストレーター。静岡県出身。
『沙耶の唄』、『鬼哭街』、『吸血殲鬼ヴェドゴニア』など、Nitroplusの代表的PCゲーム作品のキャラクターデザイン・原画を務める。イラストを担当した小説作品に『アイゼンフリューゲル』(小学館)、『魔術師スカンクシリーズ』(星海社)などがある。
大槻涼樹・虚淵玄(Nitroplus)
原作脚本/虚淵玄(Nitroplus)
星海社
『沙耶の唄』続編ノベライズ
沙耶の唄
SAYANOUTA
大槻涼樹・虚淵玄(Nitroplus)
原作脚本/虚淵玄(Nitroplus)
原作/Nitroplus
Illustration/中央東口
第二歌 ノゾミノセカイ(仮)
2019年発売決定
オ3-01



song of saya
沙耶の唄
SAYA NO UTA
大槻涼樹・虚淵玄
(Nitroplus)
原作脚本／虚淵玄(Nitroplus)
原作／Nitroplus
Illustration／中央東口
星海社FICTIONS
オ3-01
絶望、
恍惚、
純愛。
ゲーム史に
大きな爪痕を残した
Nitroplusの衝撃作、
その15周年を記念して
初のノベライズが誕生！
☆星海社FICTIONS
星海社

この物語はフィクションです。実在の人物・団体・出来事などとは一切関係ありません。

収録されている内容は、作品の執筆年代・執筆された状況を考慮し、初版発売当時のまま掲載しています。

ブックデザイン　Veia

編集担当　太田克史
編集副担当　阿部まり花

フォントディレクター　紺野慎一
電子書籍ディレクター　松島 智
オペレーションチーム　阿万 愛＋三本絵理

校閲　鷗来堂

フォント制作協力　字游工房＋リアルタイプ＋凸版印刷

制作協力　新藤慶昌堂

本作品は、2018年12月、小社より星海社FICTIONSとして刊行されたものをe-FICTIONSとして電子書籍化したものです。
e-FICTIONSでは、訂正部分や図版点数などが異なる場合があります。

沙耶の唄

2020年9月1日発行（01）

著　者　大槻涼樹・虚淵玄（Nitroplus）

原作脚本　虚淵玄（Nitroplus）

原　作　Nitroplus

発行者　太田克史

発行所　株式会社星海社
〒112-0013
東京都文京区音羽1-17-14
音羽YKビル4F
https://www.seikaisha.co.jp

発売元　株式会社講談社
〒112-8001
東京都文京区音羽2-12-21
https://www.kodansha.co.jp